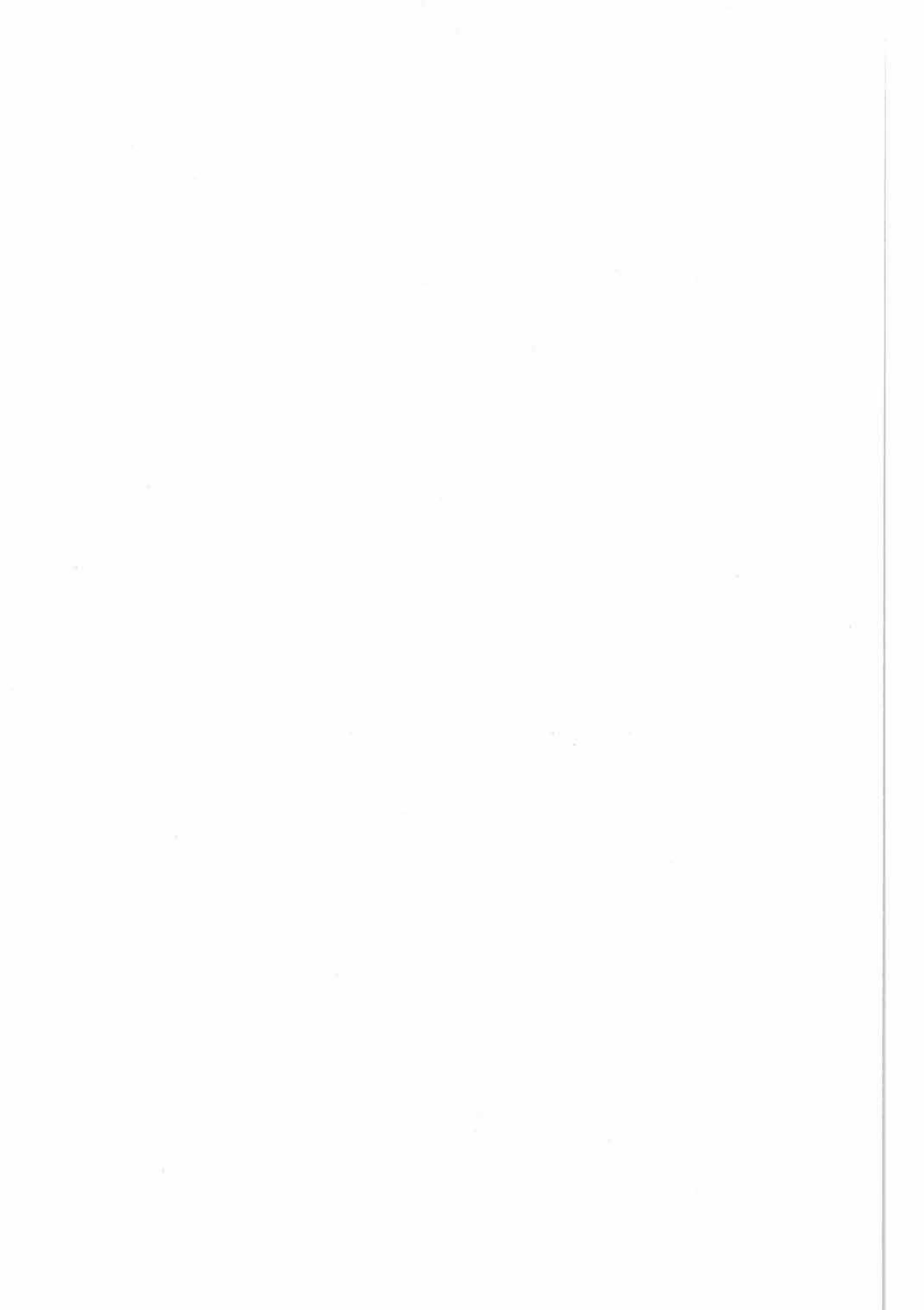


京都府遺跡調査概報

第42冊

1. 田中西遺跡
2. 天若遺跡
3. 蒲生遺跡
4. 百々遺跡
5. 興戸遺跡

1991



序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、本年3月末で満10年を迎え、特別展覧会・特別講演会の開催、論文集の刊行などの事業を計画しましたが、現在、記念論集の発行を残すのみとなっているところであります。これらの諸事業の遂行に当たりましては、皆様方の御協力を賜り、厚くお礼申し上げます。ふりかえってみますと、この10年間に、公共事業は年々増大し、それに伴い、発掘調査は単に件数の増加だけでなく、近年とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査成果について、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行して公表してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成2年度に実施した発掘調査のうち、京都府教育委員会・水資源開発公団・京都府乙訓土木事務所・京都府土木建築部の依頼を受けて、田中西遺跡・天若遺跡・蒲生遺跡・百々遺跡・興戸遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また埋蔵文化財を理解する上で、何がしかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会・日吉町教育委員会・丹波町教育委員会・大山崎町教育委員会・田辺町教育委員会などの関係諸機関、並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 田中西遺跡 2. 天若遺跡 3. 蒲生遺跡 4. 百々遺跡

5. 興戸遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 田中西遺跡	舞鶴市泉源寺766	平 2.10. 2 ～10.31	京都府教育委員会	野島 永
2. 天若遺跡	日吉町天若森杉他	平元.12. 8 ～平 2. 2.23 平 2. 8. 6 ～平 3. 1.30	水資源開発公団	三好 博喜
3. 蒲生遺跡	丹波町豊田	平 2. 9.17 ～11. 8	京都府教育委員会	田代 弘
4. 百々遺跡	大山崎町円明寺夏目 1-4	平 2. 5.15 ～ 8.29	京都府乙訓土木事務所	竹井 治雄 黒坪 一樹
5. 興戸遺跡	田辺町興戸	平元.11. 9 ～平 2. 2.27 平 2. 4.24 ～12.21	京都府土木建築部	伊野 近富

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 田中西遺跡発掘調査概要.....	1
2. 天若遺跡平成元・2年度発掘調査概要.....	5
3. 蒲生遺跡第4次発掘調査概要.....	23
4. 百々遺跡発掘調査概要.....	29
5. 興戸遺跡第6・8次発掘調査概要.....	39

挿 図 目 次

1. 田中西遺跡	
第 1 図	調査地及び周辺遺跡位置図…………… 1
第 2 図	調査地位置図(斜線部分)…………… 2
第 3 図	トレンチ東壁土層図…………… 3
2. 天若遺跡	
第 4 図	調査地位置図…………… 6
第 5 図	調査トレンチ配置図…………… 8
第 6 図	平成元年度試掘調査出土遺物実測図……………10
第 7 図	平成2年度検出遺構実測図……………13
第 8 図	竪穴式住居跡 S H9002実測図……………15
第 9 図	竪穴式住居跡 S H9003実測図……………16
第 10 図	井戸跡 S E9015実測図……………17
第 11 図	出土遺物実測図(須恵器)……………19
第 12 図	出土遺物(石器)及び採集石器実測図……………21
3. 蒲生遺跡第4次	
第 13 図	調査地位置図……………23
第 14 図	トレンチ配置図……………24
第 15 図	E5 グリッド断面図……………24
第 16 図	A トレンチ検出遺構平面図……………25
第 17 図	A トレンチ断面図……………25
第 18 図	掘立柱建物跡実測図……………26
第 19 図	石核実測図……………26
第 20 図	須恵器実測図……………27
第 21 図	敲石実測図……………27
第 22 図	掘立柱建物跡全景……………27
4. 百々遺跡	
第 23 図	調査地位置図……………29
第 24 図	遺構実測図……………30
第 25 図	出土遺物実測図(1)……………32
第 26 図	出土遺物実測図(2)……………34

第 27 図	西国街道側溝検出状況	37
--------	------------	----

5. 興戸遺跡第 6 次・第 8 次

第 28 図	調査地位置図	40
第 29 図	調査地位置図	41
第 30 図	調査地周辺図(トレンチ配置図)第 6・8 次分	42
第 31 図	第 4 トレンチ平面図(中世)	43
第 32 図	第 3・4・10 トレンチ平面図(古代)	44
第 33 図	第 3 トレンチ北壁・第 4 トレンチ南壁土層断面図	45
第 34 図	第 4・10 トレンチ土層断面図	46
第 35 図	第 3 トレンチ平面図(古代)	47
第 36 図	第 4 トレンチ平面図(古代)	48
第 37 図	第 4 トレンチ平面図(弥生～古墳前期)	49
第 38 図	第 4 トレンチ S D 6051 土層断面図	49
第 39 図	第 4 トレンチ東南部弥生土器出土状況	50
第 40 図	第 6 次調査出土遺物実測図(1)	52
第 41 図	第 6 次調査出土遺物実測図(2)	53
第 42 図	第 6 次調査出土遺物実測図(3)	54
第 43 図	第 6 次調査出土遺物実測図(4)	55
第 44 図	第 5・6—7 トレンチ平面図(古代・中世)	58
第 45 図	第 5・6—7 トレンチ土層断面図	59
第 46 図	第 5 トレンチ井戸 S E 8142 実測図	60
第 47 図	第 6～7 トレンチ S D 8183 土層断面図	61
第 48 図	第 6～7 トレンチ井戸(S E 8179)実測図	62
第 49 図	第 8 トレンチ平面図(古代・中世)	63
第 50 図	第 8 トレンチ土層断面図	64
第 51 図	第 8 トレンチ S K 8301 貨幣出土状況	65
第 52 図	第 9 トレンチ平面図	65
第 53 図	第 9 トレンチ断面図	66
第 54 図	第 8 次調査出土遺物実測図(1)	68
第 55 図	第 8 次調査出土遺物実測図(2)	69
第 56 図	第 8 次調査出土遺物実測図(3)	70
第 57 図	第 8 次調査出土遺物実測図(4)	71

第 58 図	第 6・8 次調査出土遺物実測図(5).....	72
第 59 図	第 8 次調査出土遺物実測図(6).....	73
第 60 図	調査地内における推定条里.....	79
第 61 図	推定古山陰道・山陽道と推定条里(部分).....	80

付 表 目 次

付 表 1	平成元年度試掘トレンチ成果表.....	9
-------	---------------------	---

図 版 目 次

1. 田中西遺跡

- 図版第1 (1)調査地全景(北西から) (2)調査風景(南から)
図版第2 (1)トレンチ東壁土層堆積状況 (2)調査地近景(北西から)

2. 天若遺跡

- 図版第3 (1)調査地遠景(東から) (2)12トレンチ遺構検出状況(西から)
図版第4 (1)竪穴式住居跡S H9001(南から)
(2)竪穴式住居跡S H9002(南西から)
図版第5 (1)竪穴式住居跡S H9003遺物出土状況(西から)
(2)竪穴式住居跡S H9003(西から)
図版第6 (1)竪穴式住居跡S H9004(南から)
(2)竪穴式住居跡S H9005(北東から)
図版第7 (1)竪穴式住居跡群(北から)
(2)土坑S K9006及び井戸跡S E9015(東から)
図版第8 (1)井戸跡S E9015上層遺物出土状況(北西から)
(2)井戸跡S E9015中層遺物出土状況(東から)
図版第9 (1)井戸跡S E9015下層遺物出土状況(東から)
(2)井戸跡S E9015(南東から)
図版第10 (1)掘立柱建物跡S B9021(北西から)
(2)掘立柱建物跡S B9022(南東から)
図版第11 (1)掘立柱建物跡S B9023(南東から) (2)調査地全景(南東から)
図版第12 出土・採集遺物

4. 百々遺跡

- 図版第13 (1)調査前風景(南から) (2)上層遺構(北から)
図版第14 (1)下層遺構検出状況(南トレンチ)南から
(2)溝S D03検出状況(北トレンチ)南から
図版第15 出土遺物

5. 興戸遺跡

(1) 第 6 次

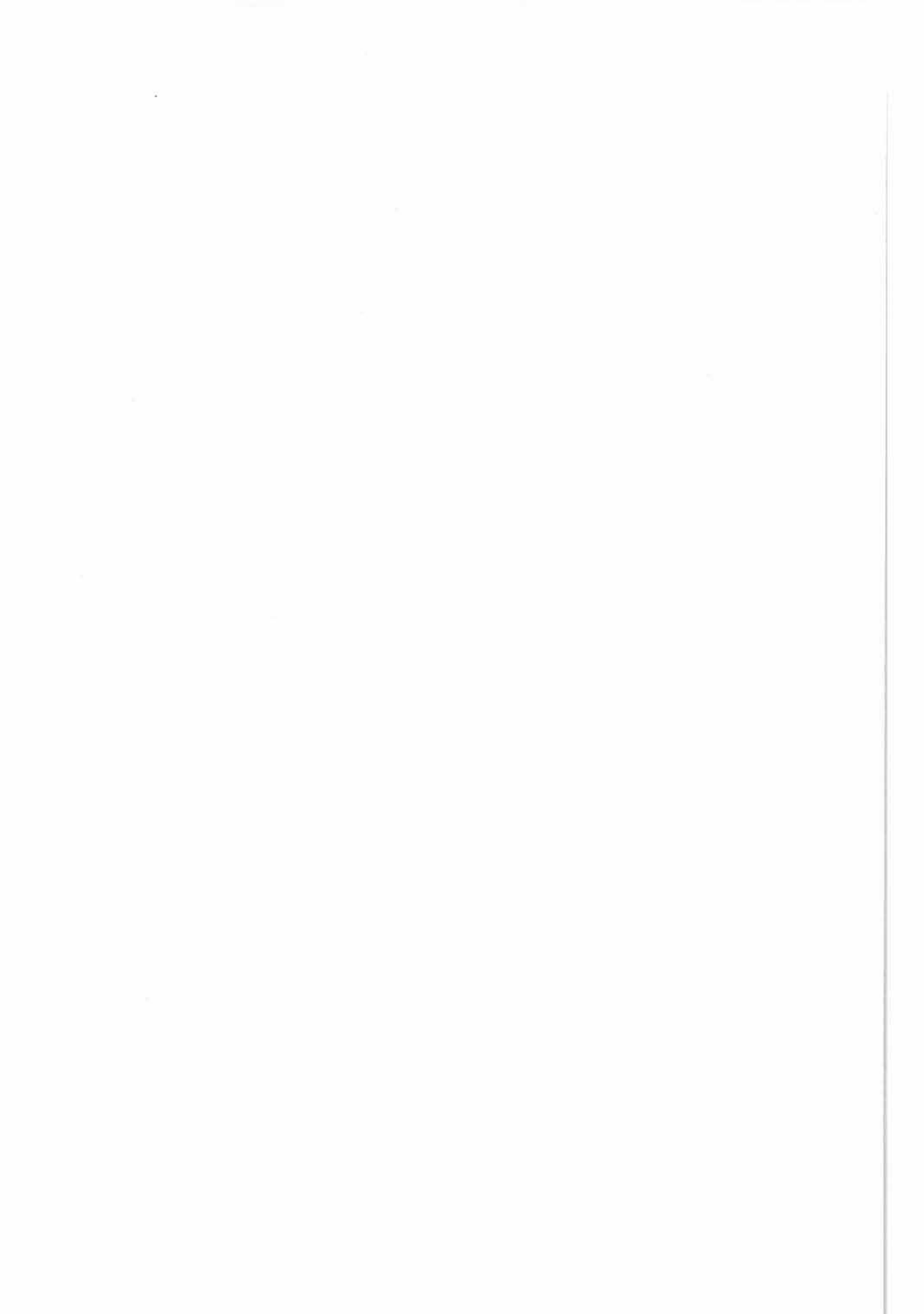
- 図版第16 (1)調査前風景(東から) (2)第1トレンチ(南東から)
(3)第2トレンチ(南東から) (4)第4トレンチ古代面(西から)

- 図版第17 (1)第8トレンチ中世面(西から) (2)第9トレンチ近世面(東から)
 (3)現地説明会風景(西から)
- 図版第18 (1)第4トレンチ中世面(東から)
 (2)第4トレンチS B6042検出状況(東から)
 (3)第4トレンチS B6042掘削状況(東から)
 (4)第4トレンチS X6050検出状況(北から)
- 図版第19 (1)第4トレンチ溝S D8051完掘状況(東から)
 (2)第4トレンチ東南部(東から)
- 図版第20 (1)第4トレンチS X6050検出状況(北から)
 (2)S X6050検出状況(東から)
 (3)S X6052遺物検出状況(東南から)
 (4)第3・4・10トレンチ空中写真(南から)
- 図版第21 (1)調査地全景(西から) (2)調査地全景(南から)

(2) 第 8 次

- 図版第22 (1)第5トレンチ中世面(北から) (2)第5トレンチ古代面(北から)
- 図版第23 (1)第5トレンチ井戸S E8142(北から)
 (2)第5トレンチ井戸S E8142完掘(北から)
 (3)第5トレンチ井戸S E8142墨書土器(南から)
- 図版第24 (1)第6—7トレンチ中世面(東から)
 (2)第6—7トレンチ古代面(東から)
- 図版第25 (1)第6—7トレンチ建物跡S B8195(北から)
 (2)建物跡S B8195柱穴(北から)
 (3)第6—7トレンチ西部、古代面(東北から)
- 図版第26 (1)第6—7トレンチ井戸S E8233検出状況(西から)
 (2)井戸S E8179検出状況(東から)
 (3)井戸S E8179検出状況(西南から)
 (4)井戸S E8179井筒内曲物(東から)
- 図版第27 (1)井戸S E8179井筒南半
 (2)井戸S E8179井筒半割(南から)
 (3)井戸S E8179土層断面剥ぎとり(南東から)
 (4)井戸S E8179土層断面剥ぎとり(南東から)
- 図版第28 (1)井戸S E8179井筒全景(南から)

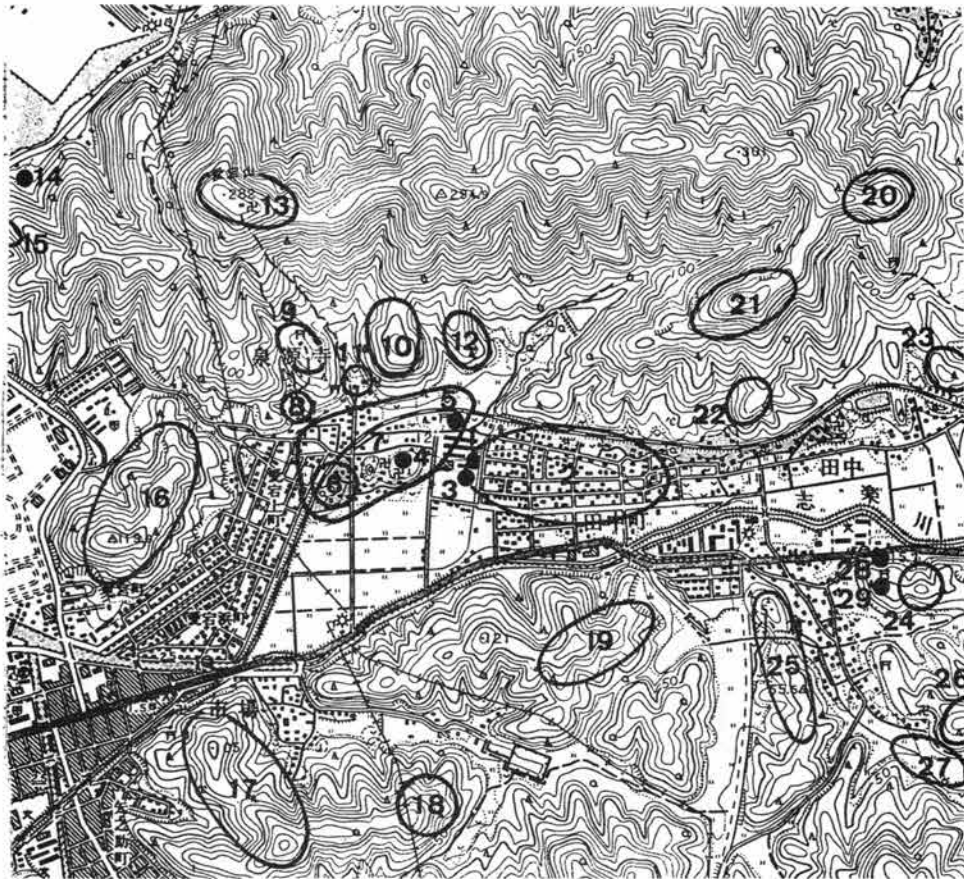
- (2)井戸 S E8179井筒下部(成形痕)
- 図版第29 (1)第8トレンチ 古代～中世面(東から)
 (2)第8トレンチ中央部 古代面(東から)
- 図版第30 (1)第8トレンチ土坑 S K 8301検出状況(北から)
 (2)第8トレンチ土坑 S K 8467(北西から)
 (3)第8トレンチ溝 S D 8385(東から)
 (4)第8トレンチ溝 S D 8385 遺物出土状況
- 図版第31 (1)第9トレンチ 近世面(西南から)
 (2)第9トレンチ北西部 古代面(東北から)
 (3)第9トレンチ 古代面(東から)
- 図版第32 (1)第9トレンチ 古代面(西から)
 (2)第9トレンチ柵 S A 8509(南東から) (3)現地説明会風景
- 図版第33 (1)第10トレンチ 古代面(西から)
 (2)建物跡 S B 6035西部(東から)
 (3)建物跡 S B 6035南東隅ピット(南から)
- 図版第34 出土遺物(第6次)(1)
- 図版第35 出土遺物(第6・8次)(2)
- 図版第36 出土遺物(第6次)(3)
- 図版第37 出土遺物(第8次・S E8179)(4)
- 図版第38 出土遺物(第8次)(5)
- 図版第39 出土遺物(第8次・S D 8385)(6)
- 図版第40 出土遺物(第8次)(7)



1. 田中西遺跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の田中西遺跡の調査地は、京都府舞鶴市泉源寺 766 に所在する。今回の調査は京都府立東舞鶴高等学校のプール建設工事に伴うもので、京都府教育庁管理部管理課の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。現地調査は平成 2 年 10 月 2 日から 10 月 31 日にかけて



第 1 図 調査地及び周辺遺跡位置図

- | | | | | |
|-------------|--------------|-------------|---------------|-----------------------------|
| 1. 調査地 | 2. 田中西遺跡 | 3. 大將軍古墳 | 4. 泉源寺古墳 | 5. 泉源寺遺跡(昭和62年当調査研究センター調査地) |
| 6. トアミ城跡 | 7. 泉源寺遺跡 | 8. 泉源寺此御堂跡 | 9. 泉源寺愛宕城跡 | 10. 泉源寺金比羅城跡 |
| 11. 泉源寺跡 | 12. 泉源寺の場支城跡 | 13. 泉源寺大谷城跡 | 14. 滝ヶ浦古墳 | 15. 滝ヶ浦南古墳 |
| 16. 高屋城跡 | 17. 市場城跡 | 18. 市場支城跡 | 19. 小倉西城跡 | 20. 吉野城跡 |
| 21. 田中城跡 | 22. 田中支城跡 | 23. 安岡城跡 | 24. 小倉阿良須城跡 | 25. 小倉古墳群 |
| 26. 桂正院裏山城跡 | 27. 小倉遺跡 | 28. 小倉窯跡 | 28. 阿良須神社裏山古墳 | |

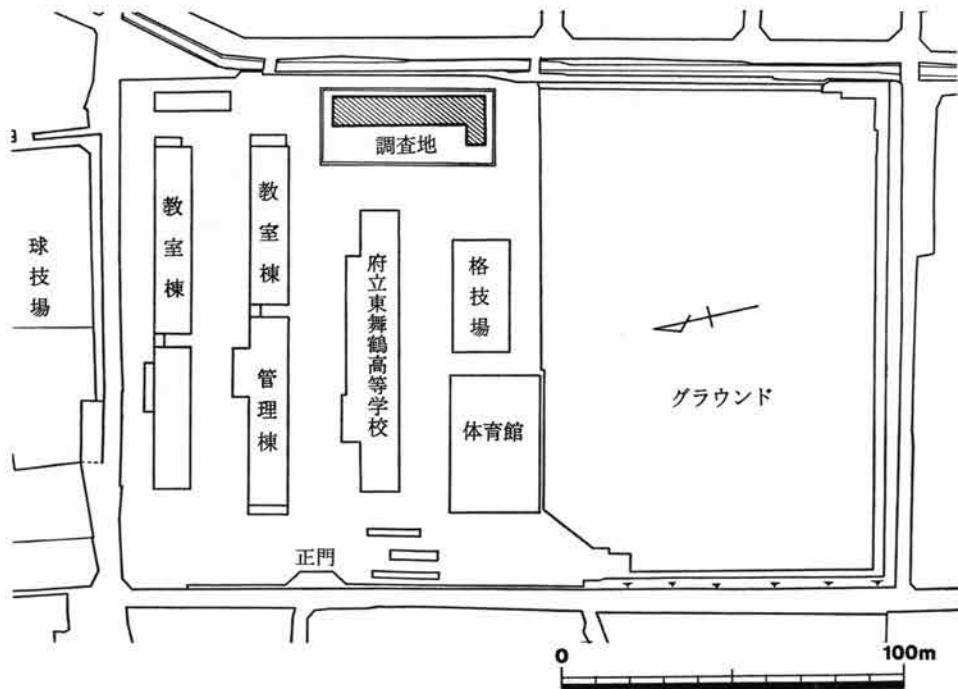
て行った。調査面積は約500㎡である。調査にあたっては、当調査研究センター調査第2課調査第1係長水谷寿克、同調査員野島永が担当して実施した。調査に係る経費は京都府教育委員会が全額負担した。

今回の調査では京都府教育委員会をはじめ、府立東舞鶴高等学校、舞鶴市教育委員会などの関係諸機関からご協力を頂いた。また現地調査でも有志の方々のご協力を頂いた。記して謝意を表したい。^(注1)

2. 位置と環境

舞鶴市は京都府北部にあり、舞鶴湾に面しており、東は福井県と府県境を接している。市街地は東と西に分かれており、東舞鶴の市街地には西側から与保呂川、祖母谷川、志楽川が舞鶴湾東港に流れている。

今回調査の対象地となった田中西遺跡は、東舞鶴の市街地の北東を西流する志楽川右岸に位置する愛宕山から南西に派生する丘陵の裾に存在し、志楽川に沿って東西に広く、遺跡が形成されていると考えられている(第1図)。調査地はこの田中西遺跡の西端に位置しており、昭和62年に当調査研究センターが調査を行った泉源寺遺跡に西接している。泉源寺遺跡の調査では、6世紀後半代の横穴式石室をもつ泉源寺2号墳や中世の掘立柱建物跡、



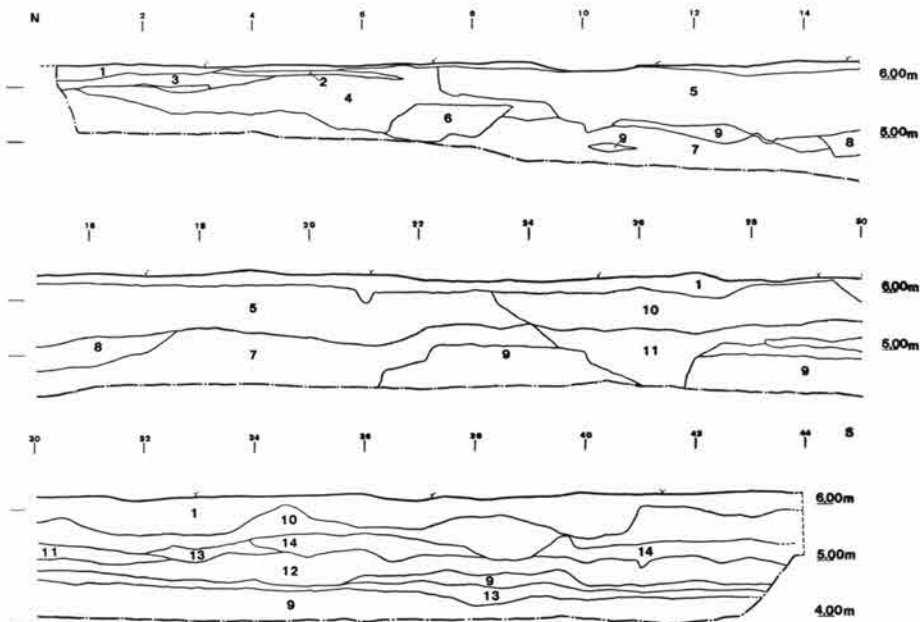
第2図 調査地位置図(斜線部分)

柵列などが検出されている。^(注2) 調査地周辺では西大寺荘園の志楽荘が鎌倉時代に存在したとされており、丘陵頂上に田中支城、泉源寺的場支城、泉源寺愛宕城などの室町時代を中心とした小規模な山城が造営されている。^(注3)

3. 調査の概要

調査地は東舞鶴高校の校内東側に位置しており(第2図)、以前まで使用されていたプールがすでに撤去されており、現在設置されている教室棟からはほぼ2m下まで整地のための礫層が除去されていた。このため、掘削以前に、校地造成時にはかなり深くまで旧地表が削平されていることが推測された。

調査は、プール造成地に幅約9m・長さ45mの南北に長いトレンチを設定し、東西方向の土層の堆積を観察するためにトレンチ南側に約6m幅のトレンチを西側に向かって設定し、「L」字状の試掘範囲を設定した(第2図)。トレンチ北半では礫層と粘土層の互層が認められ、標高5m以下は礫層が厚く堆積していた。南半では、最も遺物を包蔵する可能性が高いと考えられた暗黒褐色粘土層(標高約5m)直上まで重機によって掘削を行った後に、遺構・遺物等の検出に努めた。しかし、遺構・遺物は検出できなかった。また、トレ



第3図 トレンチ東壁土層図

1. 整地層 2. 暗黒褐色粘土層 3. 灰白色固結土層 4. 灰白色砂礫層 5. 褐色砂礫土層 6. 灰白色砂質土層 7. 川原石礫層 8. 砂利・砂交互層 9. 灰白色粘土層 10. 暗褐色砂質土層 11. 暗褐色砂礫土層 12. 灰白色粘質土層 13. 暗黒褐色粘土層 14. 黒色粘土層

チン南半でさらに重機によって標高2 m程まで掘削を行ったが、礫層と粘土層が厚く堆積しており、遺構・遺物等は認められなかった。

この間、断面精査や、図面の作成などを行い、その後、機材を撤収して調査を終了した。またブル造成までの期間、危険防止のため重機掘削地の埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。

4. 小 結

トレンチ内の断面観察では粘土層や川原石の混じった砂礫層が南東方向にむかって、非常に緩やかに傾斜して堆積しており、河川の活動によって粘土層と礫層が一部で攪乱を起こしながら、交互に堆積したものと考えられた。前述した泉源寺遺跡の遺構検出面が14 m程であるのに対して、今回の調査地の掘削開始面が標高約6 m程であることから遺構や遺物包含層などはすでに削平されてしまった可能性が高く、今回調査地の堆積層は古墳時代以前に堆積していたものと考えられる。調査地周辺はすでに宅地化されており、田中西遺跡は今回の調査地よりも北東の丘陵裾の高台部分に遺構が遺存する可能性が高いであろう。

(野島 永)

注1 調査に参加して頂いた方は次の通りである(敬称略,五十音順)。

奥本ふじ子・神原さつき・崎山由美子・崎山芳子・樋口君子・森下美由紀・森下ゆく枝・森本サカエ・森本八江子・森本玲子

注2 岡崎研一「泉源寺遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注3 『京都府遺跡地図』第2分冊 京都府教育委員会 1986

2. 天若遺跡平成元・2年度発掘調査概要

1. はじめに

天若遺跡の調査は、日吉ダムの建設が計画され水没地となることから、水資源開発公団の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが行ったものである。平成元年度の調査は、遺跡全域を調査対象地とし、平成元年12月8日から平成2年2月23日まで行った試掘調査である。掘削面積は、約1,200㎡で、当調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷寿克、同調査員鍋田 勇が担当した。平成2年度は、試掘調査の結果判明した遺跡範囲のうち、約2,000㎡について本調査を実施した。現地調査は、平成2年8月6日から平成3年1月30日まで行い、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同調査員三好博喜が担当した。本概要の執筆は三好・鍋田が行った。

現地調査及び整理作業にあたっては、地元有志ならびに学生諸氏^(注1)、日吉町教育委員会・日吉青少年山の家をはじめとして多くの方々のご協力をえた。記して謝意を表したい。

なお、調査に係る費用は、水資源開発公団が負担した。

(三好博喜)

2. 位置と環境

天若遺跡は、京都府船井郡日吉町天若小字森形他に所在する。地形的には、海拔数百mの比較的起伏が少なく、定高性のあるいわゆる丹波山地に属している。京都府の中部から南部にかけて流れる桂川は、準平原のなごりを残す丹波山地内を侵食しながら東から西へと流れ、各所で河岸段丘を形成している。この桂川の上流域に位置する天若遺跡は、舌状に残る河岸段丘上に立地しており、桂川上流域では最も広い耕地面積を有している。標高は、165m程度である。

天若遺跡の範囲は、天稚神社を中心とした旧世木林集落にあたる。周辺地域での埋蔵文化財の分布密度は希薄であり、古代における具体的なようすは明らかではない。中世以後、文献史料に散見するようになるが、史料が豊富となるのは近世以後である。実際、日吉町内で確認されている遺跡は、大部分が山城及び城館ないしは経塚といった中世以後の遺跡で、これを遡る時代の遺跡は、若干を数えるだけである。

天稚神社については、応永29(1422)年に修理の記述があることから、少なくとも中世には、その存在が知られている。現状でも、天稚神社を鎮守の杜とする集落形態が中世の景

観をとどめていることから、それ以後は、集落が継続して営まれていたものと思われる。

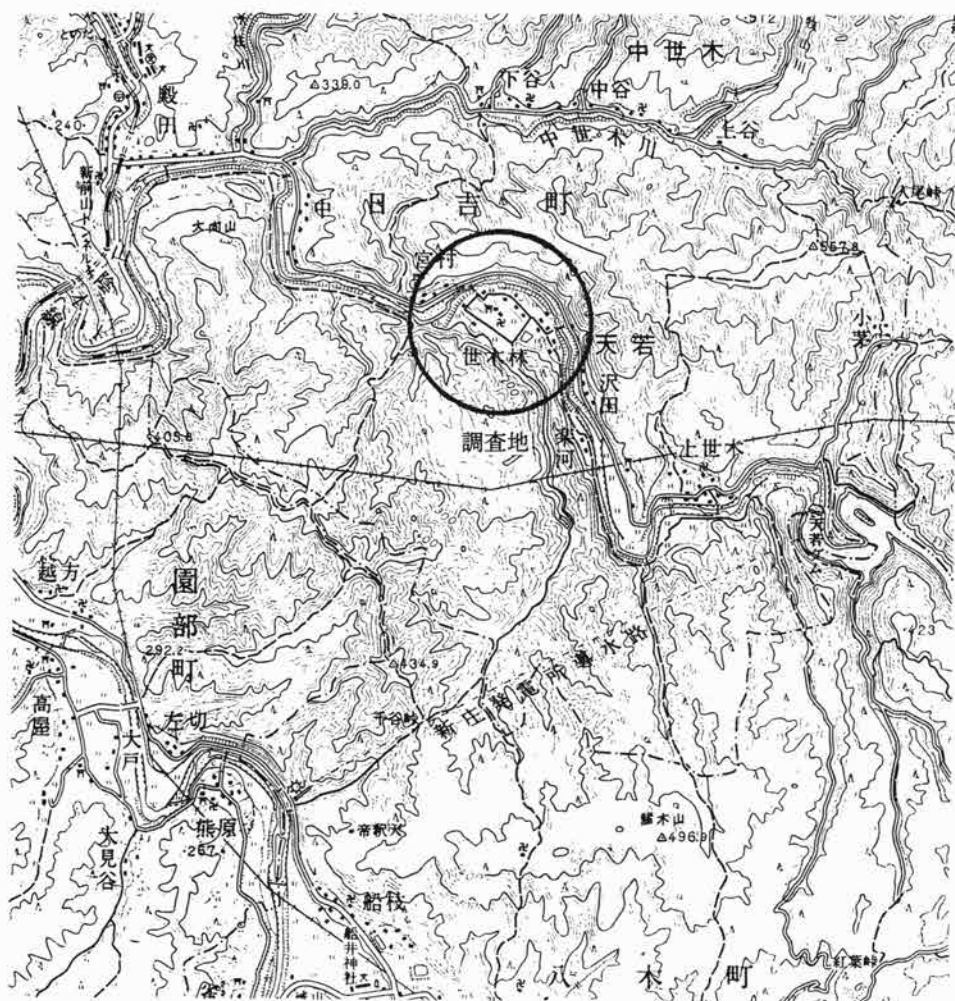
(鍋田 勇)

3. 平成元年度天若遺跡発掘調査概要

(1) 調査の概要

昭和47年、「淀川水系における水資源開発基本計画」が公示され、日吉ダムの建設計画が明らかにされた。その後、ダム建設にともない、水没する地区における文化財の総合調査が昭和60年から昭和63年にわたり実施された。^(注2)天若遺跡は、この調査により集落遺跡として認知され、平成元年度に試掘調査を行う運びとなった。

平成元年度の調査は、遺構・遺物の有無及び分布状況の把握を主目的とした試掘調査で



第4図 調査地位置図 (1/50,000 京都西北部)

ある。調査対象面積は、約20,000㎡にわたる。まず、10か所にトレンチを設定したが、各所で遺構・遺物とも確認されたことから、最終的に20か所のトレンチを設定した。各トレンチについては、遺構の検出状況に応じて拡張した。また、調査期間等の関係から、検出した遺構の掘削は最小限にとどめ、遺構の存在する範囲の確認を重点的に行った。

設定したトレンチは、現地表面のレベルから、1トレンチから8トレンチを含むA地区、9トレンチから16トレンチを含むB地区、17トレンチから20トレンチを含むC地区の3地区に区分される(第5図・付表1)。A地区は、調査地の南東から天稚神社にかけてのびる尾根上にあたるが、現状では安定した平坦面を有し、集落の最高所を占めている。ここでは、天稚神社北側の1トレンチで多くの遺構が検出されたものの、2トレンチから5トレンチでは、表土直下が黄色粘質土の地山となり、遺構の密度が低い。B地区は、A地区から一段下がった位置にあたり、最も広い安定した平坦面を有している。ここでは、すべてのトレンチにおいて遺構・遺物とも確認した。C地区は、桂川に向かって段状に水田が営まれている。18トレンチでは、遺構・遺物ともなく、この周辺までは遺跡の広がらないことが確認された。19トレンチでは、B地区よりもやや低い位置にあたるが、土坑等の遺構が検出された。20トレンチでは、遺物は出土したものの顕著な遺構は存在しない。

次に、各時代ごとに調査の結果をまとめる。

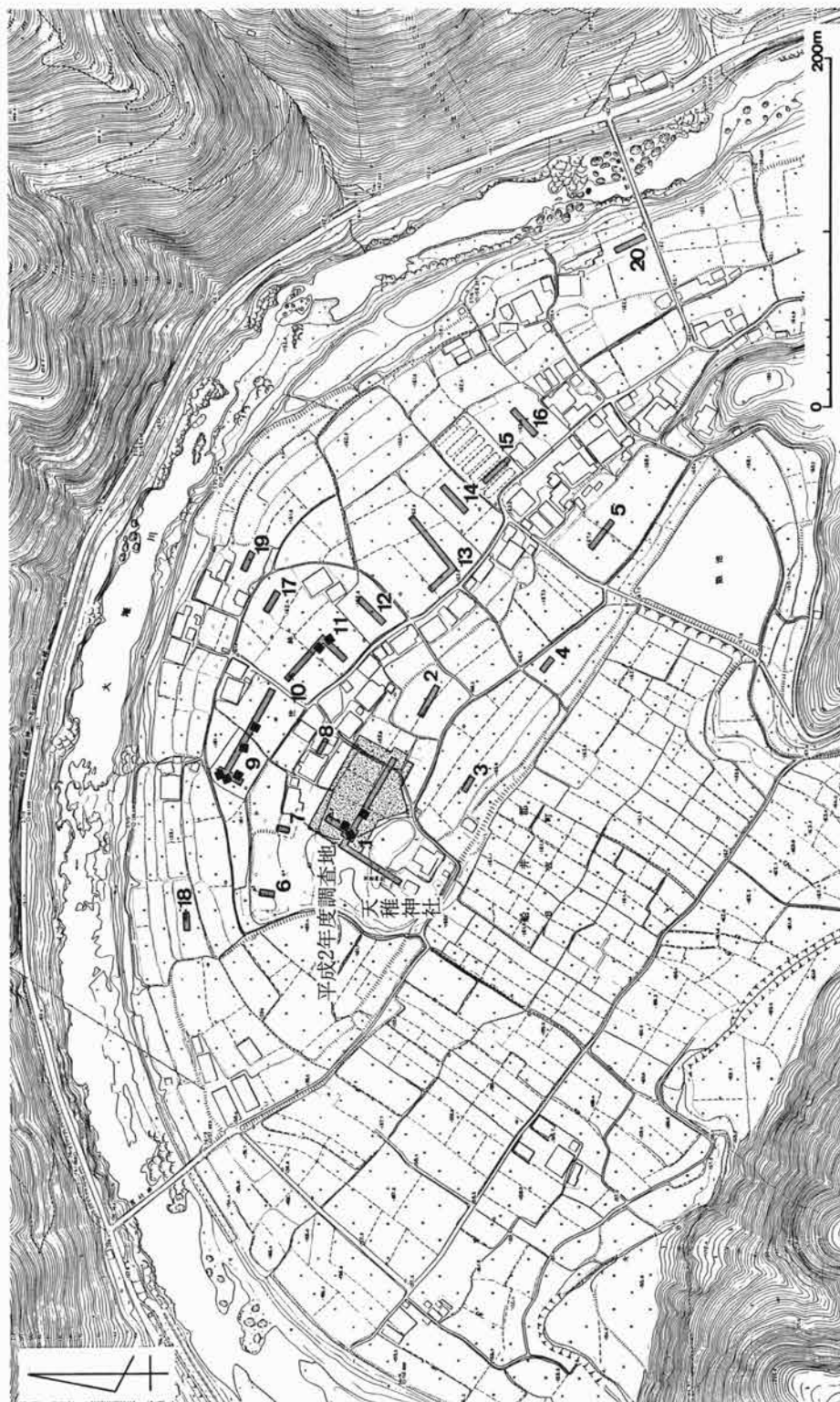
古墳時代については、1・9・11トレンチで竪穴式住居跡を検出した。1トレンチの1基を除き、部分的に確認したものである。各住居跡とも方形住居であり、一辺5～6mを測るものが主体を占めるが、9トレンチでは一辺2～3mを測る小規模な住居も検出された。また、一部の住居では内部に人頭大程度の石が存在し、竈を有している可能性が考えられる。住居跡の時期は、1トレンチの住居跡埋土内から出土した須恵器によって、後期初頭頃と考えられる。12トレンチでは、多数の土坑を検出した。遺物が出土していないため、時期の決定はできないが、古墳時代に属する可能性が高いと思われる。

飛鳥時代については、1トレンチで、7世紀の後半を中心とする須恵器が出土している。この時期に限定される遺構は確認できていないが、多数検出しているピットがこの時期の掘立柱建物跡となる可能性がある。

鎌倉時代については、調査地の広範囲にわたり、13世紀を中心とする土器が出土した。1トレンチ及び9トレンチから16トレンチで検出したピットがこの時期の掘立柱建物跡となる可能性がある。

江戸時代については、1トレンチの天稚神社周辺から土師器が出土している。ここでは神社に関連する遺構の存在が予想される。

以上の結果から、本調査の必要と考えられる範囲は、天稚神社を含む1トレンチ周辺及



第5図 調査トレンチ配置図
■印；試掘調査時検出整穴式住居跡

び9トレンチから17トレンチ、19トレンチの周辺の約10,000㎡となる。

(2) 出土遺物(第6図)

試掘調査で出土した遺物の総量は、整理箱2箱程度である。土師器・須恵器が主で、瓦器や陶磁器が混じる。時期的には古墳時代後期から鎌倉時代・室町時代のものが主体をなしており、近現代までの遺物が見られる。以下では主な出土遺物について記述する。

1～7は須恵器である。1は、11トレンチから出土した口径12.4cm・器高5.15cmを測る杯蓋である。2は、14トレンチから出土した口径約12cm・残存器高4cmを測る杯身である。3は、1トレンチSH02上層の暗褐色土から出土した杯身である。口径10.6cm・残存器高4cmを測る。1から3は、概ね古墳時代後期初頭の須恵器である。4は、14トレンチから出土した口径12.4cm・残存器高3.15cmを測る杯身である。6世紀後半期のものと思わ

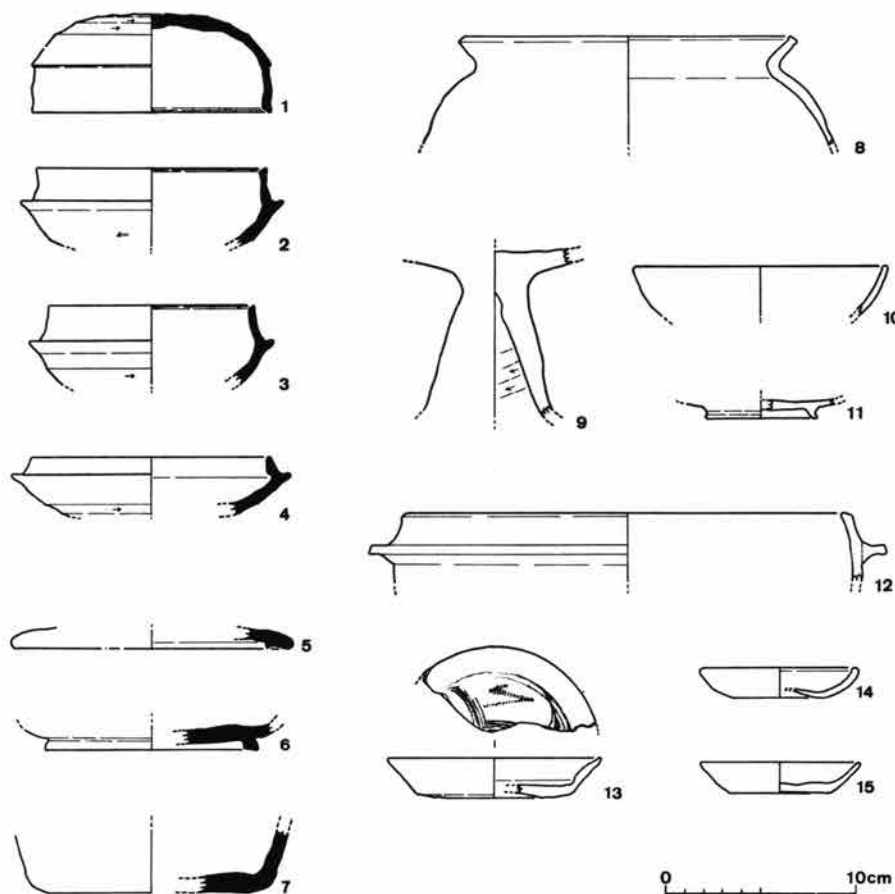
付表1 平成元年度試掘トレンチ成果表

トレンチ名	検出遺構	出土遺物	時代
1トレンチ	竪穴式住居跡3棟・ピット多数	土師器・須恵器・瓦器	古墳・奈良・江戸
2トレンチ	ピット2	なし	?
3トレンチ	なし	なし	—
4トレンチ	土坑1	土師器	?
5トレンチ	なし	なし	—
6トレンチ	ピット2	土師器ほか	古墳
7トレンチ	ピット多数	土師器・須恵器・瓦器ほか	古墳～鎌倉
8トレンチ	ピット多数	土師器・須恵器・瓦器ほか	古墳～鎌倉
9トレンチ	なし	なし	—
10トレンチ	?	土師器・須恵器	古墳～鎌倉
11トレンチ	溝1	土師器・須恵器	古墳
12トレンチ	ピット4・溝?	須恵器・陶磁器	古墳・江戸
13トレンチ	なし	なし	—
14トレンチ	竪穴式住居跡5棟・土坑	土師器・須恵器	古墳
15トレンチ	竪穴式住居跡3棟・大溝?	土師器・須恵器	古墳～鎌倉
16トレンチ	溝?	土師器	古墳?
17トレンチ	土坑5～6基・ピット	土師器	古墳?
18トレンチ	土坑5～6基・ピット・溝1	土師器・須恵器・瓦器	古墳～鎌倉
19トレンチ	土坑5	土師器	古墳?
20トレンチ	ピット	なし	?

れる。5は、1トレンチから出土した杯蓋である。口径約14cm程度・残存器高1cmを測る小破片ではあるが、7世紀後半期の資料である。6は、1トレンチから出土した底径約11cm・残存器高1.4cmを測る高台をもつ杯身である。7は、13トレンチから出土した。6・7は、平安時代頃のものと思われる。

8・9は土師器である。8は、13トレンチから出土した甕で、口径17.1cm・残存器高5.75cmを測る。9は、1トレンチSH02埋土の黒褐色土から出土した高杯である。

10~12は瓦器である。10は、15トレンチから出土した碗の口縁部破片で、口径約13cm・残存器高2.6cmを測る。11は、1トレンチから出土した碗の底部破片で、底径約5.6cm・残存器高5.6cmを測る。12は、11トレンチから出土した羽釜の口縁部破片で、口径23cm程度・残存器高3.55cmを測る。10~12は、いずれも13世紀頃のものと考えられる。



第6図 平成元年度試掘調査出土遺物実測図

1~7. 須恵器 8~9・14・15. 土師器 10~12. 瓦器 13. 青磁

13は、12トレンチから出土した青磁の皿である。口径11cm・器高2.15cmを測る。13世紀頃の輸入磁器と思われる。

14・15は土師質の皿である。14は15トレンチ出土で、口径8cm程度・残存器高1.6cmを測る。15は1トレンチ出土で、口径8.2cm・器高1.7cmを測る。

(3) 小 結

今回の調査は、遺跡の範囲確認を主たる目的としたものであったが、当初の予想を上回る多大な成果を収めた。以下、調査成果を簡略にまとめる。

天若遺跡は、古墳時代から江戸時代まで断続的に形成された集落遺跡である。遺跡の範囲は、1トレンチ、6トレンチから16トレンチ、19トレンチを含む約10,000 m^2 である。

古墳時代の竪穴式住居跡は、1トレンチと9トレンチから11トレンチとの範囲に限定された地区で検出され、古墳時代後期初頭における集落形態の全容を知り得る可能性がある。

飛鳥時代に属する遺物の出土によって、古墳時代に続く集落の存在が考えられる。集落形態・性格の変遷を捉え得る可能性がある。

中世の遺物は広範囲に広がり、掘立柱建物跡中心の中世集落形態を知る可能性がある。

(鍋田 勇)

4. 平成2年度天若遺跡発掘調査概要

(1) 調査の概要

元年度試掘調査の1トレンチ周辺を約2,000 m^2 にわたって拡張した。試掘調査では竪穴式住居跡3棟、柱穴などが検出された地域である。

重機掘削は、平成2年8月6日から8月22日までのうちの8日間で行い、その後人力で掘削を行った。遺構面は、黄褐色土地山面上にあり、ほぼ全域で耕作土・床土を除去した時点で現われた。調査の結果、竪穴式住居跡5棟(試掘調査で確認した3棟を含む)、掘立柱建物跡6棟以上、井戸跡1基をはじめ土坑・ピットなどを多数検出した。また、調査地周辺で石器や石片が採集できることが明らかとなったため、一部人力による深掘りも試みた。これら人力による掘削作業は、平成3年1月28日に終了した。写真撮影、測量・実測作業はその都度行い、平成3年1月30日にはすべての現地作業を終了し、撤収した。

なお、今回の調査区の地区割りには、2H杭を起点とした任意の5m方眼を用いた。ラインの名称は、縦軸に算用数字を、横軸にアルファベットを付した。地区名称は、北側交点を地区名とした。将来的には、国土座標を用いて位置を明らかにする予定である。

(2) 検出遺構

検出した遺構には竪穴式住居跡5棟、掘立柱建物跡6棟以上、井戸跡1基をはじめ土

坑・柱穴がある(第7図)。

A. 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H9001 3 F地区付近で検出した一辺約4.8mを測る正方形の竪穴式住居跡である。元年度試掘調査で検出された。検出面から床面までの深さは、約17cmを測る。竈の残欠と考えられる焼土を住居跡北壁の中央で検出した。主柱穴は4本である。南東隅がやや張り出す。

竪穴式住居跡 S H9002(第8図) 4 E地区付近で検出した一辺約4.8mを測る正方形の竪穴式住居跡である。元年度試掘調査で検出された。検出面から床面までの深さは、約22cmを測る。炉跡と考えられる焼土を住居跡の中央部で検出した。主柱穴は4本である。北側中央部に貯蔵穴がある。住居跡内には周壁溝が巡り、貯蔵穴に取り付く。

竪穴式住居跡 S H9003(第9図) 3 C地区付近で検出した長辺5.4m×短辺4.3mを測る長方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約45cmを測る。住居跡西壁中央には造り付けの竈をもつが、検出できたのは焼土と煙出し部である。南西隅と南東隅とに貯蔵穴をもつ。主柱穴は4本で、部分的に周壁溝が巡る。

竪穴式住居跡 S H9004 5 D地区付近で検出した長辺5.5m×短辺4.5~5.0m程度を測る長方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さは、約7cmを測る。竈の残欠と考えられる焼土を住居跡北壁の中央で検出した。主柱穴は4本である。

竪穴式住居跡 S H9005 6 F地区付近で検出した長辺7.5m×短辺5.2mを測る長方形の竪穴式住居跡である。元年度試掘調査で検出された。検出面から床面までの深さは、約3cmを測る。炉跡と考えられる焼土を住居跡の中央部で検出した。主柱穴は、攪乱により欠除するものがあるが、4本と考えられる。南側中央部に貯蔵穴がある。北側は地山の礫が露出している。

B. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 S B9021 10G・11G地区付近に存在する2間(3.62m)×4間(7.88m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間1.81m(約6尺)、桁行1.97m(約6.5尺)を測る。柱の掘形は不整円形を呈し、径30~40cmを測る。なお、柱根痕跡は径20cm前後である。

掘立柱建物跡 S B9022 13E・13F地区付近に存在する2間(4.83m)×3間(5.9m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間2.41m(約8尺)、桁行1.97m(約6.5尺)を測る。柱の掘形は不整円形もしくは隅丸方形を呈し、径30~40cmを測る。なお、柱根痕跡は径15cm前後である。一部の柱穴内には柱根の残るものもある。

掘立柱建物跡 S B9023 9F・9G地区付近に存在する2間(3.33m)×3間(4.65m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間1.67m(約5.5尺)、桁行1.55m(約5尺)を測る。柱の掘

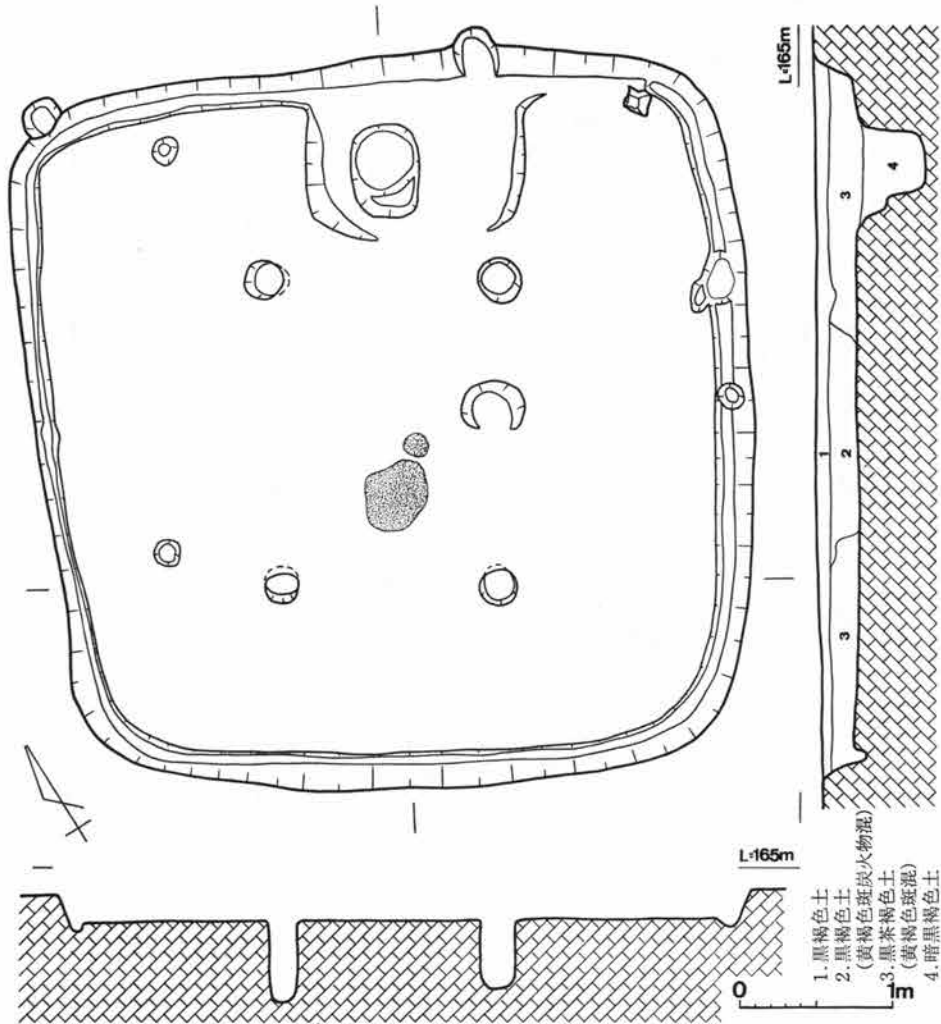


第7図 平成2年度検出遺構実測図

形はいわゆる不整円形を呈し、径30~40cmを測る。なお、柱根痕跡は径10~15cm程度の大きさである。

掘立柱建物跡 S B9024 10F・11F地区付近に存在する1間(2m)以上×3間(5.71m)の建物跡である。柱間寸法は、梁間2m(約6.6尺)、桁行1.9m(6.3尺)を測る。柱の掘形は不整円形を呈し、径30~40cmを測る。また、柱根痕跡は径10~15cm程度である。

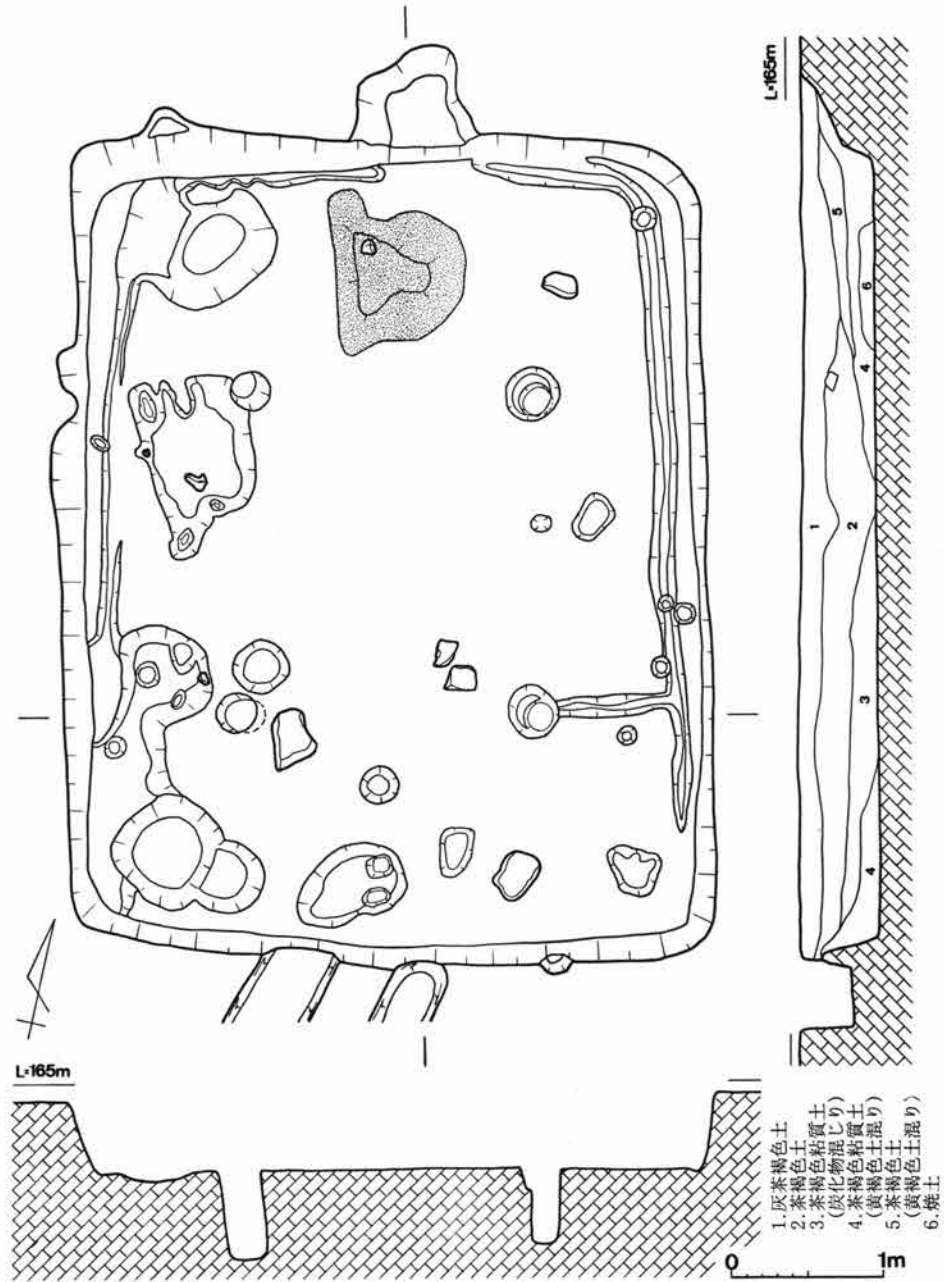
掘立柱建物跡 S B9025 8D・9D地区付近に存在する3間(5.01m)×3間(6.78m)の



第8図 竪穴式住居跡SH9002実測図

建物跡である。柱間寸法は、梁間1.67m(約5.6尺)、桁行2.26m(約7.5尺)を測る。柱の掘形は不整形円形を呈し、径30~40cmを測る。なお、柱根痕跡は径15cm前後である。

掘立柱建物跡 S B9026 10C・11C地区付近に存在する2間(4.83m)×3間(6.91m)の



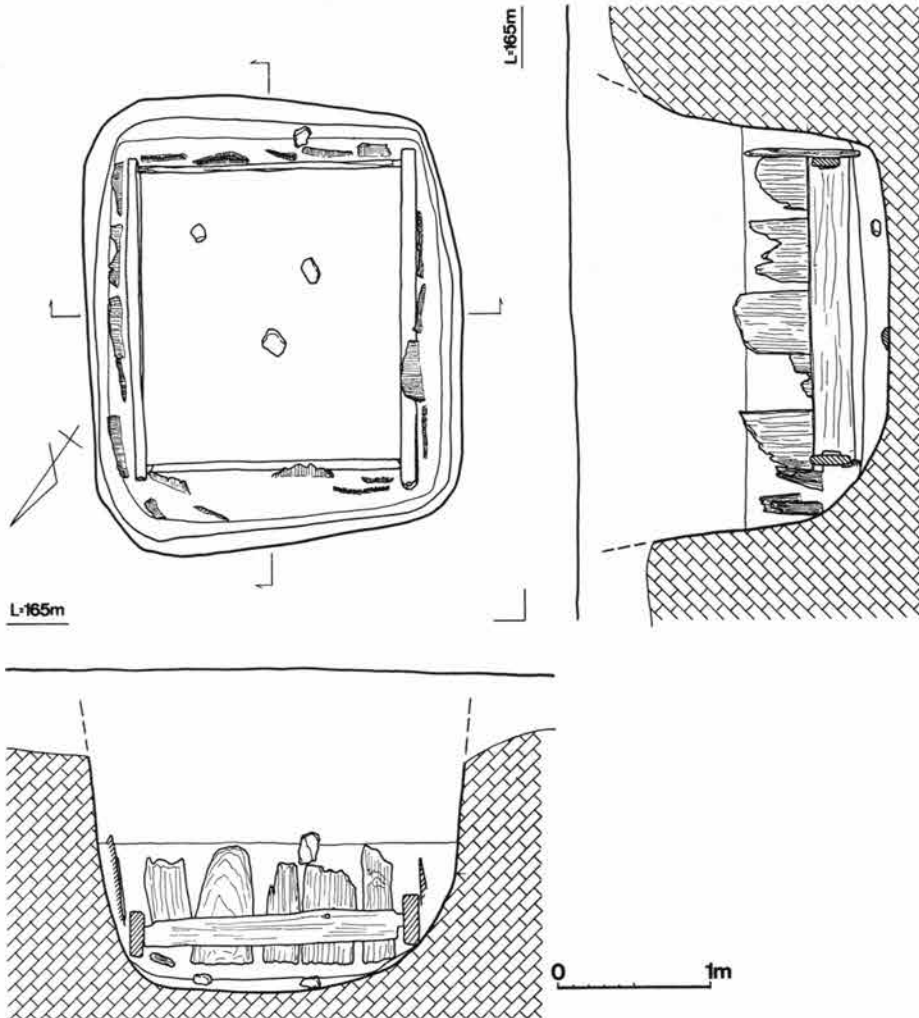
第9図 竪穴式住居跡SH9003実測図

建物跡である。柱間寸法は、梁間2.42m(8尺)、桁行2.3m(約7.6尺)を測る。柱の掘形は不整円形を呈し、径40cm前後を測る。なお、柱根痕跡は径15~20cm程度である。

C. 土 坑

土坑は、各所で検出しているが、時期を特定できるものは少ない。

土坑SK9006 9H地区付近で検出した。長径3.5m×短径2.3mを測る不定形の土坑である。検出面からの深さは約40cmを測る。出土遺物には、須恵器や土師器がある。



第10図 井戸跡SE9015実測図

D. 井戸跡

井戸跡 S E9015(第10図) 9H地区で検出した。井戸の掘形は長辺1.5m×短辺1.25mを測る長方形で、検出面から井戸底までの深さは約80cmを測る。土坑 S K9006がある程度埋もれた段階で掘削されている。井戸枠の構造は、一段の井籠組で、裏に縦板を入れている。遺物は上層から下層まで各所で出土した。上層で検出した須恵器の壺は、底部が打ち欠かれており、逆位で出土した。出土遺物は須恵器がほとんどで、土師器は破片が少量出土しただけである。

(3) 出土遺物(第11・12図)

第2次調査での出土遺物の総量は、整理箱18箱程度である。ここでは、一部の特徴的な遺物について記述し、詳細については最終年度に改めて報告を行う予定である。なお、図示した土器は、すべて須恵器である。

A. 土器類

竪穴式住居跡 S H9003出土遺物(第11図1～11)

1～5は、杯蓋である。口径12～13.6cm・器高4～4.7cmを測る。1・2・3・5の肩部には、明瞭な稜がめぐり、口縁端部は、内傾するものが多く、端面に段をつくるもの(2・4・5)と段をつくらないもの(1・3)とがある。

6～10は、杯身である。口径10～11.6cm、受部径11.7～13.6cm、器高5cm前後を測る。このうち6は焼け歪みのため長円形を呈しており、口縁部長径10.4cm・短径9.3cmを測る。口縁端部は、内傾するものが多く、端面に段をつくるもの(6・8・9)と段をつくらないもの(7・10)とがある。

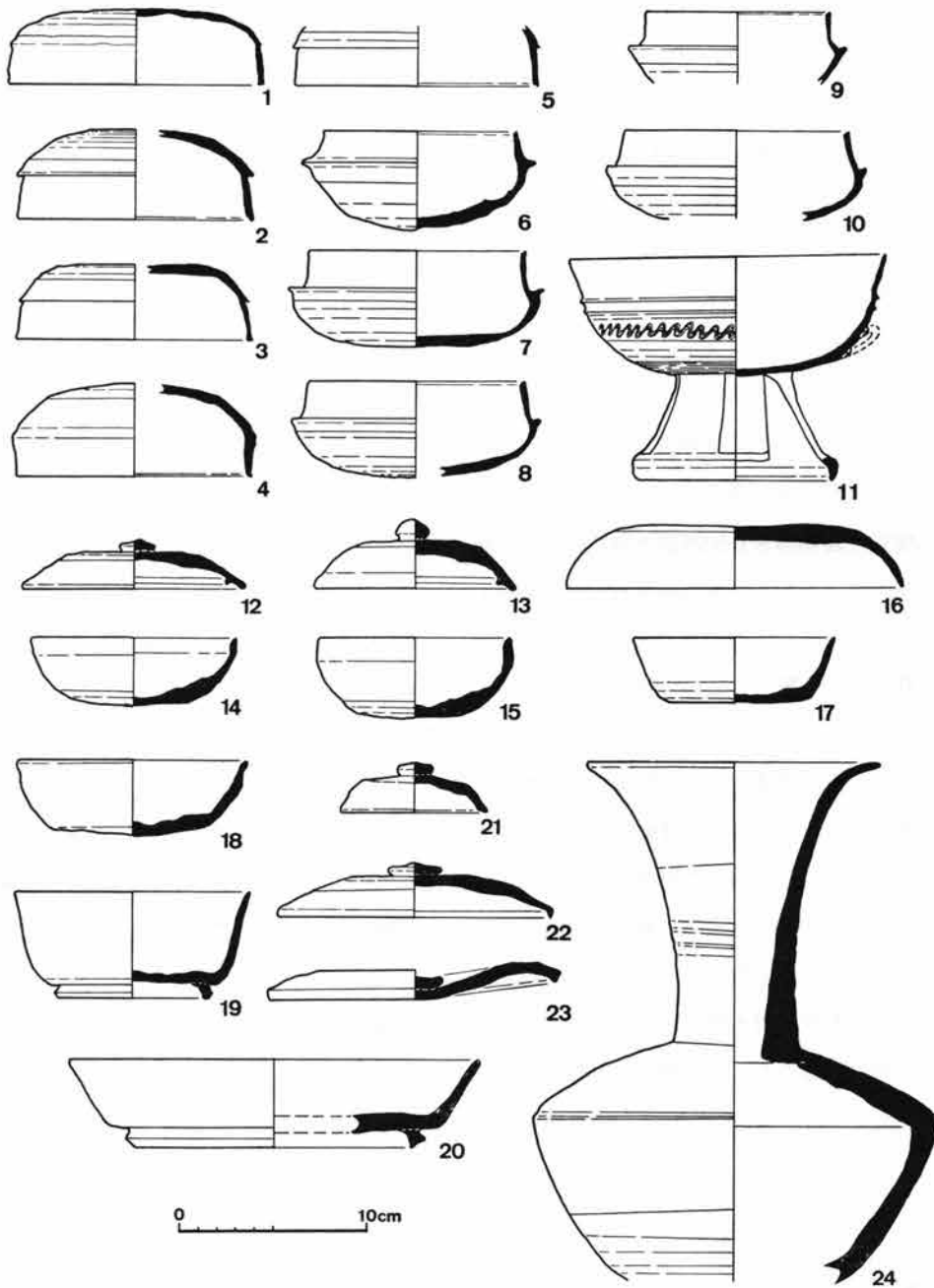
竪穴式住居跡 S H9003出土の杯蓋及び杯身は、概ね陶邑編年のTK47期からMT15期へ移行する時期前後に位置づけられる。

11は、無蓋高杯である。杯部口径16.9cm・脚部裾径10.4cm・器高12cmを測る。杯部には、二本の鋭い稜がめぐり、下部に波状文がめぐり、杯部下半には把手を1か所設けている。脚部には4か所の透かしがあげられている。TK208前後の時期と考えられる。

土坑 S K9006出土遺物(第11図12～15)

12・13は、杯蓋である。12は、口径12cm・器高2.7cmを測る。13は、口径10.8cm・器高3.8cmを測る。いずれも口縁部内面にかえりもち、宝珠つまみが付く。

14・15は、杯身ないしは杯蓋であるが、土坑 S K9006からは杯蓋に相当するものが出土しているため、ここでは杯身として扱う。14は、口径11cm・器高3.6cmを測る。15は、口径10.4cm・器高4.3cmを測る。土坑 S K9006出土の杯蓋及び杯身は、概ね陶邑編年のTK217期前後に位置づけられる。



第11図 出土遺物実測図（須恵器）

1～11. 竪穴式住居跡SH9003出土 12～15. 土坑SK9006出土
 16～17. 掘立柱建物跡SB9021柱穴内出土 18～24. 井戸跡SE9015出土

井戸跡 S E9015出土遺物(第11図18~24)

22・23は、杯蓋である。22は、口径14.6cm・器高2.9cmを測る。偏平な宝珠つまみをもつ。内面及び外面の一部には、漆が付着している。23は、口径15.6cmを測る。焼け歪みにより、天井部が落ち込んでいる。偏平な宝珠つまみが付く。

21は、口径7.9cm・器高2.7cmを測る壺類の蓋である。外面の一部に漆が付着している。18~20は、杯身である。18は、口径12.3cm・器高4cmを測り、高台をもたない。外面の一部に漆が付着している。19は、口径12.5cm・器高5.7cmを測る。底部縁端部より内側に高台を貼り付ける。20は、口径21.9cm・器高4.6cmを測る。底部縁端部より内側に高台を貼り付ける。

24は、長頸壺である。井戸跡上部で逆位で出土したことから、底部は故意に打ち欠かれたものと思われる。口縁端部もごく一部が残存しているだけである。肩部最大径21.7cm・残存器高27.7cmを測る。

掘立柱建物跡 S B9021出土遺物(第11図16・17)

16・17は、掘立柱建物跡 S B9021の同一柱穴内から出土した。16は、復原口径18cm・器高3.3cmを測る杯蓋である。17は、復原口径10.8cm・器高3.4cmを測る杯身である。

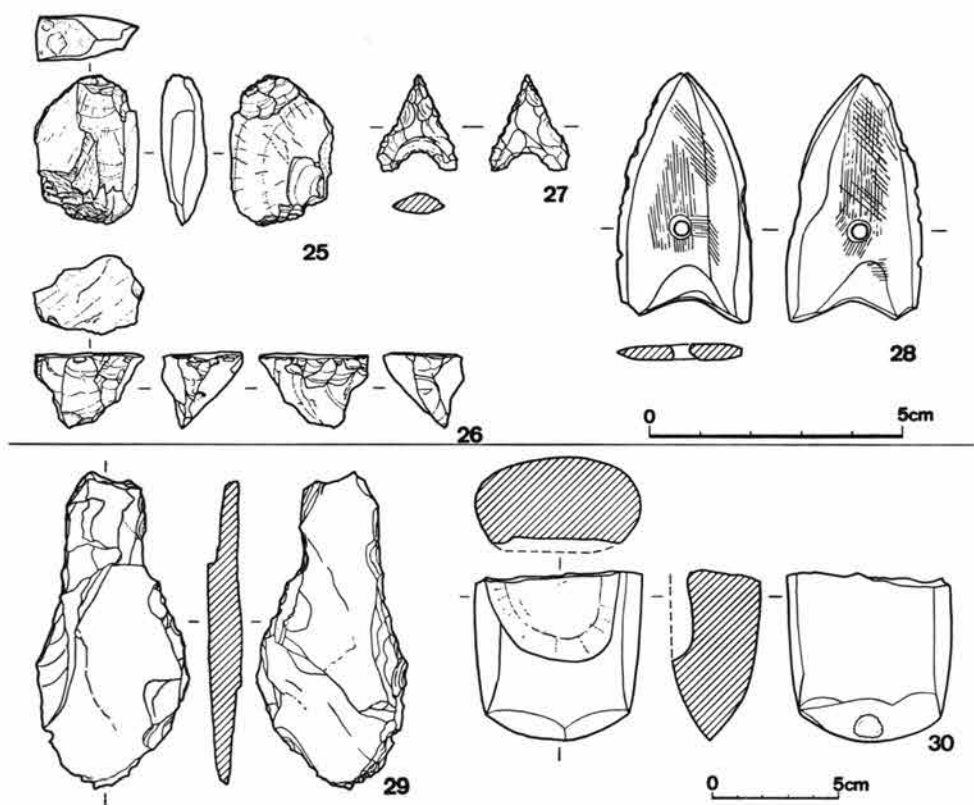
B. 石 製 品(第12図25~30)

調査地周辺からは、多くの石器やサヌカイト及びチャートの剥片を採集することができた。また、調査地区内でも数点出土している。

28は、竪穴式住居跡 S H9004の主柱穴内から出土した有孔磨製石鏃である。基部は、凹基無柄式で、ていねいな研磨によって鋭い刃縁部を形成している。長さ4.8cm・幅2.7cm・厚さ0.3cmを測り、重さ5.46gを量る。穿孔は、両側から行っている。粘板岩系統の石材を使用したものである。

25・26・27・29・30は、調査地周辺で採集した石器である。25は、サヌカイトを石材とした楔形石器である。一側片に裁断面がみられる。26は、チャートを石材とした円錐形石核である。打面調整は行わず、摂理面を打面としている。また、剥片剥離は正面に限られている。27は、サヌカイトを石材とした石鏃である。基部は、凹基無柄式である。29は、打製石斧、30は、太形蛤刃石斧である。

このほか、翼状剥片やスクレイパーなどもみられる。これら石器・石片の多くは、縄文時代から弥生時代のもと考えられる。しかし、黄褐色土地山を一部掘削したところ、黄褐色土上面から15cmでチャートの剥片が1点出土した。このため、旧石器時代に遡る石器・石片も存在する可能性が高い。



第12図 出土遺物（石器）及び採集石器実測図

28. 竪穴式住居跡 S H9004 主柱穴内出土 25・26・27・29・30. 採集石器

（4）小 結

今回の調査では、古墳時代後期前半期や奈良時代から平安時代と思われる居住区域を確認した。また、7世紀後半期の土坑 S K 9006 や8世紀前半期の井戸跡 S E 9015 の存在から、同時期の住居跡が付近に存在することが予想される。特に、今回検出された数棟の掘立柱建物跡のなかには、この井戸跡 S E 9015 に伴う掘立柱建物跡がある可能性が強い。

現時点までに復原できた掘立柱建物跡の棟軸方向は、大きく2分することができ、少なくとも2時期にわたって建物跡が構成されていたことが予想される。

古墳時代後期前半期の集落を確認したことにより、天若遺跡が丹波山地の谷間に位置するにもかかわらず、この地域の開発が比較的早くから行われていたことが確かめられた。大堰川の最上流域である周山盆地の地域は、遅くとも弥生時代には開発が行われていたことが知られている。天若遺跡は、この周山盆地と亀岡盆地とを繋ぐ交通の要衝にあっていたものと考えられる。

奈良時代から平安時代以降には周山地域から長岡京や平安京にむけて木材を搬出していたことが知られている。この木材の運搬方法は大堰川を利用した筏流しであったと考えられる。筏流しは、ごく最近まで行われていた木材運搬の方法でもある。天若遺跡は、この筏流しの中継地点ないしは木材の搬出拠点であったものと思われる。

旧石器時代ないしは縄文時代及び弥生時代の石器・石片が採集されたことから、付近で住居跡などの遺構が検出される可能性が高くなった。試掘調査でこの時代の遺構・遺物が検出されていないことからすれば、大規模な集落跡ではなく、キャンプ・サイトの遺跡と予想される。

(三好博喜)

5. ま と め

これまでの調査で、6世紀前半期の竪穴式住居跡5棟、7世紀後半期の土坑、8世紀前半期の井戸跡、及び奈良時代から平安時代にかけてと思われる掘立柱建物跡数棟を検出した。また、遺物の中には、旧石器時代ないしは縄文時代の石器・石片や、弥生時代及び古墳時代前半期の石器がある。このことから古くから人々の営みがあり、古墳時代後期には集落が形成されていたことが確認できた。今後の調査範囲の拡大につれて、空白時期の遺構・遺物の発見や、各時期の集落構成が明確になっていくことが期待される。

また、天若遺跡は谷間に位置しており、他の地域とはある程度隔絶された小宇宙を形成していると考えられる。今回までの調査では、集落の内の居住区域を確認したものの、墓域や農耕区域については不明な点が多い。古代の集落構造や集落の変遷を知るうえで、徹底した調査が必要となろう。

(三好博喜)

注1 平成元年度調査参加者

田畑光雄・浅井義久・和田 豊・中川美津枝・吉田龍一・中川幸三
寺田昌文・林田登久・中内田佳子

平成2年度調査参加者

浅井義久・中川美津枝・中川幸三・和田 豊・中川亀三・近藤久雄・西田チズル・俣野加代子・栃下 緑・谷彦治郎
橋本 稔・寺田昌文・土井淳史

注2 日吉ダム水没地区文化財等調査委員会『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』京都府日吉町 1988

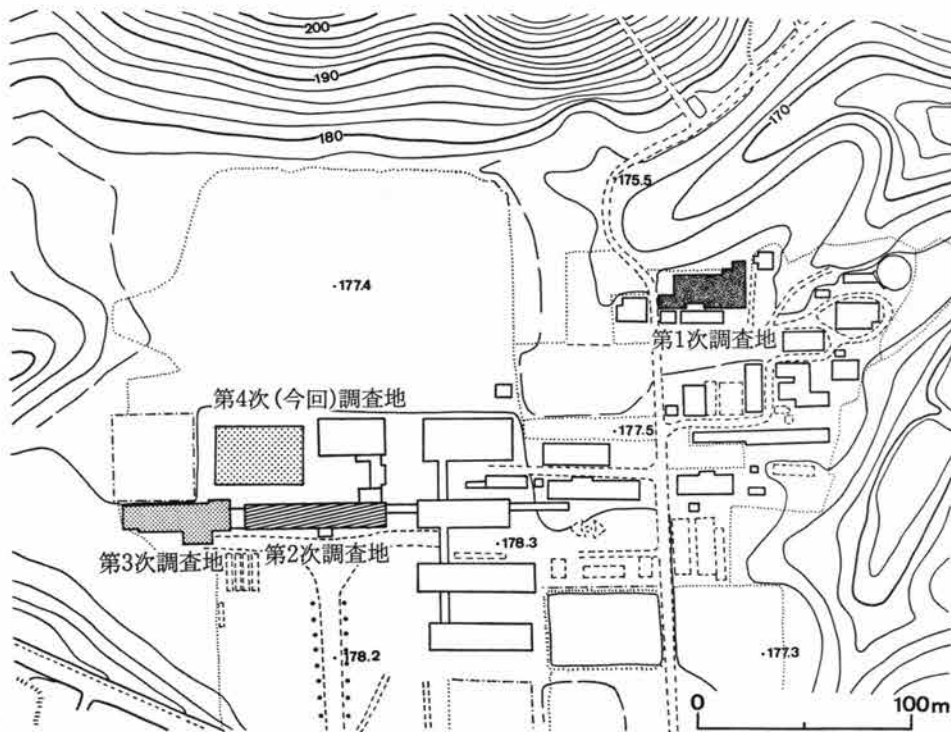
3. 蒲生遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

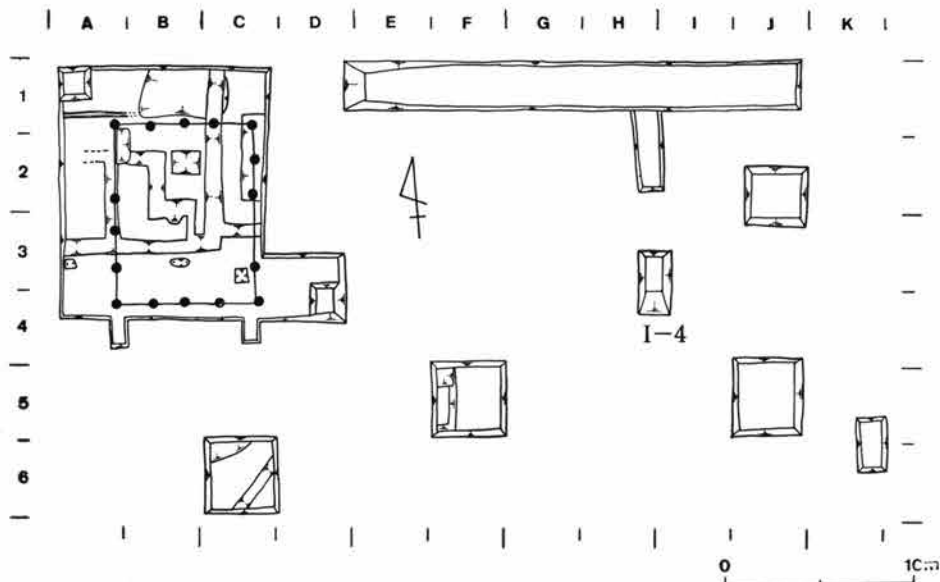
蒲生遺跡は、京都府丹波町豊田に所在する。遺跡は、曾根川と須知川に挟まれた台地上に位置し、ナイフ形石器^(注1)をはじめ、土師器、須恵器などが採取されており、旧石器時代から鎌倉・室町時代にかけての各時代の遺跡が重複して存在していると考えられる。

蒲生遺跡は、京都府立須知高等学校敷地を中心に広がっている。須知高校では、これまで校舎造改築工事に伴って3回の調査が実施されており、弥生時代中期の住居跡や古墳時代の土坑、鎌倉時代頃の掘立柱建物跡などが検出されている。^(注2)

今回、遺跡内に体育館が新設されることになったため、当調査研究センターでは京都府教育委員会管理課の依頼を受けて、平成2年9月17日から11月8日まで発掘調査を実施した。



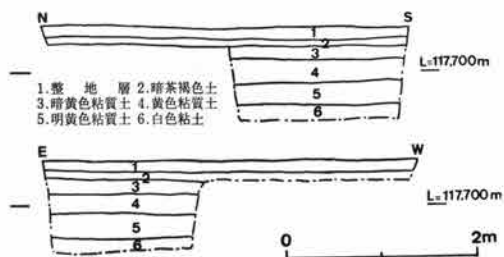
第13図 調査地位置図



第14図 トレンチ配置図

2. 調査の経過と概要

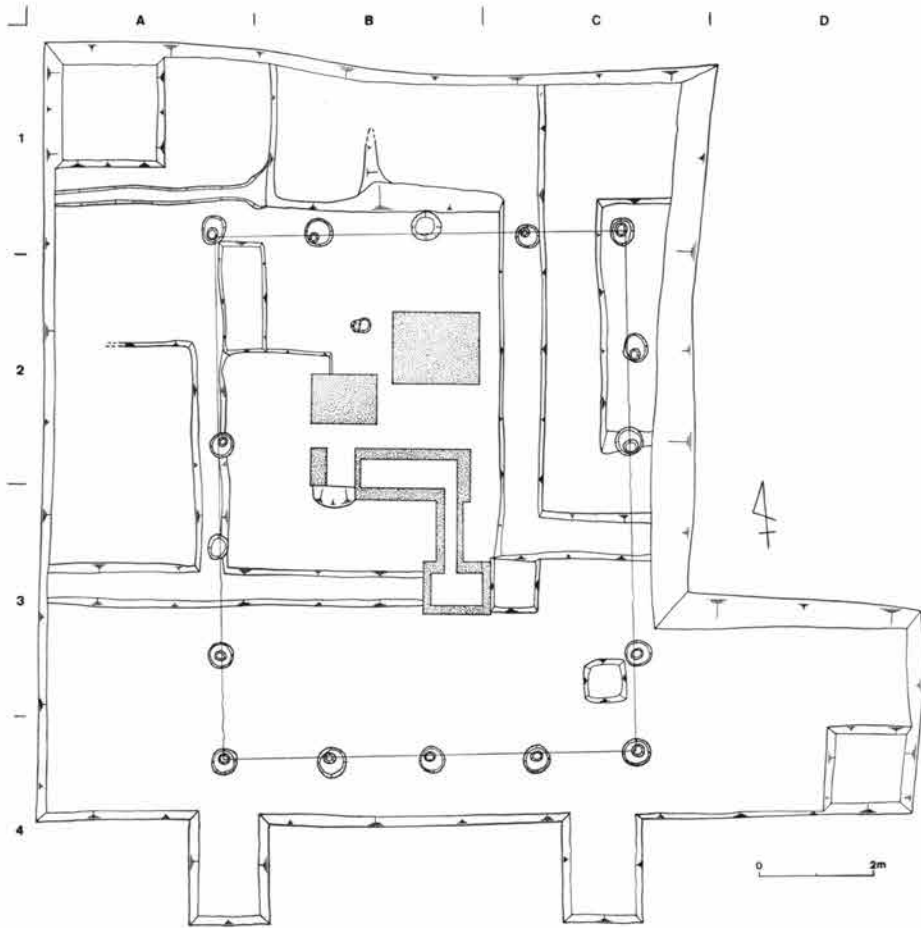
調査にあたって、遺構と遺物の分布状況を確認するために調査対象地内の各所にグリッドを設け、土層や遺物の包含状況を観察した(第14・15図)。その結果、対象地北西端で柱穴が検出されたため、この部分について拡張し遺



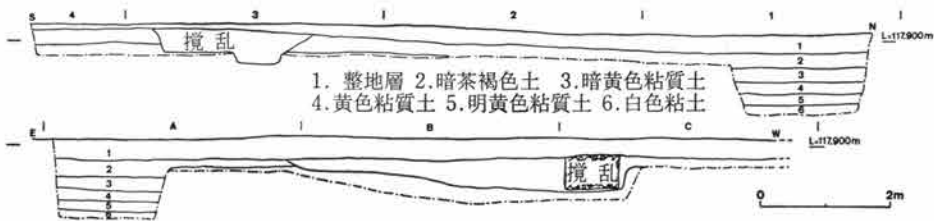
第15図 E5グリッド断面図

構の検出に努めた(Aトレンチ・第14図)。あわせて、基盤層と従来地山として処理されてきた黄褐色土の性格を知るために各グリッドを精査した。

① **基本層序** 土層は、上から整地層(1)、暗茶褐色土(2)、暗黄色粘質土(3)、黄色粘質土(4)、明黄色粘質土(5)、白色粘土(6)の順に堆積しており、その下層は桃白色の礫からなる花崗岩のバイラン土である。第1層は校舎築造のため一度削平した後に盛土・整地されたものである。本来は漆黒色のいわゆる黒ボク層である。第2層は漸移層をなし、この層以下は安定した堆積層をなしている。第3～5層は黄褐色系の粘質土であり、土質は一様であったが色調により3つに分層した。火山灰の土壤化したもの(ソフトローム)^(注3)であろう。更新世に属するものであり、同一台地上でナイフ形石器が採取されていることからこの層中に文化層が存在することが確認できる。今後の調査にあたっては留意しておく必要がある。ソフトロームは60～70cm程の厚さで水平に均質に堆積している。第6層はチャートの



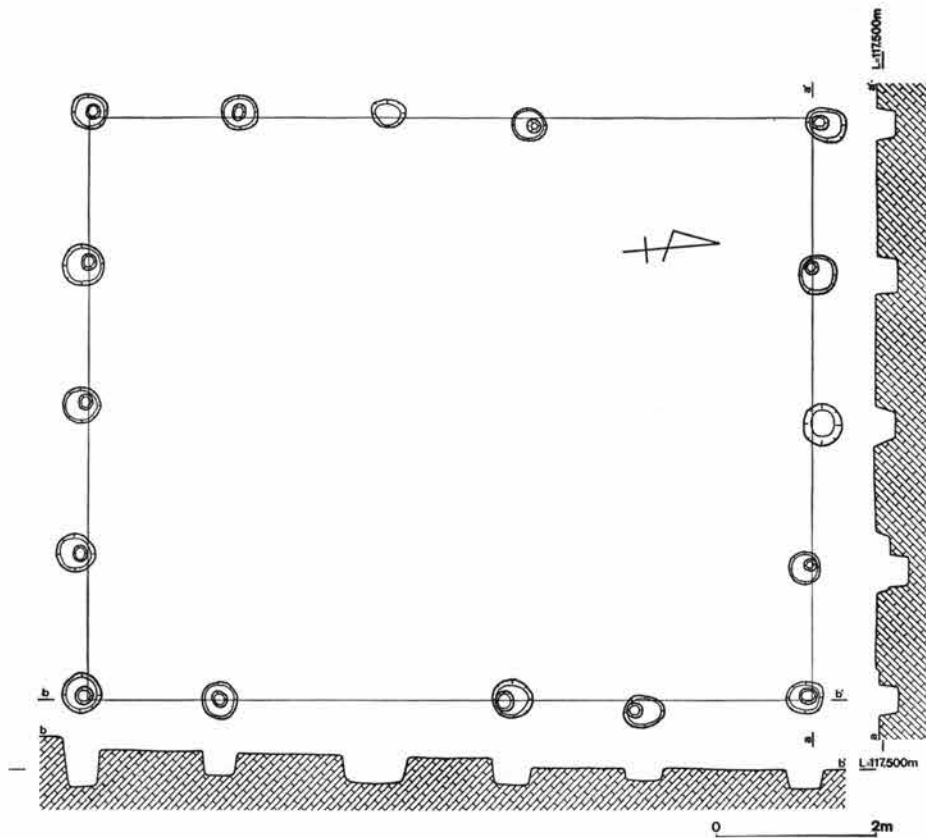
第16図 Aトレンチ検出遺構平面図



第17図 Aトレンチ断面図

円礫を多く含む粘土であり、水成層とみられる。

② 検出遺構 遺構はAトレンチで検出した掘立柱建物跡1棟のみである(第16・18図)。Aトレンチは、旧校舎建設の際に掘られた溝及びコンクリート基礎による攪乱が著しい。掘立柱建物跡は第3層上面で検出している。



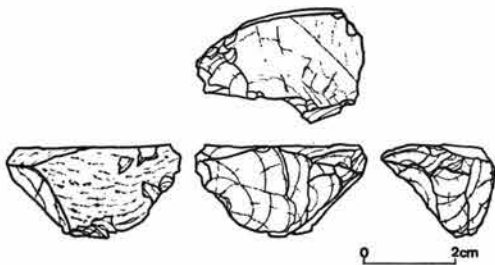
第18図 掘立柱建物跡実測図

建物跡は、主軸を南北にとり、梁間4間・桁行5間の規模である。柱間は約180cm(約6尺)等間で、柱穴は約40cmの円形で深さは平均して約30cm程である。柱穴からの出土遺物は縄文時代のものとみられるチャート製の石核1点だけであり、建物跡の時期を示す遺物は得られていない。

3. 出土遺物

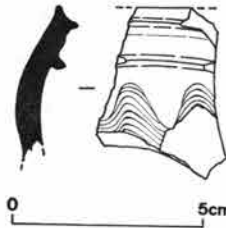
整地層から須恵器破片・敲石が、掘立柱建物跡の柱穴から石核が出土している。

石核(第19図) 掘立柱建物跡の柱穴埋土より出土した。黒灰色を呈する良質のチャート製である。節理面に沿って割れてできた平坦な面を打面として



第19図 石核実測図

主に利用し、剥片を剥取している。側縁からの剥片剥取を最後に石核としての役割を終えた残核である。長さ約40cm・高さ約2cmを測る。縄文時代のものか。



第20図 須恵器実測図

須恵器(第20図) 須恵器は整地層から細片2点が出土している。杯身と甕の口縁部がある。後者のみを図示した。甕は、頸部に波状文、口縁外縁に断面三角形の凸帯を施す。稜が鋭く、古式である。胎土には砂粒を含まず緻密である。色調は青灰色、焼成は堅緻である。6世紀初頭頃のものだろう。

敲石(第21図) 砂岩製で、全長12.8cm・太さ5.2cmを測る。下端に潰れた痕跡があり敲石として使用されたものらしい。器体表面に擦痕が認められることや下端部に折損したと思われる痕跡があることなどから、本来磨製石斧として製作され、折損後に敲石として転用されたものと考えられることができる。弥生時代のものだろうか。



第21図 敲石実測図

4. おわりに

今回の調査では遺構・遺物が希薄であったが、掘立柱建物跡を一棟分検出したほか縄文時代のものと思われる石核等を確認したことにより、近接地にこれらに関連する遺構が存在する可能性が高いものとな



第22図 掘立柱建物跡全景

った。また、土層の堆積状況の観察の結果、これまで遺構のベースとされてきた黄褐色粘質土は火山灰起源の土壌であることが明らかとなり、旧石器時代の文化層を包含する可能性が生じた。今後、当遺跡及び周辺地域での調査においてはこの点を留意しておく必要がある。

(田代 弘)

注1 国府型ナイフ形石器及びササカイト剥片を採集。後日報告予定。

注2 引原茂治「蒲生遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

西岸秀文「蒲生遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

森 正「蒲生遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注3 大山系の火山灰を主体とするものであろう。

4. 百々遺跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、府道大山崎・大枝線の交通安全施設整備事業に伴い、京都府乙訓土木事務所^(注1)の依頼を受けて実施した。当該地は、京都府乙訓郡大山崎町大字円明寺小字夏目に所在し、平安時代の遺物散布地(百々遺跡)内にあり、西国街道(山陽道)に沿う(第23図)。

調査を実施するにあたって、京都府教育委員会、京都府乙訓土木事務所等との協議の結果、当調査研究センターが調査主体となり、調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員竹井治雄・黒坪一樹が担当した。調査に要した期間は、平成2年5月15日から8月29日までであった。なお、調査期間中、大山崎町教育委員会から貴重な御助言を頂き、また乙訓土木事務所から多大の御協力^(注2)を賜った。

(小山雅人)

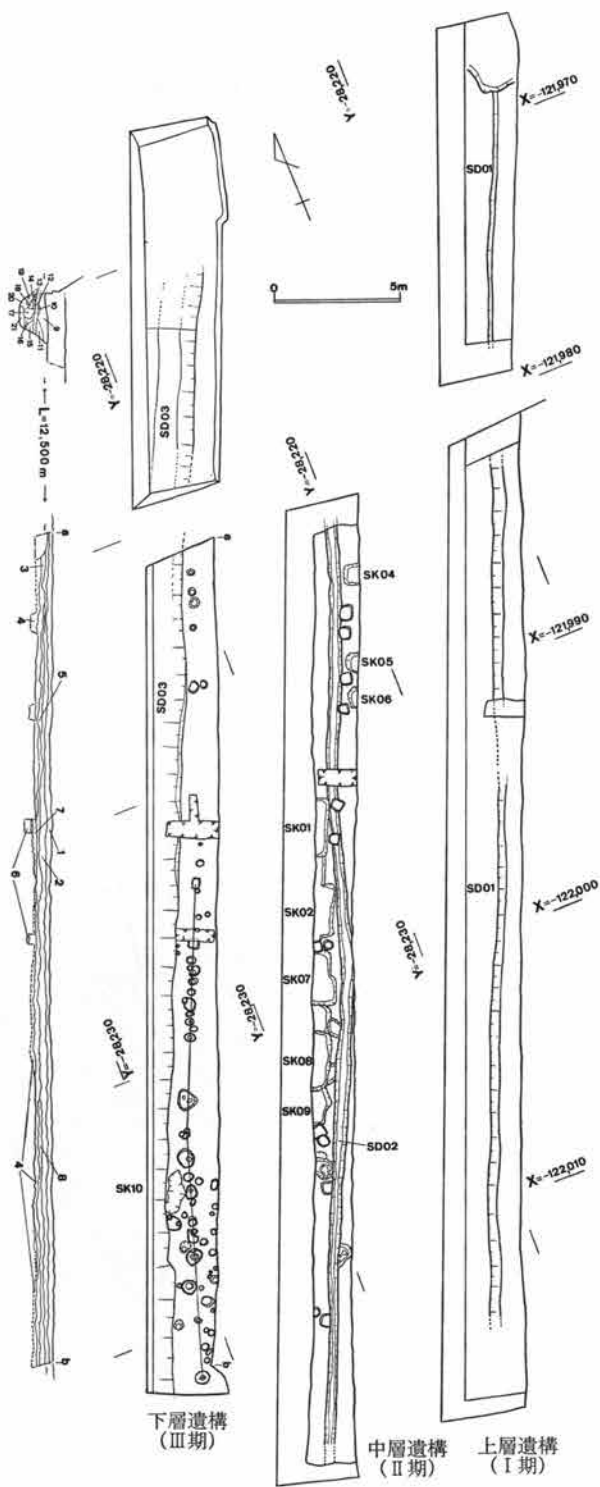
2. 調査の経過と概要

現地調査にあたっては、府道に沿う長さ約80mの調査対象地内に、幅3mの狭小なトレンチを設定し、重機によって耕作土等を約30cm除去した後、手掘りによって厚さ約10cmの包含層を掘り下げ、第1遺構面に達した。この面で西国街道に並行する溝1条を検出した後、再び包含層(25cm)を掘り下げ、第2遺構面の調査を行った。この面では西国街道に並行して流れる溝のほか、大小の土坑と柱穴を検出した。この遺構群の基盤層は、氾濫によって堆積した厚い砂礫層からなり、若干の遺物を包含するものの、断ち割り等を行った後、いったんは調査を終了した(6月26日)。ところが、工事中に、この砂礫層(厚さ30cm)の下層にさらに遺構面があることが確認され、急遽再調査を行った(8月22日～29日)。その結果、南北溝や柱穴などの遺構が、9世紀の土器を伴って



第23図 調査地位置図(1/25,000)

1. 暗灰褐色有機質土
2. 暗灰褐色礫混じり粘質土(SD01埋土)
3. 暗褐色土(赤味混じる)
4. 濃暗茶褐色砂礫混じり粘質土
5. 灰褐色粘質土混じり砂礫
6. 暗黄褐色砂礫
7. 淡灰褐色粘質土
8. 暗褐色灰褐色粘質土
9. 茶褐色礫混じり砂土
10. 青灰色粗砂
11. 灰色砂土
12. 青灰色砂(粗い)
13. 褐色砂(鉄分沈澱あり)
14. 青灰色礫混じり粘質土
15. 灰白色粘土
16. 青灰色砂(細かい)
17. 褐色砂(堅くしまる)
18. 青灰色砂質土
19. 淡灰白色粘土
20. 青灰色砂礫
21. 茶褐色砂(粗い)



第24図 遺構実測図

検出された。

(小山雅人・
竹井治雄)

3. 検出遺構

a. 上・中層遺構

(第24図, 図版第13)

上・中層面で検出された遺構には, 溝・土坑群・柱穴群がある。共伴した土師器・須恵器等の土器類は, 概ね平安時代に属する。

溝S D01 トレンチ東寄りで検出した西国街道に並行する溝である。幅は, 1.2m以上・深さ0.2m程度で, 溝の東肩は調査地の東側に広がる。概ね, 暗灰褐色礫混じり粘質土が堆積している。

溝S D02 トレンチ中央で南北30m以上検出した。幅0.3~0.4m・深さ0.2~0.4mを測る。断面は「U」字形を呈し, 概ね青灰色粘質土が堆積している。溝の北半部と南半部は直線的であるが, 中央部ではやや斜行し

ており、全体的に見ると少し湾曲している。出土遺物には須恵器の細片があるが、溝の埋没時期については、概ね小ピット群より古く、土坑群より新しい。

土坑SK01・02 ともに方形である。長辺2.1m以上で、深さ30cmを測る。

土坑SK04・05・06 方形を呈し、青灰色粘質土が堆積する。一辺0.7m以上・深さ20cmを測る。

土坑SK07・08・09 長辺約1.5~3.5m・深さ20cmの方形ないし不定方形を呈し、焼土と炭化物が堆積する。

(竹井治雄)

b. 下層遺構(第24図)

下層面で検出された遺構には、溝・土坑・柱穴群がある。出土遺物としては、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などがあり、概ね9世紀末までの平安時代に属する。

溝SD03 西国街道に並行に走る。トレンチ北側でみると、復原幅約2.3m・深さ約1.0mを測る。埋土は、暗青灰色砂礫を主とする。砂粒は北に行くほど粒が大きくなる。溝の座標は北で $X = -121,972.8$ ・ $Y = 日28,117.3$ 、南で $X = -122,010$ ・ $Y = -28,233$ を測り、 $N17^{\circ}50'$ Eの傾きを持つ。

土坑SK10 不整楕円形で、長径1.8m・短径0.7m・深さ0.15mを測る。炭化物・遺物を多く含み、暗灰褐色粘質土の埋土を持つ。

柱穴跡 直径20~30cmの円形のもの、一辺40~70cmの方形掘形を持つものなどがある。掘形内には、柱痕を残すもの4基があり、門跡や掘立柱建物跡等の遺構になる可能性もあるが、ほぼ同時期と考えられる溝SD03に極めて近接していることから、現状では敢えて柵列としておく。

(黒坪一樹)

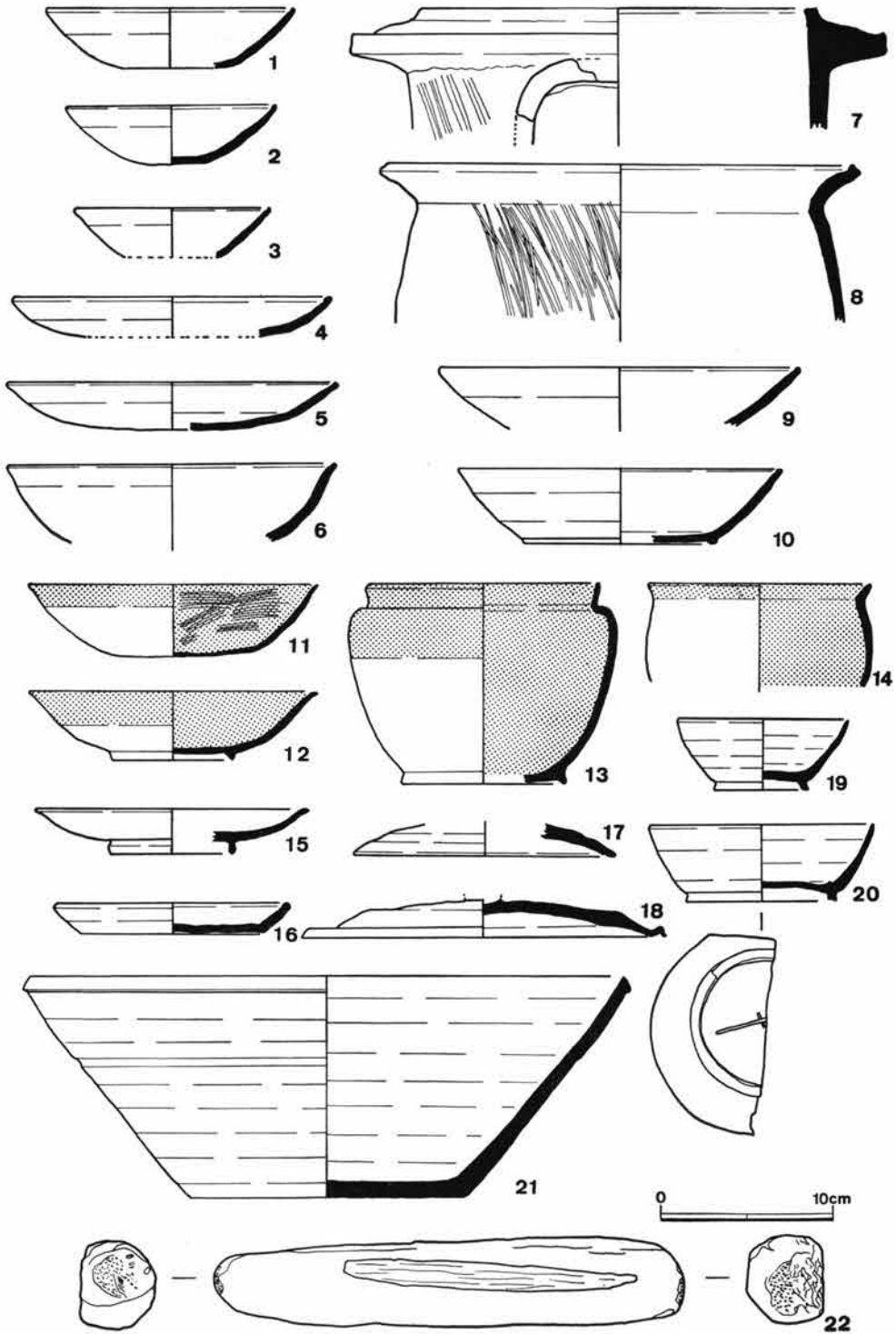
4. 出土遺物

a. 上・中層遺構(第25図)

土師器 1~3は、口径12~13cmの椀Aである。体部は内湾しながら、斜上方に立ち上がり、端部は小さく肥厚する。

4と5は、口径18cm前後の杯Aである。端部は大きく肥厚する。6・9・10は、口径19cm前後の杯Bである。外面はヘラミガキ、端部は小さく肥厚する。

黒色土器 11・12は、口径19.2cmを測るAタイプの椀である。11の内面にはヘラ状の痕跡を残す。12には高台が付く。



第25図 出土遺物実測図 (1)

5・6・9・10・13・18. SK04 1・3・7・8・14・16・19・21. SK07 20. SK08
 4. SK09 12. Pit4 11・15・17・22. 包含層

13は、口縁部が直立、底部には高台が付く葉壺に似た壺である。

14は、内面、口縁外面とも黒色を呈する壺である。

須恵器 15・16は、口径15.6cm・13.6cmを測る皿である。15には高台が付く。

17・18は、つまみが付く蓋である。

19・20は、それぞれ口径10cm・13.2cmを測る杯Bである。20の底部外面にはへら描きが施されている。

21は、口径35cmを測る鉢である。

石製品 22は、長さ27.2cmを測る粘板岩を材質とする石棒である。石棒の両端には敲打痕があり、また中央部には長さ17cm・幅2cmほどの擦痕がある。縄文時代のものである。

(竹井治雄)

b. 下層遺構(第26図)

土師器皿(1～10) 1・2は口縁部がやや内湾し、端部をそのままおさめる。口径は、1が8.6cm、2が9.6cmを測る。外面の調整は口縁上半をナデ調整するが、底部は未調整である。

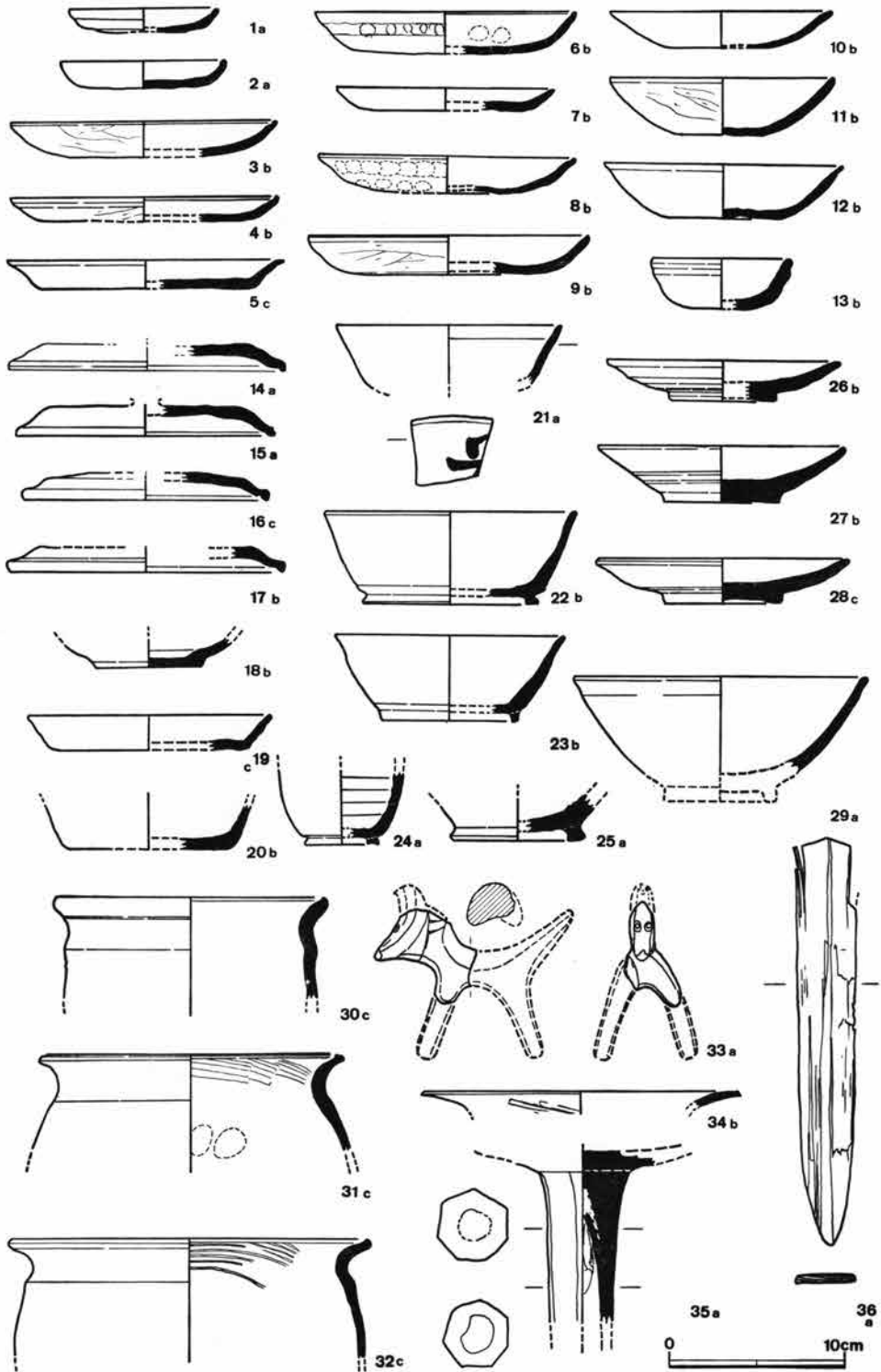
3～10は、7が口径12.4cmと小型であるが、他は15～16cmのものである。口縁部が直線的に立ち上がり、端部をそのまま取めるもの(7・9)、端部が巻き込み気味になるもの(3・4・6・8)、口縁部が外反して立ち上がるもの(5・10)などがある。外面の調整は、底部を未調整にとどめ、口縁から体部をケズリ調整するもの(3・4)、口縁上端のみをケズリ調整するもの(9)、ナデ調整を施すもの(5・6)に分かれる。7・10は調整不明である。

土師器碗(11) 口径13cm・器高3.3cmを測る。口縁端部はそのまま丸くおさめる。外面の調整は、体部から口縁までをケズリ調整するが、底部は不明である。

土師器杯(12・13) 12は口径13.9cm・器高3cmである。底部からやや肥厚しつつ立ち上がり、端部は細くなり、外反気味になる。外面はナデ調整である。13は、ずんぐりした器形と厚い器壁を持つ小型の杯である。口径8.8cm・器高2.9cmを測る。外面はナデ調整を施す。淡橙褐色の焼きで、口縁端部付近に油脂性のススが付着している。燈明皿的な使われ方をしている。

須恵器杯蓋(14～16)・転用硯(17) 14～16は、全体に笠高の器形で、ともに口縁端部が屈曲して垂下するタイプのものである。全面ロクロナデ調整する。

17は、口縁部の断片ながら、内面全体に顕著な墨痕をとどめる。調整はロクロナデ調整である。



第26図 出土遺物実測図 (2)
a. SD01内 b. 柱穴内 c. 柱穴面

須恵器鉢(18) おそらく鉢の底部であろう。回転糸切り底で径は6.2cmを測る。体部はロクロナデ調整で、胎土・焼成は堅緻で、良好である。

須恵器杯(20~23) 20は、杯Aの断片である。ロクロナデ調整による。

21は、底部からほぼまっすぐにのびる口縁部をもつ。体部外面に墨書が見られる。判読は不明である。

22・23は、杯Bである。22は、口径14.6cm・器高10cmを測る。口縁部は端部付近でやや外反する。底部は高台から少し外にのび、ふんばった形を呈する。23は、口径13.2cm・器高5cmを測る。22と同様に、口縁部は中間部からやや外反する。ともにロクロナデ調整である。

須恵器壺(24・25) 24は、底部から直に立ち上がる体部をもつ。内面には、明瞭な稜のつく回転ヘラケズリ調整が見られる。25は、24に比べ、いくぶんふんばった底部をもち、丸みをもつ球形に近い体部をもつようである。底径は、24が4.2cm、25が7.8cmを測る。

須恵器皿(19)、無釉陶器皿(26・27)、緑釉陶器皿(28) 19は、底部からやや外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。口径は、復原すると14cmを測る。ロクロナデ調整が全面に施される。

26・27は、緑釉陶器の皿の素地であろう。28は、淡緑灰色の釉が部分的に残っている。26・27・28の法量は、それぞれ口径13.4cm・14.4cm・14.7cm、器高2.3cm・3.1cm・2.5cm、底部径6.2cm・6.7cm・6.7cmを測る。口縁部は、26と28がやや外反し、27は内湾する。外面の調整は、26は、回転ヘラケズリ調整し、27・28は、体部外面下半を回転ヘラケズリ調整している。26~28の高台は、円盤状高台を貼り付け、最終的にケズリ出している。

緑釉陶器杯(29) 口縁から体部下半までの破片である。暗(濁)青緑色の釉が均等に薄く内外面に被る。表面に細かな気泡が観察される。口径は、復原すると17cmになる。体部外面は細かなケズリ調整の後、ナデ調整されている。

土師器甕(30~32) 30は、口径15.8cmを測る。ほぼ直に立ち上がる体部から、やや外反する口縁部へ滑らかに移行する。口縁部は上方にややつまみ上げられている。内外面ともナデ調整で、特に体部と口縁の境は強く指でナデられている。

31・32は、口径17.4cm・20.6cmをそれぞれ測る。30と同様、口縁の立ち上がり付近に強いナデ調整が入る。体部の調整は不明である。口縁部の形は端部を巻き込む。ともに口縁部内部に明瞭な強いハケ目調整が見られる。

土馬(33) 頭部から胸部にかけての断片である。粘土板を半分に折り重ねる製法で、腹部に強いナデ調整の痕跡がある。

高杯(34・35) 34は、上杯部の口縁断片である。内面にススが付着している。外面にわ

ずかながらへら磨き調整痕がみられる。35は、34とは別個体である。七角形に面取られた脚柱部をもつ。褐色の色調で、胎土は精良である。

齋串(36) ほとんど完形品で長さ23.5cm・幅3.3cm・厚さ0.4cmを測る。下部先端には成形の際のケズリによるカット面が3～4面見られる。上部両側には左右に各2～3条の裂け目が入る。先端は鈍角の山形になっている。

その他の遺物 須恵器甕片、軒丸瓦、軒平瓦、製塩土器(主に柱穴内)などが出土し、量的には整理箱5箱程度である。

以上、各遺物は遺構の出自も異なるが、所属時期はおよそ9世紀代と考えられる。

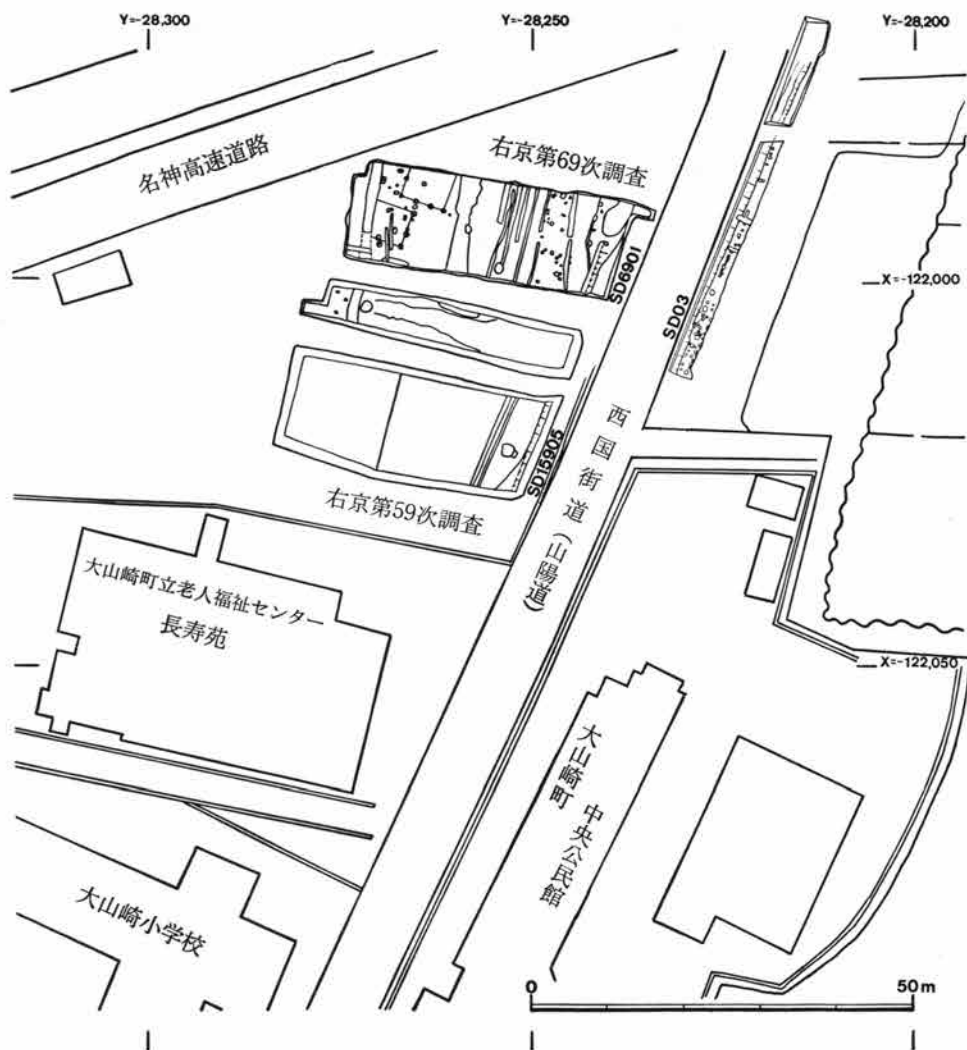
(黒坪一樹)

5. ま と め

今回の調査対象地は、狭小とは言え西国街道(古代の山陽道)に沿うもので、調査の当初から、山陽道に関する遺構の検出に期待がよせられた。

周辺地域における山陽道の調査としては、高槻市教育委員会による郡家今城遺跡の発掘調査により、古代山陽道が調査されている^(注3)。この調査では、8世紀中葉から9世紀前半にかけての第Ⅰ期の側溝と、10世紀後半まで使用されたと考えられる第Ⅱ期の側溝が検出されている。第Ⅰ期の側溝は幅約1.5m、路面幅は明らかでないが、調査の状況から9.5m以上と考えられる。第Ⅱ期の側溝は、溝1・2の幅が約1.0mで、溝間の心々では約6mを測り、路面幅約5mと第Ⅰ期の路面より狭くなっている。今回の調査地周辺における山陽道に関する調査としては、大山崎町教育委員会による長岡京跡右京第69次・第159次調査^(注4)と、当センターが行っている長岡京跡右京第349次調査^(注5)がある^(注6)。前記2次の調査では、山陽道の西側溝の西肩を検出している。また、右京第349次調査では山陽道の東西側溝を検出しており、調査は継続中である。いずれの遺構も時期決定が充分なされていない段階であるが、第69次調査で検出した側溝SD6901は、検出した幅が2.0m以上で、平安時代前期と考えられている。第159次調査で検出した側溝SD15905は同時期のものと考えられており、これらの側溝が今回検出した第3期の東側溝と対になると考えられる。溝SD03は、トレンチ北側で復原幅約2.3mを測り、両溝の東西外側での肩部の距離は約15mを測る。側溝肩部の検出高から路面の盛土に対する法を^お考えれば、想定される路面幅は約10m程度となる。この路面規模を持つのが9世紀の西国街道である。

奈良時代(平城京期)の山陽道は、平城京の北辺から発し、八幡市男山の北で山崎橋をわたったのち、淀川北岸(乙訓郡大山崎町)から西におれて大宰府に向かうコースを取る。山崎橋以北にのびる現在の西国街道は、京都南部と丹波や葛野^{かどの}への古道であったと考えるが、



第27図 西国街道側溝検出状況

長岡京遷都後は主要幹線道になったと思われる。長岡京南京極大路以南は、長岡京遷都に伴い改修されたと考えたいが、現在までに確認されている遺構からは、それを証明するには至っていない。

平安京遷都後には、当調査地の南約300mで西国街道から分岐する久我駸が、平安京の羅城門以南に造営された鳥羽作り道にむけて一直線に造営される。これが、平安京遷都後の山陽道^(注7)である。しかし、この久我駸は、小畑川水系の氾濫により度々寸断されるため、本来の機能を充分果たすことができず、ある段階からは、西国街道が山陽道としての機能を果たしたと考えたい。

(戸原和人)

- 注1 本調査地は推定長岡京域外にあたり、百々遺跡の範囲にあたるため、大山崎町遺跡確認15次調査として登録した。
- 注2 現地作業及び整理作業には、以下の人々の協力を得た。
丸尾 晋・青木 潤・山中道代(以上敬称略)
- 注3 「嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・14」(『高槻市文化財調査概要』XIV 高槻市教育委員会) 1990
- 注4 林 亨・百瀬正恒・百瀬ちどり「長岡京跡右京第69次(7ANSDD地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第4集 大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1984
- 注5 大山崎町教育委員会『長岡京跡右京第159次(7ANSDD-2)現地説明会資料』1984 長岡京跡右京第69次調査と、右京第159次調査の遺構図を合成するにあたっては、大山崎町教育委員会の協力を得た。
- 注6 長岡京跡左京第349次発掘調査 名神高速道路拡幅工事に伴う発掘調査は、1990年4月より調査を行っており、西国街道の東西でこれに並行する溝を調査中である。
- 注7 足利健亮「久我繩手」『FHG51』野外歴史地理学研究会 1978.2
- 注8 奥村清一郎・戸原和人・百瀬ちどり・中塚 良「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要—左京六条二坊五・十二町・下八ノ坪遺跡・久我畷—」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1985.3

5. 興戸遺跡第6・8次発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、平成元年度と同2年度に実施した国道307号道路新設改良事業に伴う発掘調査の概要である。元年度は年度末まで調査した関係上、細かな検討ができなかったため、今年度調査中に整理作業を実施し、ここに2年分を報告する。

調査地は、京都府綴喜郡田辺町字興戸^{こうと}に所在する興戸遺跡である。南北約750m・東西約600mの遺物散布地で、南山城屈指の広大な遺跡である。この地に道路が建設されることになり、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが、京都府土木建築部の依頼を受けて発掘調査を実施した。

現地調査は、前述したとおり平成元年度と同2年度に実施したが、前者を興戸遺跡の第6次、後者を第8次とする。担当は、第6次が調査第2課調査第2係係長水谷寿克と同主任調査員伊野近富で、第8次は第2係係長辻本和美と伊野であった。

調査は、対象範囲が東西約450m、幅約20mの9,000m²であったが、試掘調査をした結果、第6次が約1,500m²、第8次が約2,300m²の面的調査を実施した。

調査中は、田辺町教育委員会や京都府田辺土木事務所をはじめ、関係諸機関に大変お世話になった。また、調査補助員や整理員、作業員に多大な労苦^(注1)をかけた。記して感謝したい。なお、発掘調査にかかる費用は、全額京都府が負担した。

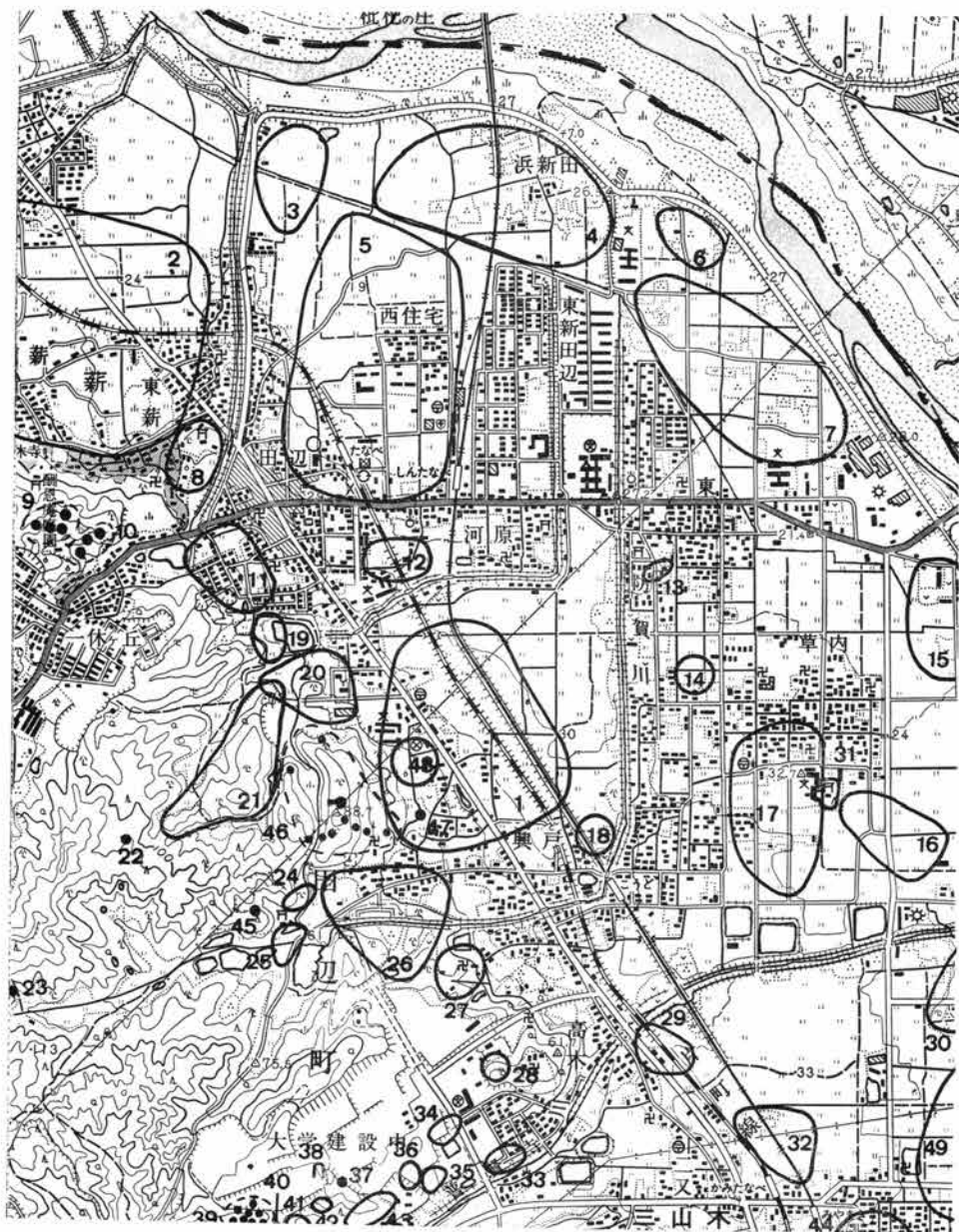
2. 位置と環境

田辺町は南山城のほぼ中央を貫流する木津川左岸にある。西部は京阪奈丘陵、東部は木津川によって形成された沖積地で構成されている。

興戸遺跡は、田辺町のほぼ中央部にあり、現在まで8回の調査が実施されている。以下にその概略を説明する。

第1次調査^(注2)は、昭和50年に田辺中学校校地内で実施されたもので、古墳の副葬品とも考えられる玉類や古式の須恵器が発見されている。

第2次調査^(注3)は、昭和54年に府立山城園芸研究所内で実施されたもので、弥生時代の溝、古墳時代後期の竪穴式住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡・溝など、平安時代の掘立柱建物跡など弥生時代以降の複合遺跡であることが判明した。その中で、特に奈良時代の建物跡群は、規格性に富み、正南北に近い方位をとっている。このことから官衙的な建物群とみ



第28図 調査地位位置図 (1/25,000)

- | | | | | | |
|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|-------------|
| 1. 興戸遺跡 | 2. 薪遺跡 | 3. 西浜遺跡 | 4. 伝道林遺跡 | 5. 稲葉遺跡 | 6. 青上遺跡 |
| 7. 東神屋遺跡 | 8. 棚倉遺跡 | 9. 天理山古墳群 | 10. 小穴古墳群 | 11. 尼ヶ池遺跡 | 12. 河原遺跡 |
| 13. 鍵田遺跡 | 14. 五反田遺跡 | 15. 橋折遺跡 | 16. 宮ノ後遺跡 | 17. 南垣内遺跡 | 18. 下ノ河原遺跡 |
| 19. 竹ノ脇遺跡 | 20. 田辺遺跡 | 21. 田辺城跡 | 22. 稲葉丹後谷古墳 | 23. 大谷古墳 | 24. 興戸宮ノ前窯跡 |
| 25. 川原谷遺跡 | 26. 興戸宮ノ前遺跡 | 27. 興戸城跡 | 28. 天神山遺跡 | 29. 野神遺跡 | 30. 飯岡遺跡 |
| 31. 草路城跡 | 32. 田中遺跡 | 33. 七瀬川遺跡 | 34. 散布地 | 35. 都谷遺跡 | 36. 新宗谷窯跡 |
| 37. 新宗谷古墳 | 38. マムシ谷窯跡 | 39. 下司古墳群 | 40. 散布地 | 41. 館跡 | 42. 散布地 |
| 43. 新宗谷遺跡 | 44. 直田遺跡 | 45. 酒壺古墳 | 46. 興戸古墳群 | 47. 郡塚古墳 | 48. 興戸庵寺 |
| 49. 古屋敷遺跡 | | | | | |

られる。

(注4)
第3次調査は、昭和59年にマンション建設の際に行われたもので、弥生土器片などの遺物は出土したものの、遺構はなかった。

(注5)
第4次調査は、昭和62年に山城田辺郵便局新庁舎建設に伴い行われたもので、古墳時代前期の貯蔵穴様土坑2基が発見されている。

(注6)
第5次調査は、昭和63年に遺跡の範囲確認を目的として実施した。小字は郡塚といい、以前に郡塚古墳と呼ばれる塚があった地域であった。調査によって、古墳時代の土坑・溝、平安時代の溝などが発見された。遺物としては、弥生土器が出土したが、集落の中心は西側であるらしい。平安時代のものとしては、溝の中から多数の土師器皿に混じって、黒色土器碗・瓦器碗・無釉陶器・白磁があり、特に白磁は11世紀に遡るものがあり、一般集落ではない様相を示している。

(注7)
第7次調査は、鉄塔移設工事に伴うもので、すぐ南の第8次調査の第8トレンチの状況と同じく、弥生時代以降の複合遺跡であることが判明した。

以上のような調査結果によって、興戸遺跡は弥生時代以来の複合遺跡であること、その



第29図 調査地位位置図（番号は調査次数）

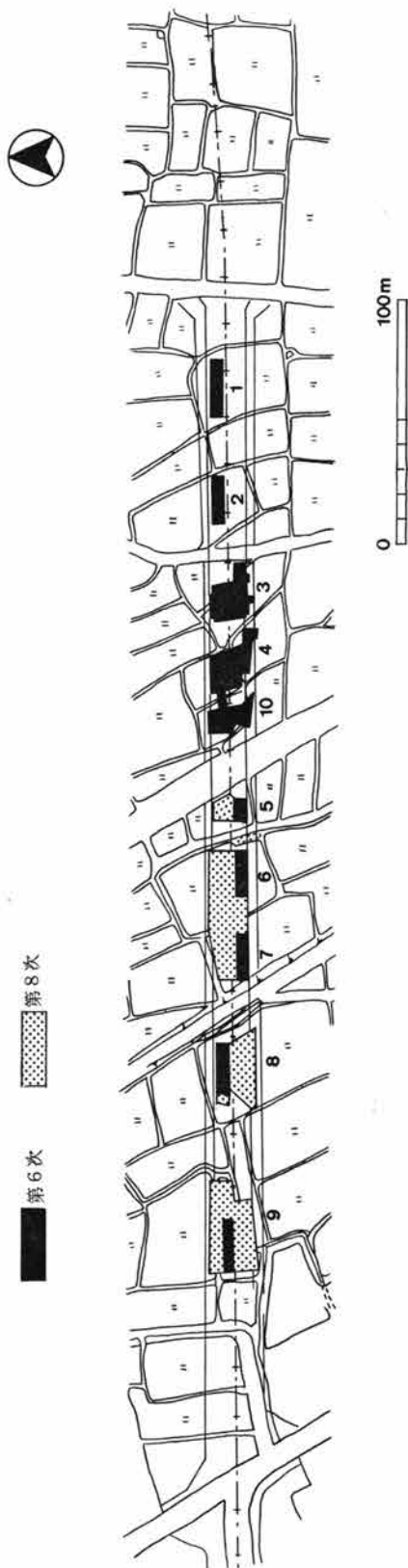
中でも奈良時代は官衙的な建物群を擁しており、有力地域であったことが判明してきた。

ここで地形や周辺遺跡の概要について把握しておきたい。

興戸遺跡は、京阪奈丘陵の裾から張り出した台地上に展開しているが、斜めに通る府道八幡木津線を境として、東方は一段低くなり耕作地帯となっている。東方に行くに従って徐々に地形は下がり、遺跡の東端で更に一段(約50cm程度)下がって、防賀川に至る。つまり、地形的には西部と東部では若干相違しており、これが遺跡の立地に関して影響を及ぼした可能性も考慮すべきであろう。

府道より西側の丘陵地には興戸古墳群(5基)^(注8)がある。過去の発掘調査によれば、古墳時代前期を中心とする古墳群であるが、5号墳は弥生時代後期の方形台状墓の可能性があると、2号墳は円墳であるが、埴輪・葺石・粘土槨という典型的な畿内前期型古墳の特徴を備えていることが知られる。丘陵裾には奈良時代前期の瓦が出土する興戸廃寺があり、また、現府道八幡木津線の当該地帯は、古代の山陰道と山陽道の併用道路と同地である^(注9)といわれており、このような点からも遺跡周辺が有力地であったことが追証できる。

但し、これらは点的な成果のいくつかから導き出されたもので、今回のように約450m区画を線的に調査したものは始めてであり、よりいっそう、確度の高い遺跡把握が可能となった。



第30図 調査地周辺図(トレンチ配置図)第6・8次分

3. 調査概要

発掘調査は、まず試掘調査から始めた。それは、今までの調査は府道より西部が中心であり、東部の当該地の資料がなかったためである。調査地は東西方向に約450m・幅20mが対象地であったが、ここに10か所のトレンチを設定した。トレンチ名称は東から西へ1～9まで付けたが、第10トレンチだけは、中央部に戻った格好になった。これは、この付近に遺構が濃密にあり、面的に広げる必要があったためである。

試掘の結果、平成元年度は東部を中心に本格調査をし、同2年度に残りの西部を本格調査することにした。調査地内はJR線と近鉄線が縦断しており、これで表示すると元年度は近鉄線以东、同2年度は近鉄線以西となる。なお、国土座標(第Ⅶ座標系)で地点を表示した。標高は府道沿いのポイント34.278mを基準とした。では第6次調査から説明する。

(1) 第6次調査

a. 検出遺構

現地調査は、平成元年11月9日から平成2年2月27日まで実施した。調査地全域は、耕作地であったので、まず現代の耕土を重機で除去し、その後人力で掘削した。

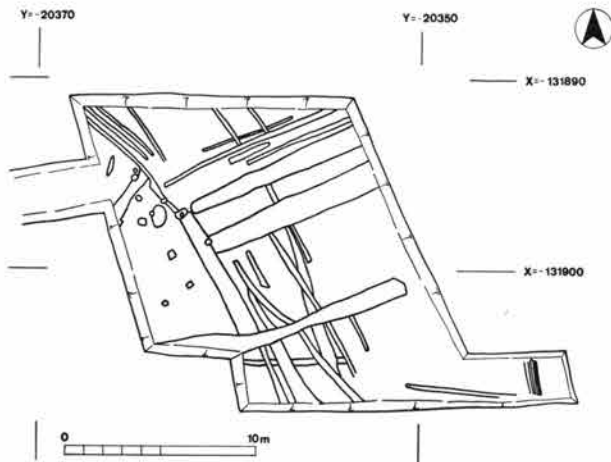
基本的な面は3面である。まず、現代の耕土(深さ40cm)の下に中世の耕土(厚さ10cm)、奈良時代を中心とした遺物包含層(10cm)、部分的に弥生時代の遺物包含層の3面である。

第1トレンチ 東西25m×南北5m、面積125㎡。中世の耕作に伴う溝(うねや区画溝)が検出されたものの、さしたる遺物もなかった。

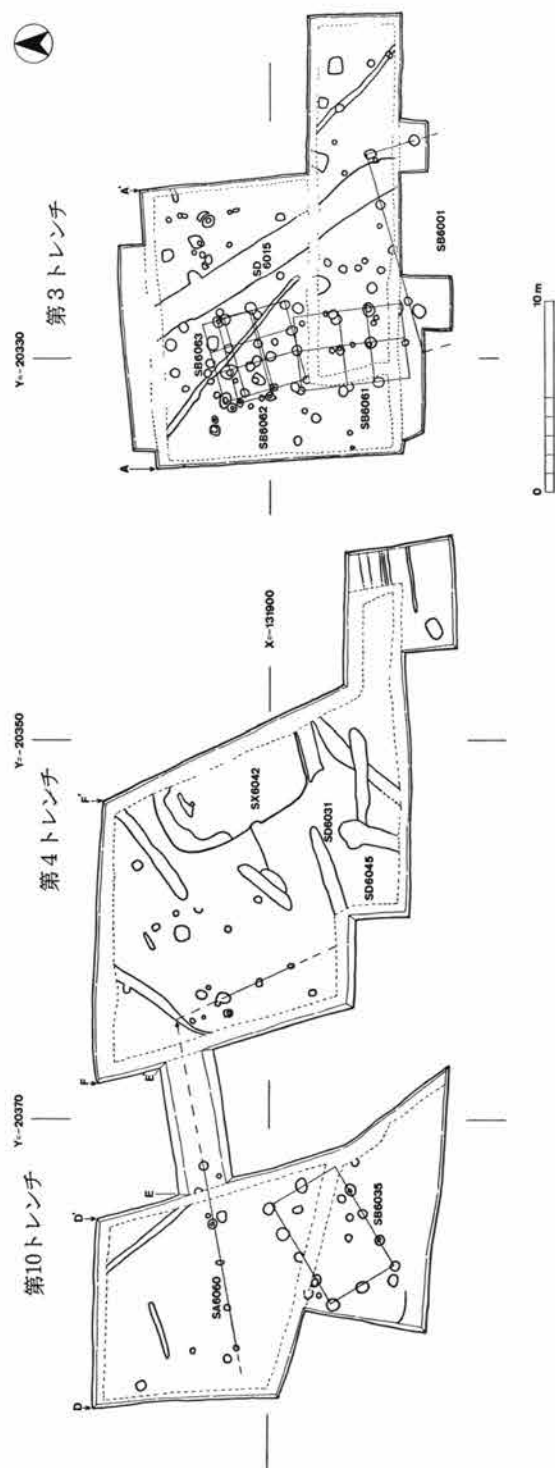
第2トレンチ 東西20m×南北5m、面積100㎡。中世の耕作に伴う溝が検出された。遺物は須恵器の円面硯の小破片(第40図4)が1点出土したほかは、さしたる遺物はなかった。

第3トレンチ 東西20m×南北5mのトレンチを設定し、その後拡張して面積約270㎡となった。

中世の耕作溝の下から、平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡2棟(SB6061とSB6063)と、奈良時代から平安時代前期にかけての掘立柱建物跡1棟(SB6062)、溝1条(SD6015)が



第31図 第4トレンチ平面図(中世)



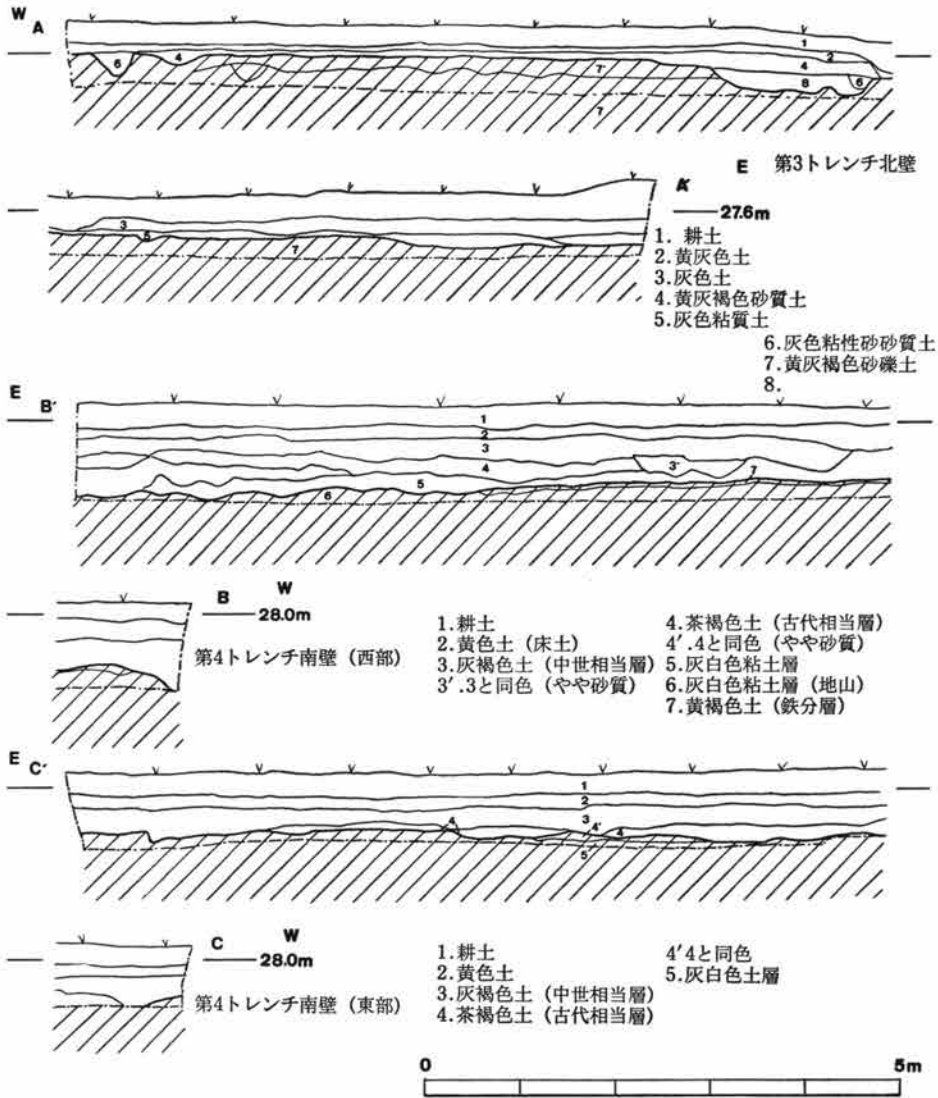
第32図 第3・4・10トレンチ平面図(古代)

検出された。SB6061は東西2間(3.7m)×南北3間(5.8m), SB6063は東西3間(4.2m)×南北3間(4.5m), SB6062は東西2間?(4.5m)×南北1間?(1.8m)である。それぞれ掘形は隅丸方形で、一辺が20~30cmの小規模なものである。また、柱穴は15cm程度の円形である。

なお、トレンチ南端に大きく西偏する掘立柱建物跡SB6001が検出された。これは、東西4間(10.8m)×南北1間(2.7m)以上のものである。掘形は隅丸方形で、一辺30~40cmと、前述の一群よりやや大きい。

溝SD6015は座標北に対して西へ33度偏しているもので、幅1.6m・深さ0.4mの浅いものである。掘立柱柱穴の埋土が暗褐色土系であったのに対し、溝は灰色砂である。遺物は奈良時代のものが多いが、この地点から東はベース層が砂層で、軟弱な地盤であり、今ひとつ輪郭がはっきりしない。地盤は西に行くにしたがって黄褐色粘土の安定したものになっている。

第4トレンチ 東西20m×

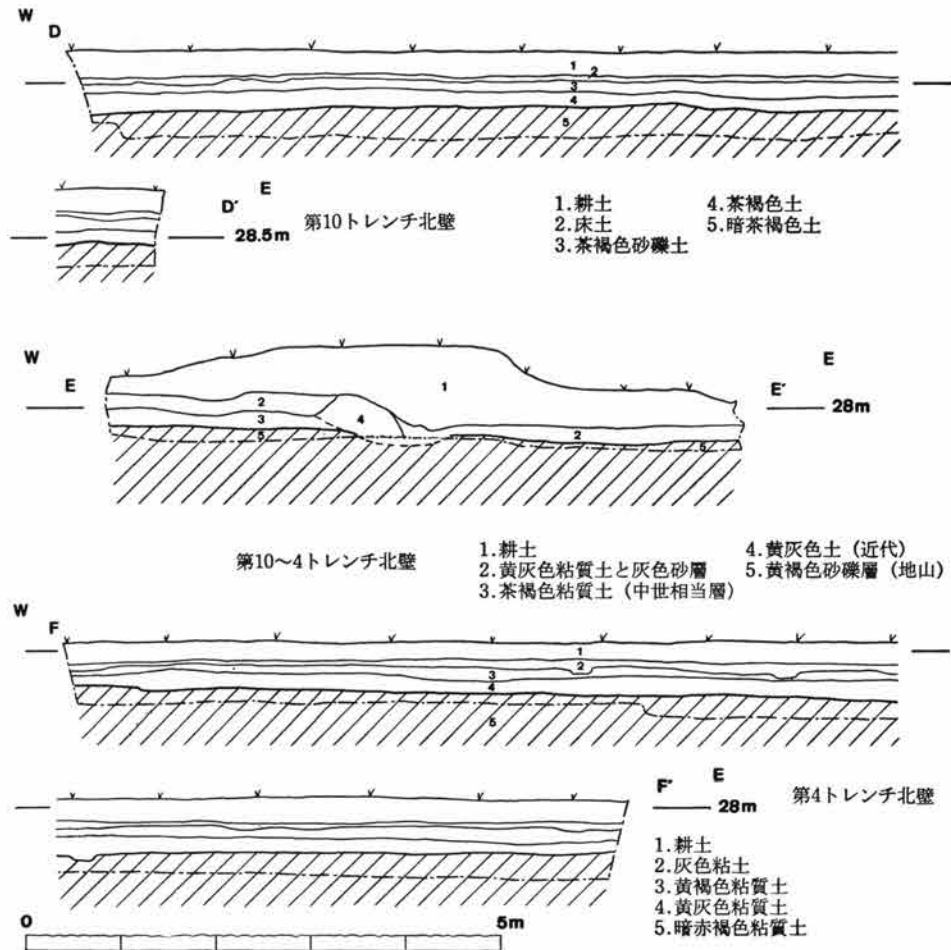


第33図 第3トレンチ北壁・第4トレンチ南壁土層断面図

南北5mのトレンチを設定し、その後北へ大きく拡張した。また、トレンチの東南部で弥生土器が発見されたので、その辺りも拡張し、結局300㎡を発掘した。

まず、中世以降の溝を検出した。これは幅0.2mで、深さ0.5mの直線のものである。北に対して西に約24度偏している。遺物は極端に少なく、埋土は灰褐色砂である。形状から、耕作に伴う区画溝や、畑のうねと思われる。このような溝は全トレンチで認められた。

なお、後で詳しく説明するが、第9トレンチの成果によれば、耕作に伴う溝は近世が北

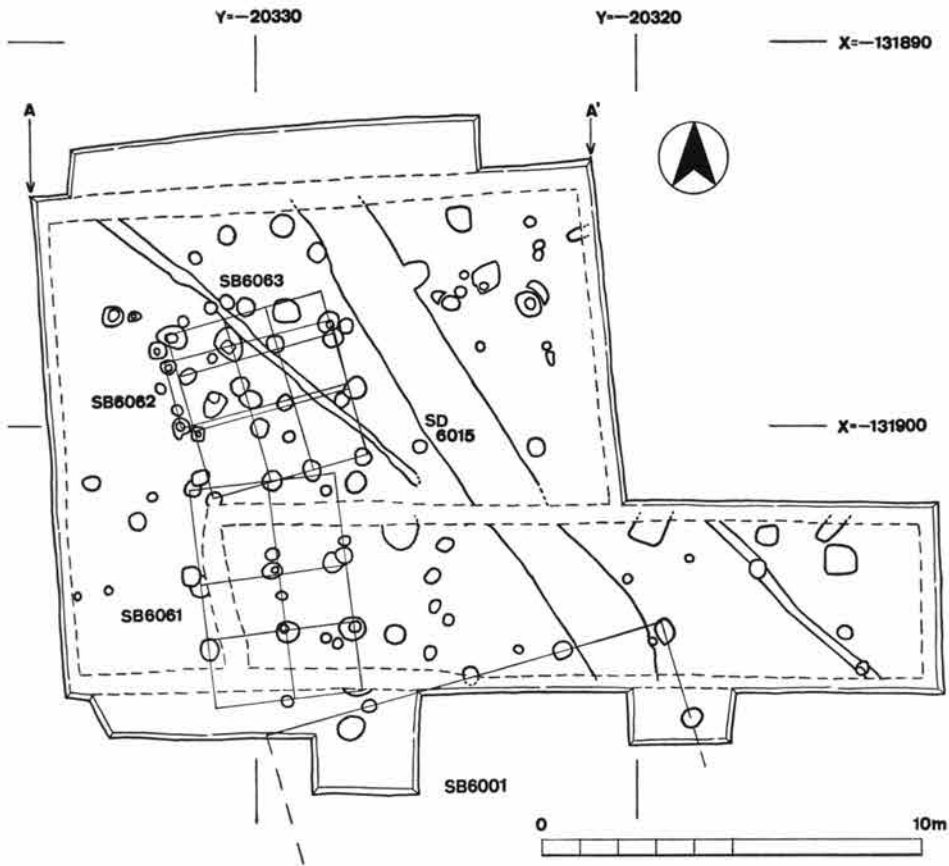


第34図 第4・10トレンチ土層断面図

に対してほぼ正向するのに対し、中世のそれは大きく西偏しており、この状態もまた全トレンチで認められた事実である。

奈良時代の遺構としては、西部に柵と思われるピット群と、東部で方形の竪穴式住居状遺構 S X 6042 が検出された。これは、東部がトレンチの東方にあり全体の規模は確認できなかったが、東西 4 m 以上・南北 8.2 m・深さ 0.4 m である。住居跡のようにしっかりとした底面ではなく、また、かまど等の検出もなくその性格は不明である。遺物は整理箱一箱分出土した。この遺構の方向も、北に対して西へ 33 度偏している。

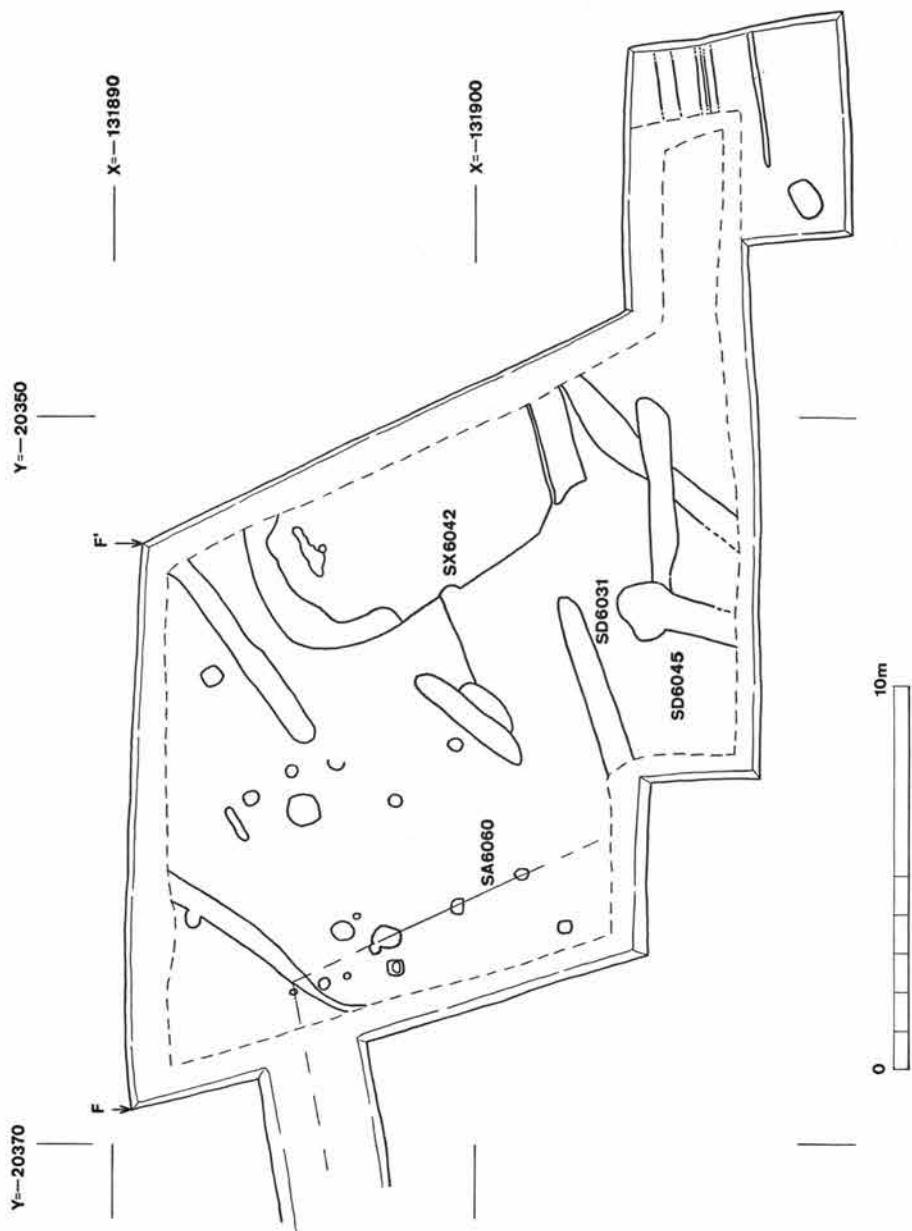
この遺構と重複して弥生時代後期～古墳時代前期の溝 S D 6051 が検出された。これは南西から北東方向に下がるもので、幅は最大 3 m・最小 1.8 m で、深さは最深が 0.6 m、最浅は 0.27 m である。平面形は複雑で人為的に成形しているとは思えず、現在のところ自然流



第35図 第3トレンチ平面図(古代)

路と考えている。第10トレンチでは検出されなかったので、第10トレンチのやや東南を流れていたことになる。

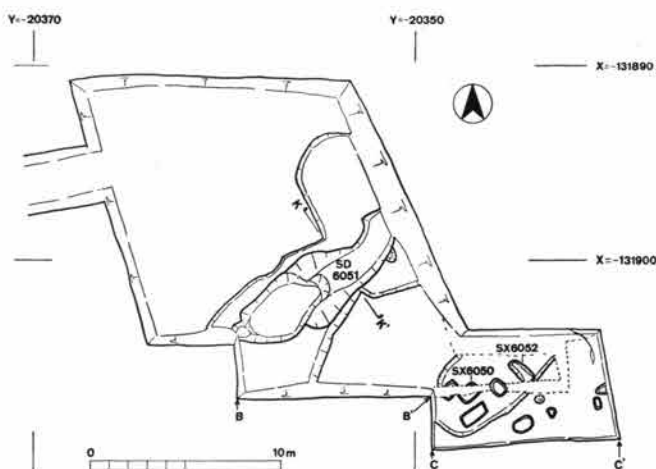
ベースは黄褐色粘土層であるが、この層から掘削された弥生時代の遺構 S X 6050 と S X 6052 が検出された。前者は楕円形の掘形の中に、大きな壺を横たえたものである。当初、合せ口の壺と思っていたが、作業が進行するにしたがい、1つの壺の口縁部を割って合わせ口のように置いていたことが判明した。検出した時点では、やや土圧によって亀裂が入っていたが胴部は完存しており、中は空洞となっていた。その形状から弥生時代中期の小児用壺棺と認定したが、骨の遺存はなかった。掘形の規模は長軸 1 m・短軸 0.7 m で、深さ 0.43 m である。底の形状は卵形であり、緩やかに傾斜していた。後者の土坑 S K 6052 の平面形は隅丸長方形である。東西 0.55 m × 南北 1.7 m で、深さ 0.15 m である。土坑の中央部の南肩に 1 個体の土器片を置いていた。形状から土壇墓の可能性はあるが、骨の遺存はなかった。この他、この周辺には長方形の遺構が 4 か所検出された。これらも土壇墓の可



第36図 第4トレンチ平面図(古代)

能性があるが、骨や土器等は出土しなかった。

第10トレンチ このトレンチは第4トレンチで弥生時代以降の遺構が検出されたことから、その様相を解明するために西側に設置したものである。まず、北部に東西10m×南北5mの長方形のトレンチを設定したが、



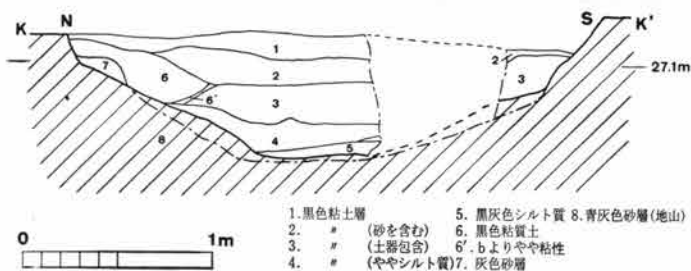
第37図 第4トレンチ平面図(弥生～古墳前期)

その後、南端で掘立柱建物跡の一端が検出されたので、南東部を拡張した。更に第4トレンチ方面に向かって柵列がのびていたので、この部分も拡張した結果、第10トレンチと、第4トレンチは部分的に接続することになった。調査面積は約230㎡である。

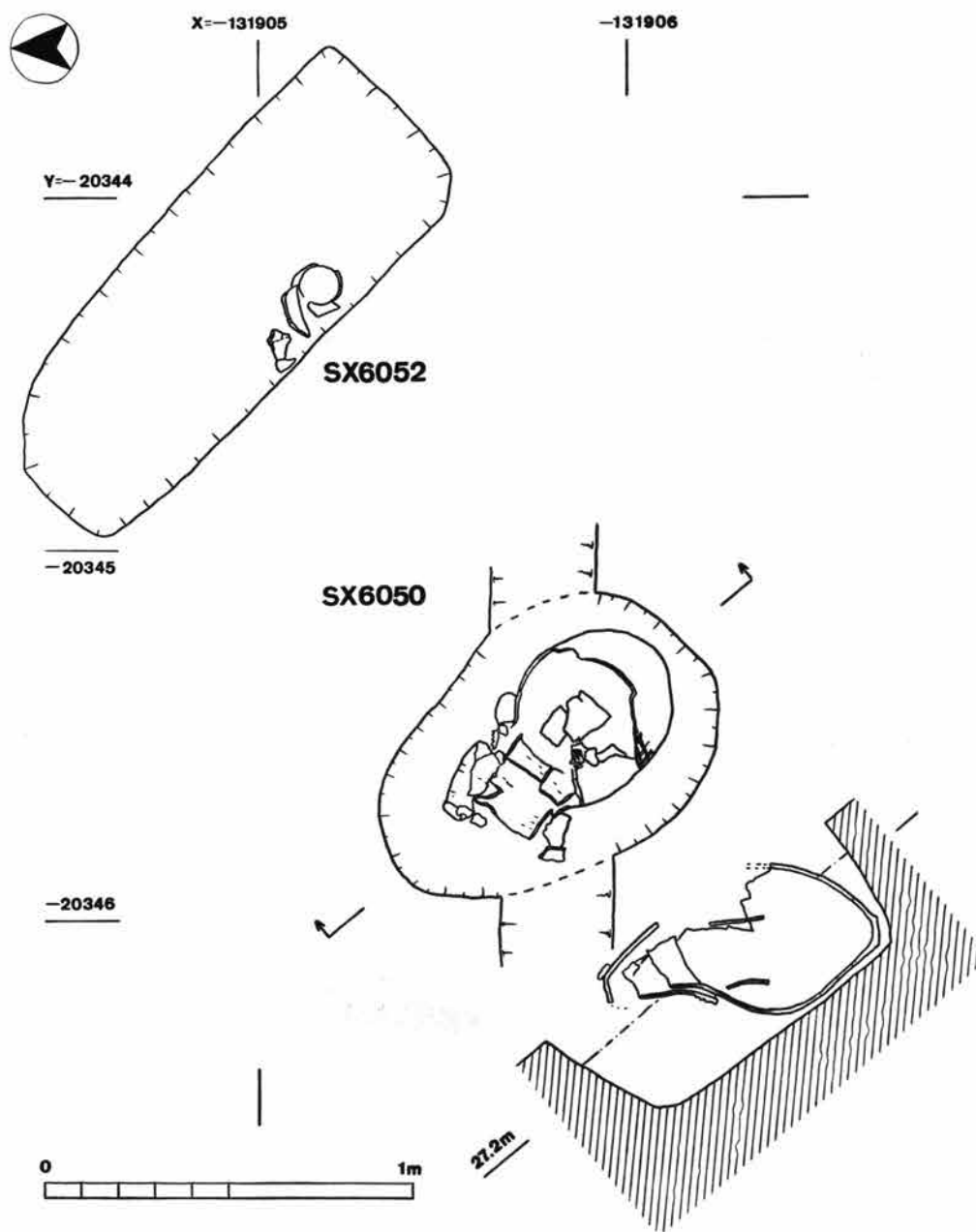
掘立柱建物跡 S B 6035は、東西棟である。北に対して西へ30度偏している。東西4間(6.1m)×南北2間(3.95m)で、深さは2.4mである。掘形の平面形は円形～隅丸方形で一边60cm程度のものである。柱穴は円形で径15cm程度である。7か所で柱痕が遺存していた。なお、掘形の埋土は暗褐色である。ピットから黒色土器が出土した。10世紀。

この北方に東西方向にのびる柵列 S A 6060を検出した。確実には5か所でピットを検出した。円形で径40cm程度である。この柵列より北側はピットも少なく、これが遺跡密度の点において変換線であるといえよう。柵列は更に西にも伸び、また東にも伸びている。第4トレンチ内でも柵列と連続的に3回のピットを検出したが、その間隔が2mと広く、柵列本来の2.5m間隔とは大きく相異なるので、関連性は不明である。

上述した第1～4・10トレンチが本格調査したもので、この他第5～7トレンチの3本はJR線と近鉄線の間を設定し、第8～9トレンチはJR線より以西、府道八幡木津線との間を設定した。いずれも遺構・遺物とも検出されたので、拡張して本格調査をすることになったが、協議の結果、次年度にすることになった。



第38図 第4トレンチ S D 6051土層断面図



第39図 第4トレンチ東南部弥生土器出土状況

b. 出土遺物

この項では、本格調査を実施した第1～4・10トレンチから出土した遺物について説明するが、その際、実測図や写真に掲載したものを中心に行う。なお、遺物番号は実測図も

写真も共通である。

第1トレンチ 須恵器・土師器がほとんどで、1点のみ瓦器碗の破片がある。図示し得たのは、第40図1の須恵器杯のみである。奈良時代後半から平安時代前期に属する破片がほとんどである。整理箱半箱程度出土。

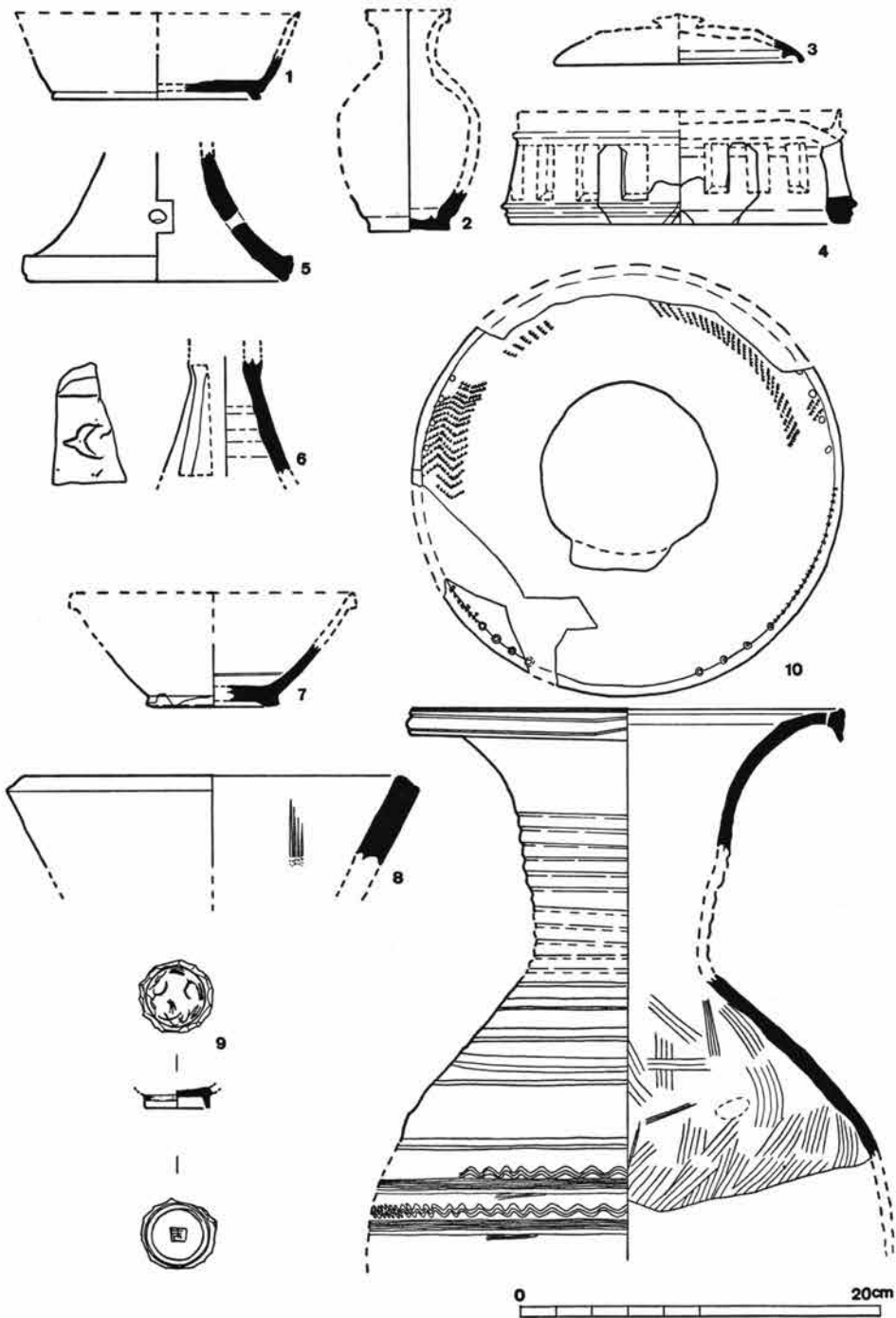
第2トレンチ 須恵器・土師器がほとんどで、1点ずつ丹波焼甕の破片と、瓦器羽釜片と、中国竜泉窯青磁皿片、軒丸瓦片があった。図示し得たのは3点のみである。第40図2は、須恵器瓶子で底部糸切りである。9世紀。同図3は須恵器蓋で、内側にかえりの付くものである。7世紀。同図4は須恵器円面硯で、一応一段透かしの製品に復原したが、二段透かしの可能性もある。色調は灰色。胎土に若干の白色砂を含む。このトレンチからは整理箱半箱程度出土。

第3トレンチ 須恵器・土師器がほとんどで、若干中国白磁碗片や備前焼すり鉢、中世の瓦、弥生土器、青花磁器などが出土した。第40図5は弥生土器高杯ないし器台の破片である。赤褐色の胎土である。同図6は須恵器高杯の脚部片で、1か所に長方形の透かしがある。その横に鳥を描いたようなへらによる線刻がある。色調は青灰色。6世紀か。同図7は、中国南部の福建省周辺で焼かれた白磁碗で、大宰府分類ではⅣ類である。高台まで施釉されている。高台内は露胎。12世紀。同図8は備前焼すり鉢で、小片のため口径は不明である。15世紀。同図9は青花磁器の底部である。中国・明代のものとも思えるが、高台外面の文字の崩れからすれば、伊万里製品かもしれない。これは、底部を円形に打ち欠いており、意図的と思える。17～18世紀。

第4トレンチ このトレンチでもっとも多く出土した。須恵器・土師器がほとんどだが、弥生～古墳時代初頭の頃も、整理箱に2箱程度出土した。他に瓦や瀬戸片などがある。全部で整理箱6箱程度出土した。

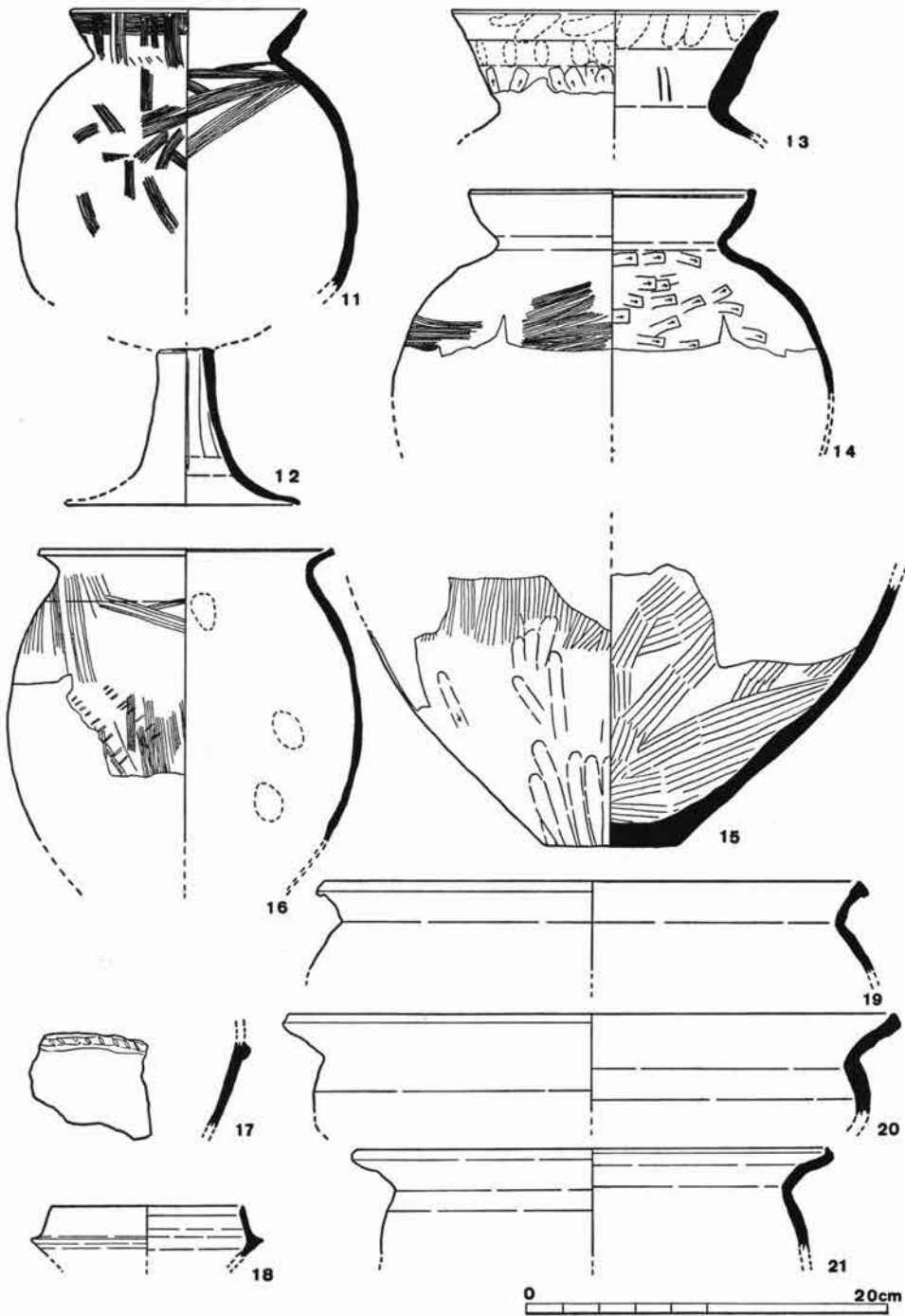
もっとも古い遺物として、縄文土器深鉢片17がある。S X6042から出土した。胎土は茶褐色で砂粒を多く含む。いわゆる生駒西麓産の胎土と類似している。晩期の長原式である。次に弥生時代中期の壺22は、黄褐色の胎土で、上半は赤味が強い。口縁部は5条の突出線があり(刻み目もあり)、頸部に12条の沈線文(1条には6本程度の沈線あり)、その下に斜格子(1条には3本程度の沈線あり)を施し、胴部中位に6条の沈線文(1条には5～6本の沈線)を施す。他はへらミガキ。体部下半はハケのちナデ、内面は上部がハケ、下部はへらミガキが少し確認できる。底部付近に直径4cm程度の焼成後にあけた孔あり。弥生時代中期。口径28.4cm・高さ74.8cm。甕16は、外面をタテハケ、内面をナデかユビオサエで成形したものである。色調は暗灰色。

弥生時代後期から古墳時代初期にかけての溝S D6051から良好な遺物が出土した。若干



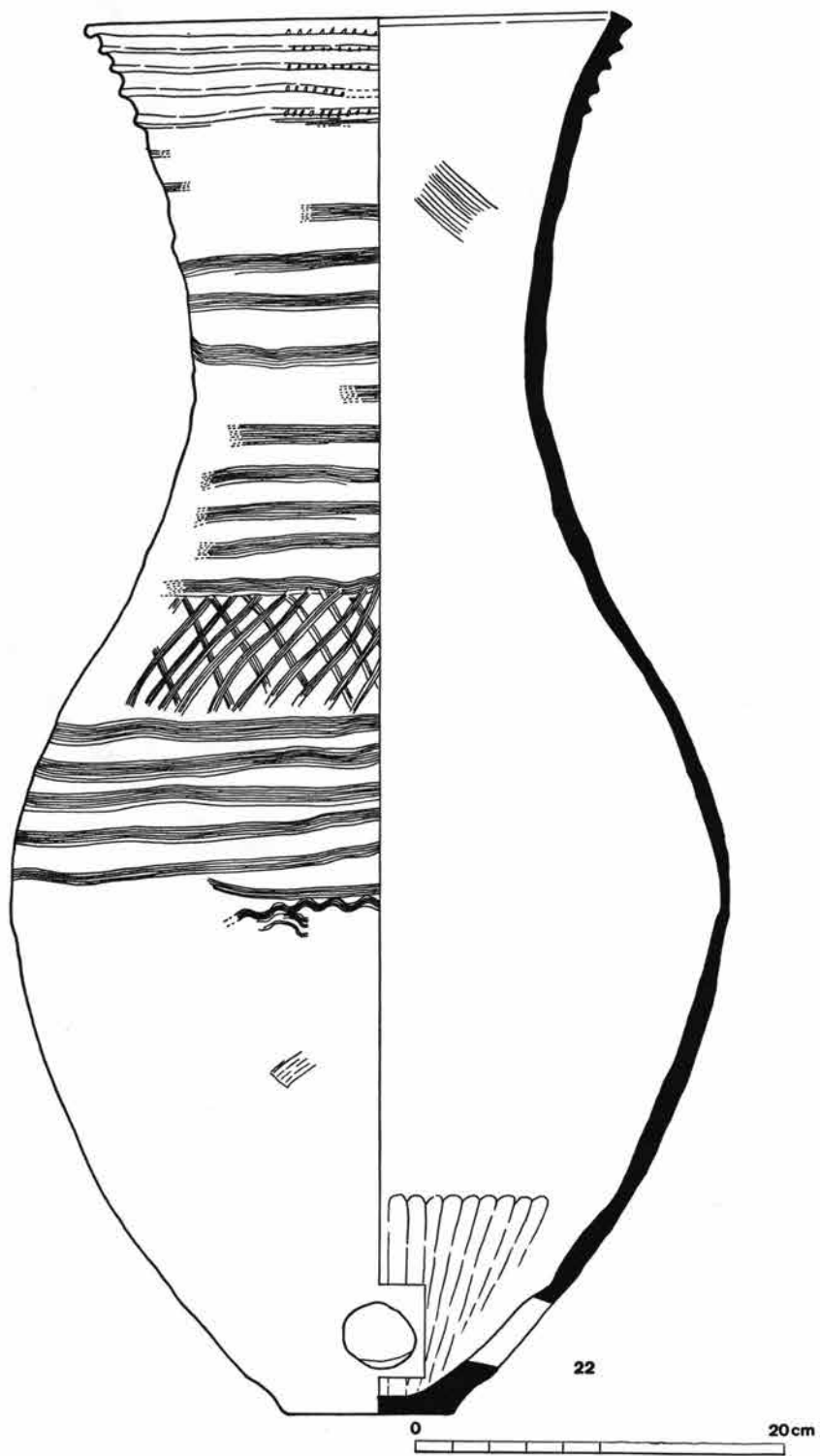
第40図 第6次調査出土遺物実測図 (1)

第1トレンチ包含層：1. 須恵器杯 第2トレンチ包含層：2～4, 須恵器壺2, 蓋3, 硯4
 第3トレンチ包含層：5～9, 高杯器台5, 須恵器高杯脚部6, 中国白磁器碗7, 備前摺鉢8,
 伊万里染付9, S D60S1アゼより東：10, 弥生土器壺

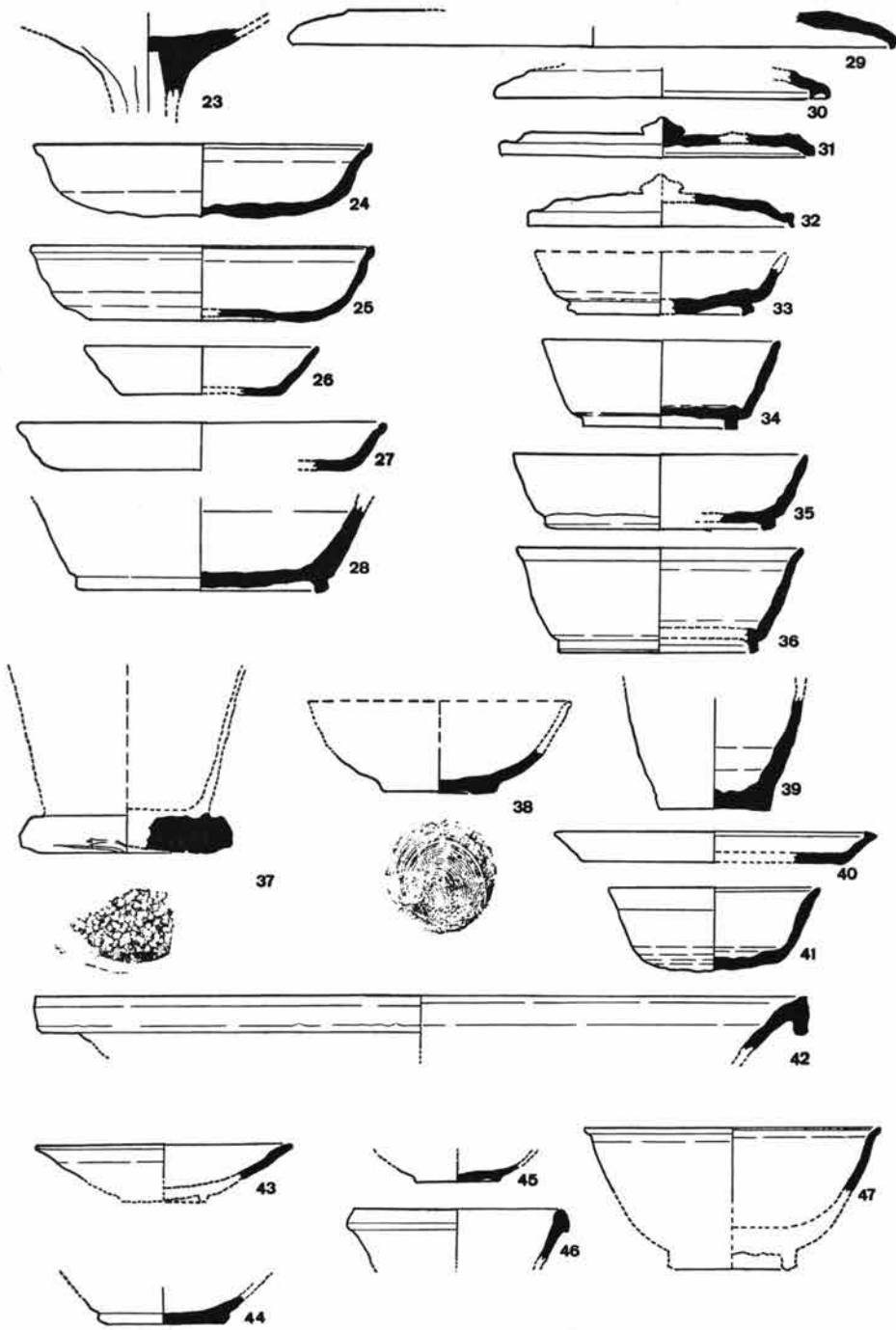


第41図 第6次調査出土遺物実測図 (2)

第4トレンチ S D6051 : 11~15, 布留式甕11, 高杯12, 土師器甕13・14, 弥生土器壺15
 S X6052 : 16弥生土器甕
 S X6042 : 17深鉢
 包含層 : 18~21, 須恵器杯18, 土師器甕19~21



第42図 第6次調査出土遺物実測図 (3)



第43図 第6次調査出土遺物実測図 (4)

第4トレンチ包含層：23～36・43～47，土師器高杯23，皿24・25，須恵器杯身26・27・33～35，鉢28，杯蓋29～32，碗36，緑釉陶器皿43・44，瓦器碗45，中国白磁碗46，中国青磁碗47

S X 6042：37・38・40～42，須恵器鉢37，碗38，皿40，杯身41，壺42

S D 6045：39須恵器壺

古い遺物として壺10がある。これは口縁端面に2条の凹線を施し、頸部には10条程度の凹線、胴部上半に3条程度の沈線(1条は7本程度で構成)を施し、その間に波状文を施している。内面はハケ目。色調は淡褐色。布留式の甕11・13・14は外面ハケ目、内面ハケ目のものとヘラケズリのものがある。なお、15の体部下半は10と同一個体かもしれない。古墳時代の須恵器としては杯18が出土した。5世紀末～6世紀初頭であろう。7世紀後半頃の須恵器として蓋30がある。これら6～7世紀の製品の数は少なく、10点を越えない程度である。遺物の大半は8～9世紀の製品である。その中で須恵器鉢37はS X 6042から出土したもので、外底部にハチの巣状の刺突文があり、この形状のものは1点のみであった。須恵器碗38は、この中でもっとも新しい部類に入る。同じくS X 6042上層から出土したもので、9世紀末から10世紀前葉と思われる。

緑釉陶器皿43は、包含層から出土したものである。内外面とも回転ナデで、そこに薄く淡緑色の釉を施している。胎土硬質、篠製品か。10世紀。同底部44は胎土が軟質で淡褐色をしている。うすい釉がかかっているが磨滅が激しく、詳細は不明である。45は13世紀の瓦器碗片である。46は12～13世紀の中国白磁碗片。47は同時期の中国竜泉窯系の青磁碗である。

10トレンチ 遺構が少なかったせい、あまり出土していない。整理箱1箱程度である。須恵器・土師器がほとんどであるが、黒色土器や灰釉陶器・緑釉陶器、中国製白磁碗・皿、青磁皿なども少量出土した。

遺構に伴うものとしては、第58図 143・145・147がある。いずれもS B 6035の柱穴から出土した。この建物の廃絶時期は147の黒色土器A類の碗からみて、10世紀とみられる。この碗の内面はヘラミガキ、外面はヘラ削りである。色調は内面及び口縁部外面は黒色、他は茶褐色である。精査中に出土したものとして、148の灰釉陶器壺片がある。全面ロクロナデが顕著である。149は須恵器鉢である。色調は淡灰色で、体部は全面ロクロナデで、底部は糸切りである。篠製品で、9世紀後半～10世紀前半である。151は中国製白磁碗の底部片である。12～13世紀。152は中国製白磁皿で、口縁部が端反りになるタイプであろう。15～16世紀。153は中国竜泉窯系青磁皿で、口縁部が波形になるタイプである。13～14世紀。

(2) 第8次調査

a. 検出遺構

現地調査は、平成2年4月24日から同年12月21日まで実施した。調査方法や基本的層序は前年度と同様である。

第5 トレンチ 前年度調査時は東西10m×南北5mの50m²を試掘した。今年度は北側へ拡張し、東西10m×南北15mの150m²を調査した。その結果、中世以降は耕作に伴う溝があったことが判明した。溝は北に対して西へ約24度偏している。その下部に古代の面があった。南半分は泥土状であり、遺構は確認されなかったものの、北半分は黄褐色粘質土をベースにして、溝と柵1条、井戸1基を確認した。これらの埋土は暗褐色土である。ここで検出した井戸S E8142は、一辺2.2mの隅丸方形の掘形の中央に、井筒をセットしたものである。但し、井筒に使用した数枚の板が残っていたものの全容は不明である。深さは1.7mである。深さ50cm程度のところの、井筒の東側で、「東」と墨書された土師器皿が出土した。墨書は外底面に書かれており、皿は正位置であった。また、深さ70cmの地点の井筒内で、祭祀用具である斎串が2点出土した。おそらく、井戸廃絶時のものと思われる。その時期は9世紀初頭を下らない時期と考えている。また、井戸設置時は掘形から出土した墨書土師器の形態によると、奈良時代前半には遡らない。

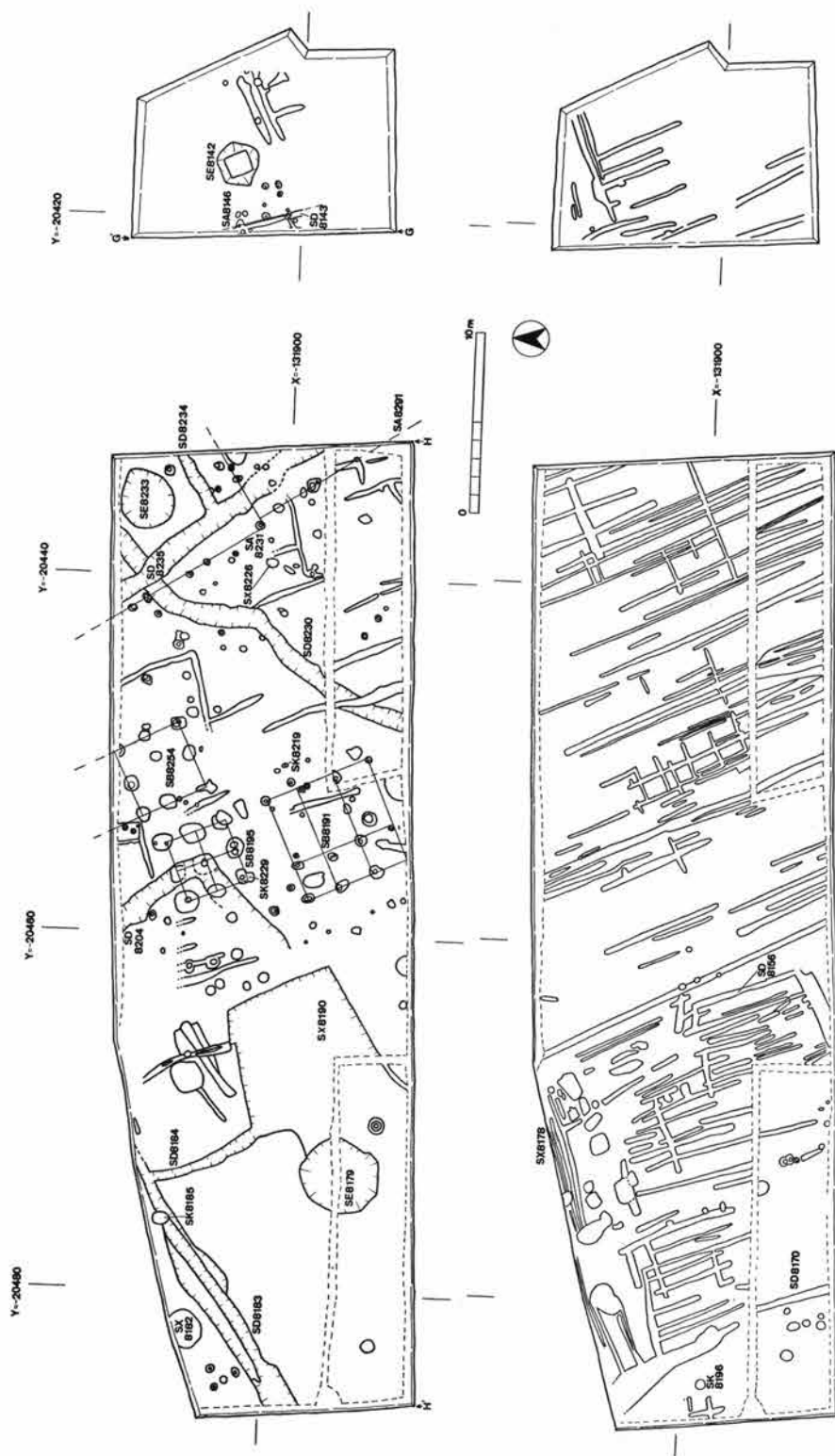
井戸の東南にピットや溝があったが、ベース面が軟弱で、十分な検討はできなかった。あるいは、掘立柱建物跡1棟が存在したかもしれない。

また、井戸の北方は砂層となり、あるいは西に対して南へ偏する溝が、トレンチの北西隅をかすっていたのかもしれない。とすると、西方の第6—7トレンチの溝と関連が強くなる。

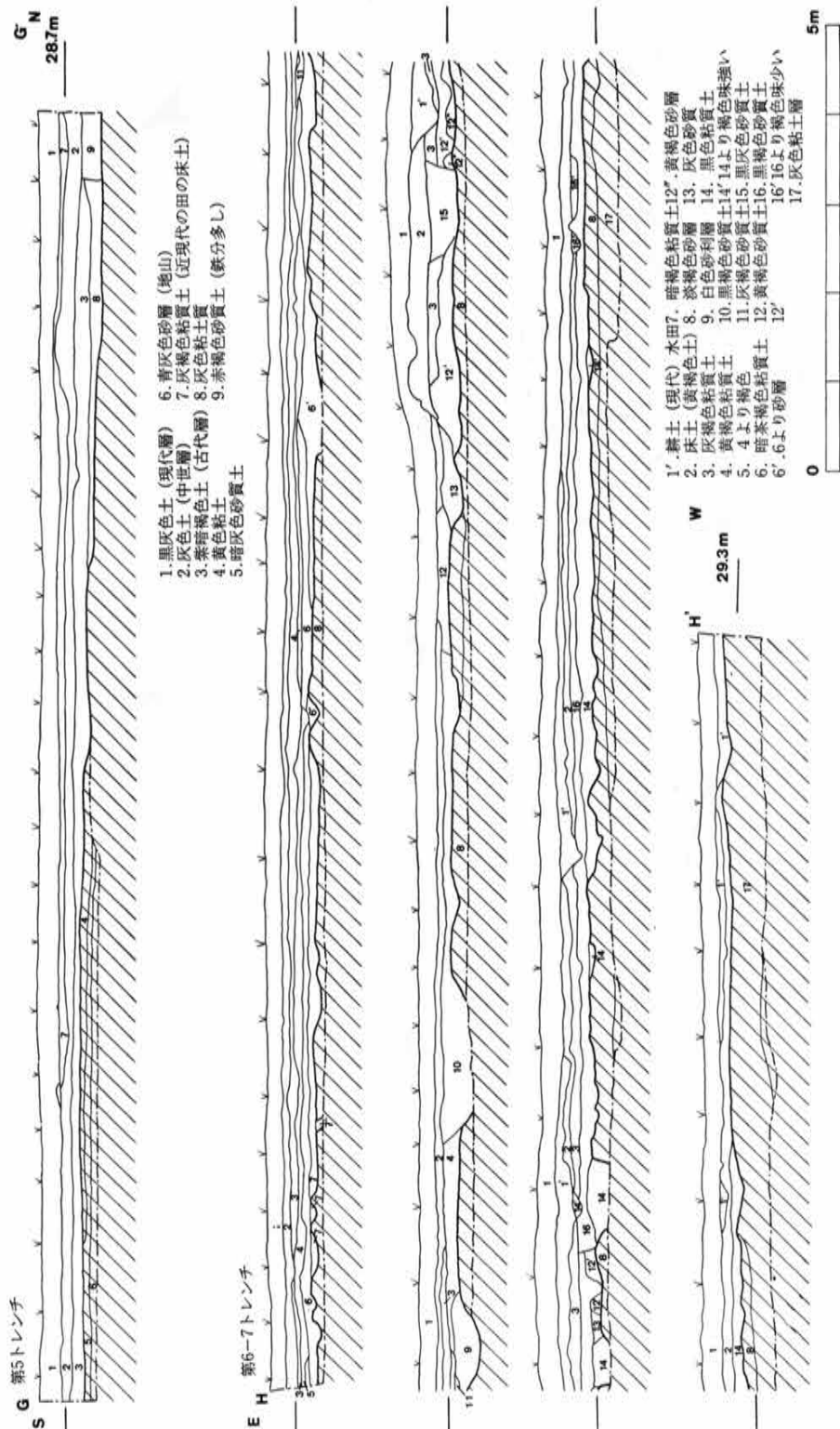
第6—7 トレンチ 前年度の調査時は、第5トレンチ近くに第6トレンチを設定した。東西20m×南北5mの100m²である。その西方、JR線に近づいた地点に第7トレンチを設定した。規模は同じである。これを、今年度は連続させ、東西54m×南北16m、面積約860m²のトレンチとした。層序は他のトレンチと同様だが、西部の方が黄褐色粘土のベース層が高かった。中世以降は他のトレンチと同様で耕作に伴う溝を検出した(第44図下半)。方向は北に対して西へ約24度偏している。ほとんどは北西—南東方向に長い耕作面であることが、溝の分布密度から判断できる。だいたい、幅4m×長さ7mの耕作地が単位となっている。ところが、トレンチ西北部に関しては、これと直交する横方向の耕作地であったことが、溝の形状から判断できる。すなわち、ここで耕作者が別、あるいは所有が別であった可能性がある。一町の境かもしれない。埋土は灰褐色砂質土である。

下層では、特に奈良時代から平安時代初期の遺構が検出された(第44図上半)。また、それより少し遡る時期から掘削されたのであろう溝(S D8183)も検出された。遺構の種類は溝、井戸、掘立柱建物跡などである。

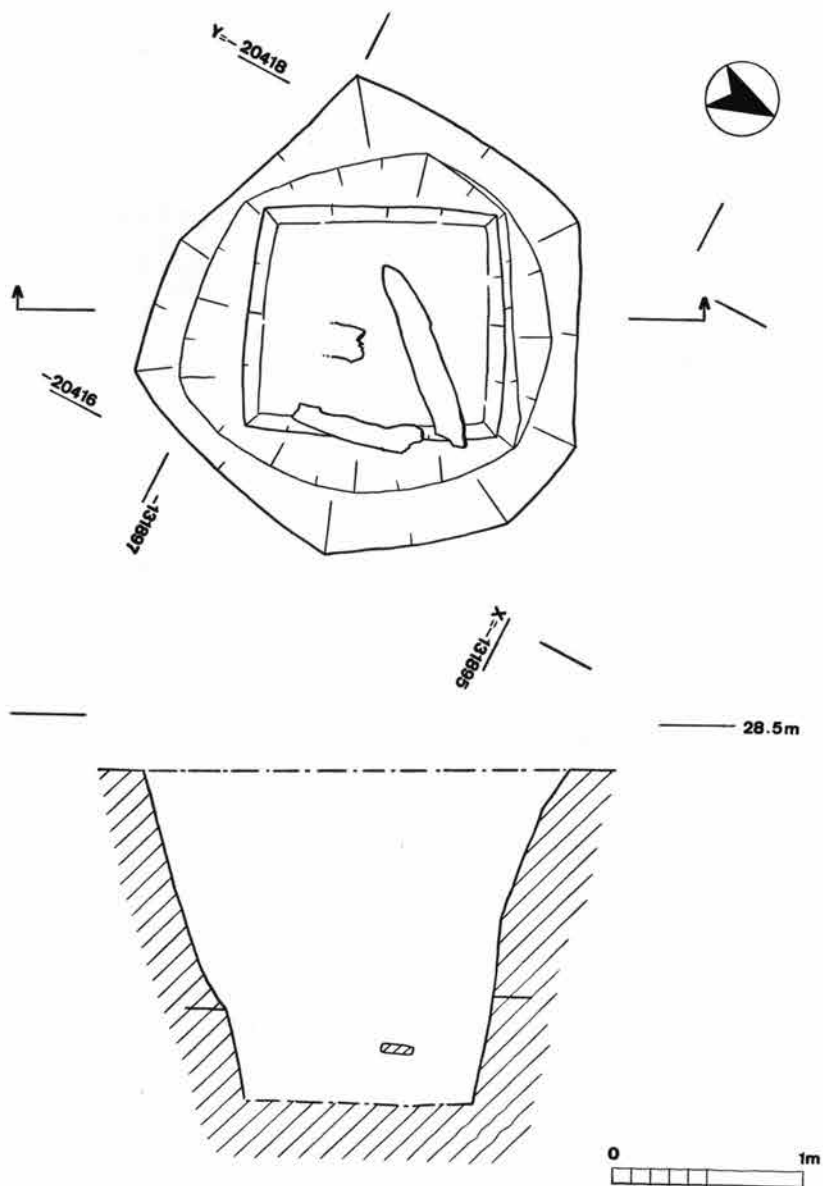
まず、溝についてはトレンチの北西部で南西—北東方向のS D8183を検出した。方位は西に対して南へ約33度偏している。西端は幅1.7m・深さ0.26mの浅いレンズ状としたも



第44図 第5・6一7トレンチ平面図(古代・中世) 上:古代 下:中世



第45図 第5・6-7トレンチ土層断面図



第46図 第5トレンチ井戸S E8142実測図

のだが、中央では2条に分かれたような形状をしていた(第47図)。これは断面観察によって、まず南側の深い溝(幅0.7m・深さ0.18m)が掘られた後、南肩と共有しながら北へ拡張した浅い溝(幅1.5m・深さ10m)であることが判明した。遺物は7世紀代のものもあり、あるいは古い方の溝はこの時期まで遡るかもしれないが、新しい方の溝が廃絶したのは9世紀初頭である。

奈良時代の溝としては他に、トレンチ東端の S D8235 (北に対して西へ約33度偏している、幅1.3m・深さ0.21m)がある。これは中央で1か所直角に屈折し(S D8234, 9世紀)東方へのびている。この溝と重複して S D8230があるが、これは直線ではなく、埋土も他の溝が暗褐色粘質土層なのに対して、白色砂礫層であり、自然流路と判断した。トレンチ中央の S D8204は途中で西へ折れ曲っている。幅1.1m・深さ0.13mあり、埋土は暗褐色土である。方位は北部では北に対して西へ約33度偏している。西部では S D8183からほぼ直角にのびた溝 S D8184を検出できた。幅0.7m・深さ1.2mで埋土は黄褐色に近い暗褐色土である。中からは土師質のかまど(第55図86)の破片が出土した。南方でこの溝は終息し、同じ深さの方形の落ち込みと接続する。8世紀。

トレンチ中央部にある掘立柱建物跡 S B8195は、溝 S D8204と重複しており、建物跡の方が新しい。2間×2間で、柱間寸法は1.75mの総柱建物跡である。掘形は円形ないし隅丸方形で、一辺1m程度である。柱は木質が遺存していたものもあり、直径0.2m程度である。遺物は少なかったが、8～9世紀である。これの東隣に掘立柱建物跡 S B8254がある。東西2間(3.9m)×南北2間(3.9m)である。ほぼ方位もそろえているので、同時期と考えたい。この南方に東西2間(6m)×南北3間(6m)の掘立柱建物跡 S B8191がある。9世紀。

井戸は2基検出した。東端の井戸 S E8233は、隅丸方形の掘形(一辺1.4m)に、四柱を建てたものである。深さ0.85m。出土遺物は少なく、若干木製品が出土した。奈良時代。

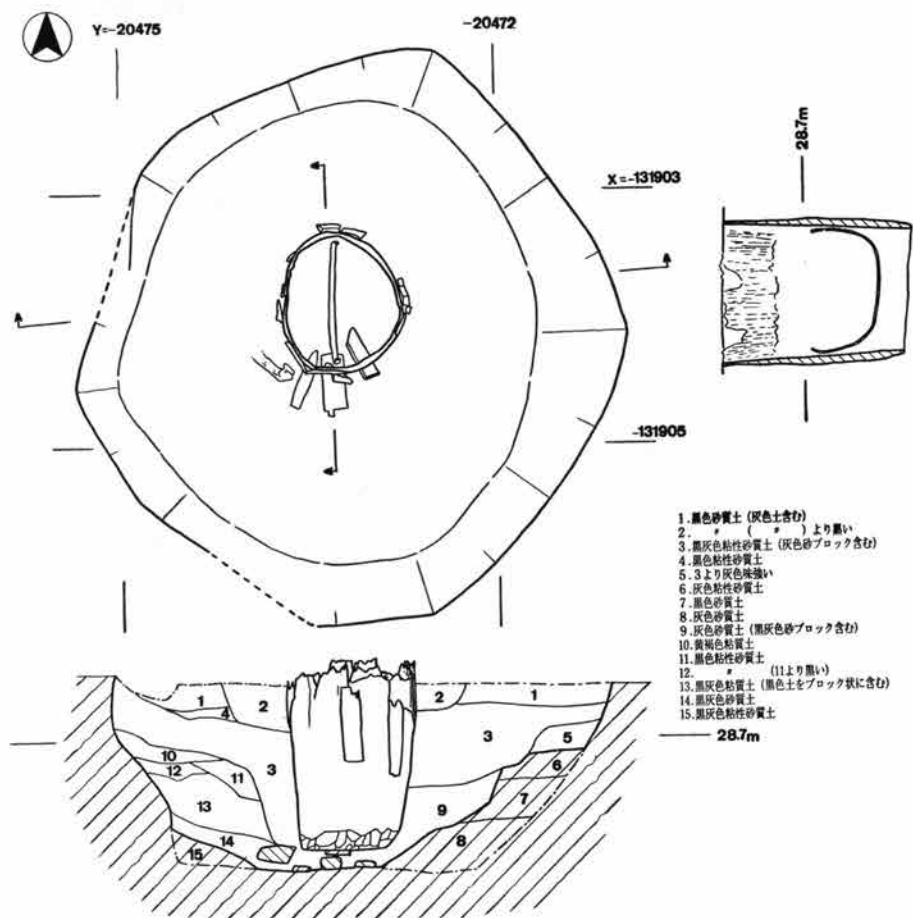
井戸 S E8179は、もっとも遺存状態のよいものである。一辺3mの隅丸方形の掘形の中央に丸太を刳り抜いた直径1.1m・長さ1.2mの井筒が設置されていた。これより上は板材を組み合わせていたようである。井筒の下には板材をセットして、垂直を保つようにしていた。この井筒の埋土から「養」と墨書された土師器皿や、斎串、銭が出土した。これらの遺物から長岡京前後に埋没したらしい。遺存状態が良好なので、これは保存処理、及び土層の断面剥ぎ取りを行った。なお、この作業中更に下位で方形に組んだ井桁を検出した。方位は北に対して西へ33度偏したものだが、土砂の崩落が激しく調査は断念した。

柵は2条検出した。東端にある S D8235の西側にめぐらせたものである。直径40cmのピットを1.2～3.7mという不規則な距離に設置している。これは S D8324の南側の柵と同一と思われる。これより南側で同じく S D8235に平行する柵 S A8291も検出した。

第8トレンチ 前年度は東西20m×南北5mの約100m²試掘した。今年度は南側と、西側に拡張し、東西40m×南北11.2mの約450m²を調査した。黄褐色土層がベースとなる土層である



第47図 第6～7トレンチ S D8183土層断面図

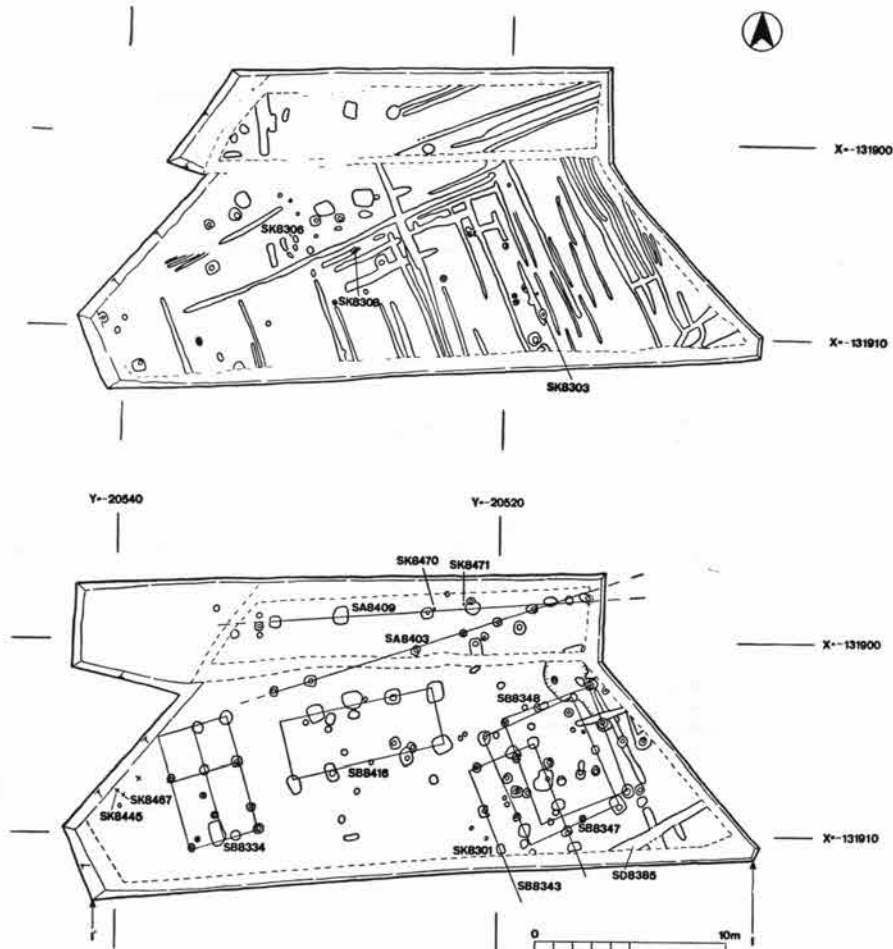


第48図 第6～7トレンチ井戸 (SE8179) 実測図

が、西がもっとも高く東にいくに従って低くなっていた。この東方の第6—7トレンチより低くなっており、かつては微高地が20～30mおきにあったようである。

中世の遺構については、従来と同様、耕作の範囲などを示す溝を検出した。溝の方位はトレンチの南西隅と北東隅を結ぶ線を境にして、直角に変化している。つまり北西半分は東西方向に長い区画があり、南東半分は南北方向に長い区画である。北に対して114度西へ偏した場合と、同24度西へ偏したものがある。この方向の違いは第6—7トレンチでも認められたもので、一町の境を示しているのかもしれない。

下層面では、5棟の掘立柱建物跡と2条の柵列と1条の溝を検出した。西側にある掘立柱建物跡SB8334は、東西2間(3.7m)×南北3間(6m)のものである。8～9世紀。中央にあるSB8416は、東西4間(8.1m)×南北1間(3m)のもので、掘形は他が円形なのに対して隅丸方形であり、一辺も90cm程度と比較的大きいものである。10世紀。遺物には

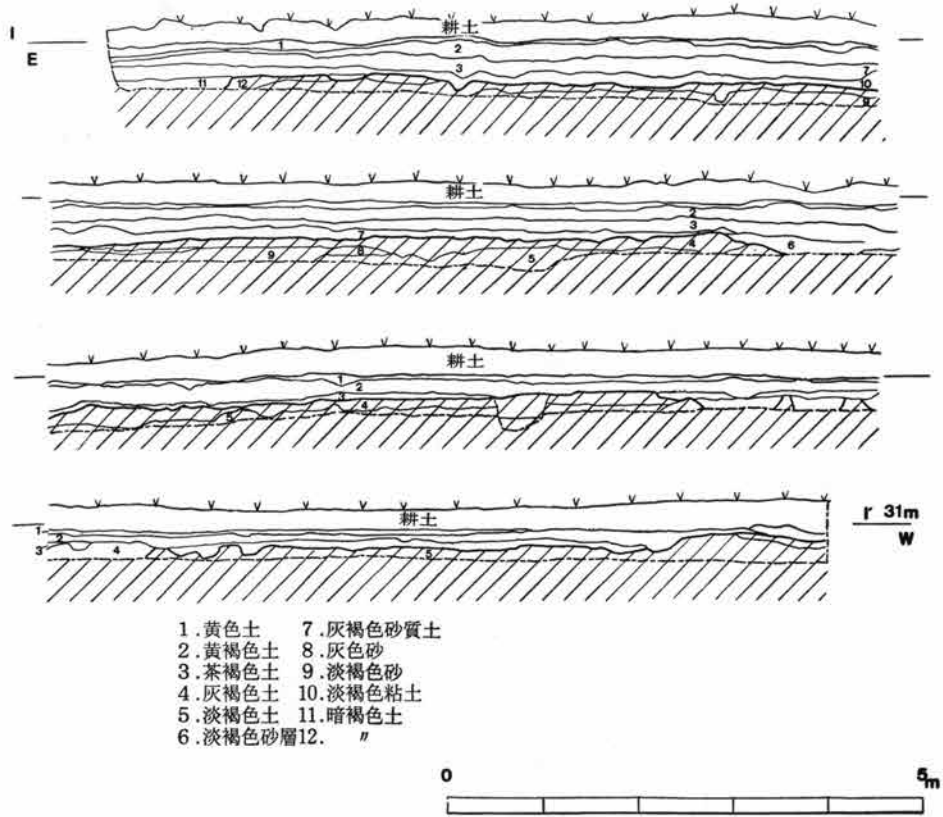


第49図 第8トレンチ平面図(古代・中世) 上:中世 下:古代

緑釉陶器などもある。東端には3棟の掘立柱建物跡が重複して建設されていた。しかしながら、ピット同士の重複関係はない。もっとも西寄りのSB8343は、東西3間(3.6m)×南北3間(6m)以上。10世紀。中央部のSB8347は、東西2間(5.1m)×南北2間(6m)程度である。但し、いくつかのピットが削平されている可能性もある。9～10世紀。もっとも東端のSB8348は、東西2間(4.8m)×南北3間(5.7m)である。8～9世紀。

柵列は、調査地の北部で検出された。北寄りのSA8409は、2.4～4.6mの間に不規則に配置したもので、7～8世紀。南寄りのSA8403は、2～5.7mの間に、比較的密に柵を建てたものである。8世紀。なお、この方向はSB8334や、東端の3棟の建物跡のそれとほぼ等しいので、柵が機能していた年代がやや下る可能性もある。

溝はトレンチの東南隅で検出された(SD8385)。幅0.6m・長さ5.5m以上である。方位

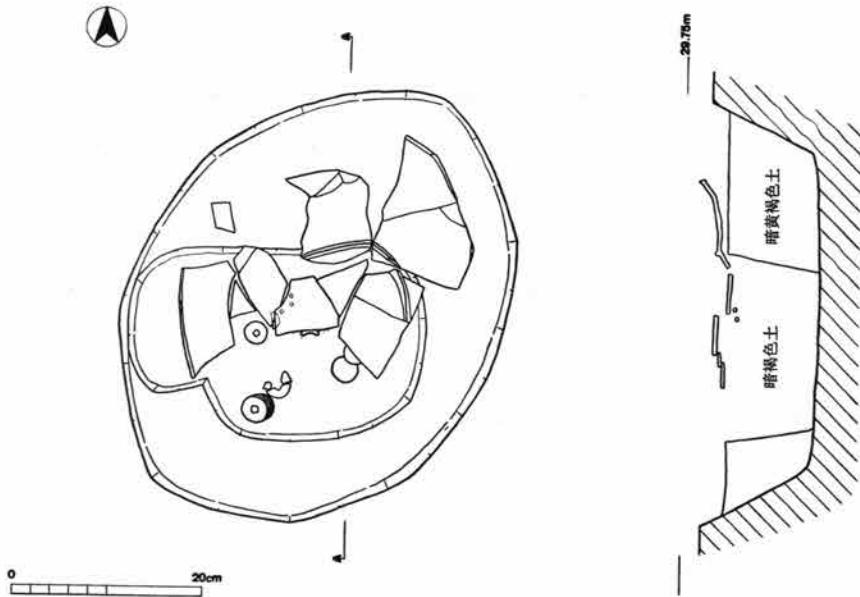


第50図 第8トレンチ土層断面図

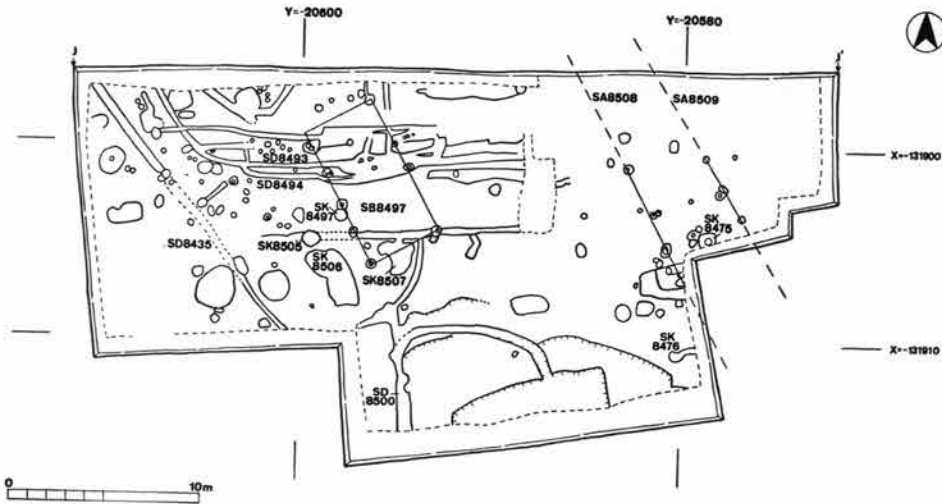
は西に対して南へ約29度偏している。遺物は多数出土した。但し、意図的に置かれた状態ではなかった。10世紀。

上記の溝のやや西で、土坑SK8301を検出した。楕円形をしており、長径0.5m・短径0.4mである。精査の段階で土師器大杯片と銭貨が一緒出土したが、その後の調査により大杯を伏せて土坑の上部に置き、その下に銭貨10枚以上、ガラス小玉3個以上を埋納したことが判明した。また、それらが集中する中央部分に炭を含んだ土が特に堆積していた。これらは意図的な埋納行為と思われる。類例から言えば、地鎮祭に伴うものかもしれない。8世紀。

なお、遺構としては把えられないが、小型丸底壺や土師器壺・甕・高杯が点々と出土した。トレンチ西端のSK8445は小型丸底壺、SK8467は土師器高杯と壺、その北東で小型丸底壺が出土した。また、SB8416の北辺中央付近で小型丸底壺、南辺中央付近でも同じく小型丸底壺、更に、トレンチ北端中央のSK8470で土師器壺口縁部、SK8471でも口縁

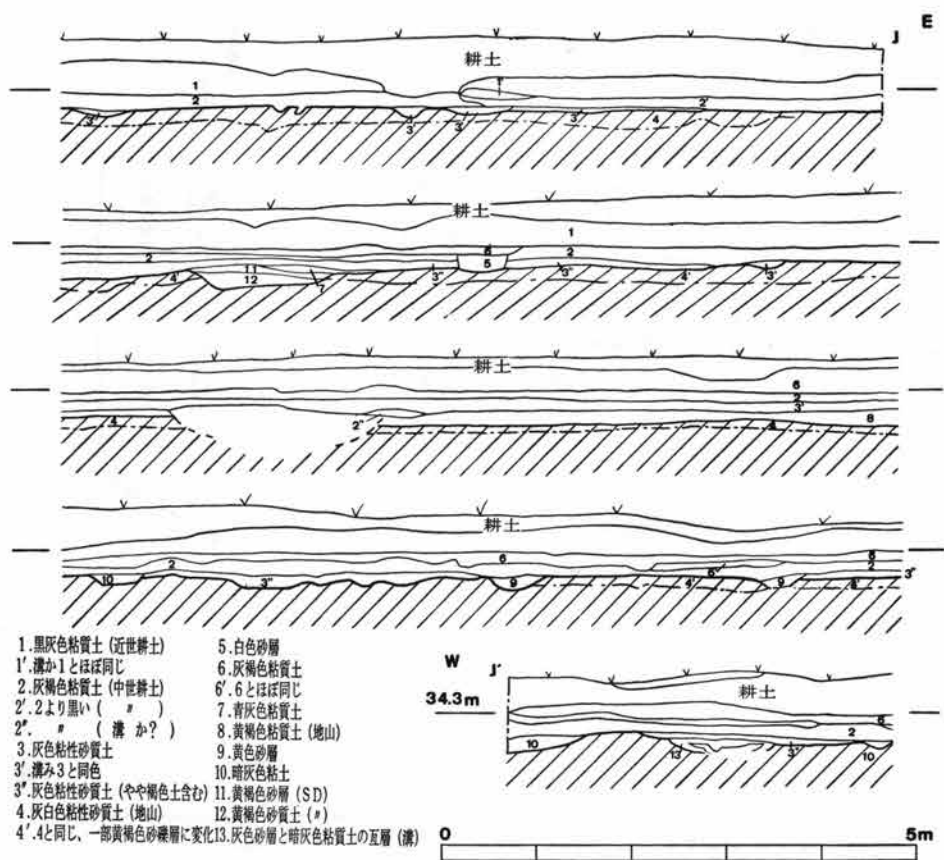


第51図 第8トレンチSK8301貨幣出土状況



第52図 第9トレンチ平面図

が出土した。これらはベース層とほとんど同じ黄褐色土の上面に包含されていた。やや砂質部分で目立った。実は、田辺町教育委員会が実施した第7次調査地が、このトレンチの20m北に設定されていたが、ベース層の上面で弥生時代の遺物、特に高杯が多かったようで、この一帯が、弥生時代から古墳時代初頭にかけて、何んらかの行為(祭祀か)をした地



第53図 第9トレンチ断面図

であったことが知られる。

第9トレンチ 前年度調査時は東西25m×南北5mの125㎡を試掘した。今年度はすべての側に拡張して調査した。なお、重機掘削の段階で西南部に関しては遺構・遺物等は認められなかったため、この部分は土砂置き場とした。また、北端に関しては、工事進捗状況との兼ね合いで、集中して先に調査したので、全体写真撮影の段階では、工事用道路となっている。それらを含めて、このトレンチは東西40m×南北20mの範囲を調査したことになる。面積800㎡である。

調査の結果、まず近世以降は耕作に伴う溝が、東西方向に顕著に認められた。埋土は灰色砂質土である。その下層に中世の耕作に伴う溝が検出された。この方向は北西方向である。埋土は灰褐色砂質土である。その下層で奈良時代を中心とした遺構が検出された。このあたりのベース層は泥土や砂層であり、非常に軟弱な地盤である。そこに稠密ではないが、掘立柱建物跡1棟、柵列2条、溝1本を検出した。いずれも方向は北西を向いている。

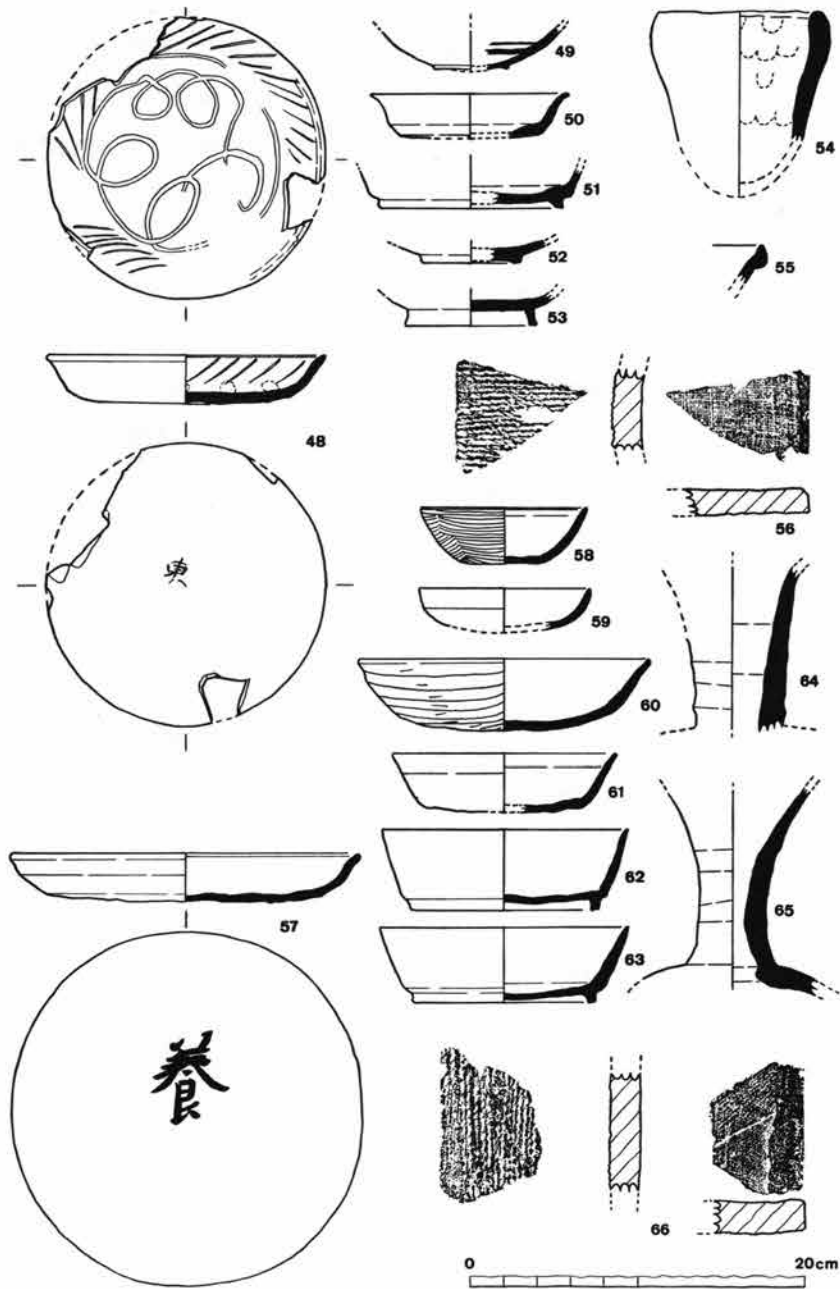
溝S D8435は、トレンチ西部にあるもので、幅0.5m・長さ3.3m以上・深さ0.13mである。埋土は灰色砂質土である。遺物は北端で土師器甕を検出した。方位が北に対して西へ約39度偏している。遺物の出土量が少なく、時期は不明だが、少なくとも層位的には奈良時代以前である。トレンチ北部中央にある掘立柱建物跡S B8497は、東西1間(2.8m)×南北4間(5.4m)と思われるものである。掘形は隅丸方形や円形に近いものまであり、平均的な直径は0.4mである。なお、柱穴の直径は0.15m・深さ0.1mである。トレンチ東端では柵S A8508と柵S A8509を検出した。前者は3個のピットを検出した。掘形は隅丸方形より円形に近く、径0.3mである。深さ0.06m。方位は北に対して西へ約33度偏している。後者も3個のピットを検出した。掘形は円形に近く、径は0.2mである。深さは0.05m。方位は北に対して西へ約33度偏している。これらの年代も、出土遺物が少なく確定はできないが、層序から判断すれば奈良時代以前といえよう。

b. 出土遺物

ここでは、本格調査した第5・6～7・8・9トレンチの出土遺物について説明する。なお、前年度の試掘調査で出土した分も一緒に紹介したい。

第5トレンチ 須恵器・土師器を中心として、その他製塩土器・瓦・緑釉陶器が出土した。井戸S E8142より「東」と外底面に墨書した土師器皿(第54図48)が1点出土した。これは井筒東方の掘形上部より出土したものである。口径16.8cm・器高2.9cm。色調は淡褐色で、口縁部に1か所油煤痕があり、内底面見込みにラセン状暗文、体部内面に放射状の暗文を施す。胎土からすれば、ザラつきがあるもので、近隣の生産と思う。8世紀。この他、井筒内からは深さ70cmの地点で木製品である齋串(ゆぐし)が2点出土した。包含層の49は瓦器碗で、高台が断面三角形に退化し、内面のミガキも粗いものである。外面黒灰色、内面灰白色である。13世紀後半。須恵器杯50・51とも色調青灰色で8世紀のものである。緑釉陶器52・53の内、前者は内外面施釉で、外底面高台内は露胎である。釉色は緑色、胎土は須恵質である。内底面に重ね焼きの痕跡あり。丹波篠窯製品、10世紀。後者は内外面施釉で、外底面高台内は露胎である。釉色は濃緑色、胎土は須恵質である。貼り付け高台で、内底面に重ね焼き痕がある。近江系で10世紀。製塩土器54は、色調乳白色、下部橙色気味のものである。内面はユビオサエ痕が明瞭である。胎土に1mm大の白色砂を含む。8～9世紀初頭。包含層の排土から白磁碗が出土した。12～13世紀。中国南部。

第6～7トレンチ 須恵器・土師器を中心として、他に瓦・製塩土器・瓦・黒色土器・銭貨・齋串などが出土した。井戸S E8179の井筒内からは「養」と外底面に墨書した土師器皿57が出土した。口径21cm・器高2.9cmである。色調は茶褐色～暗灰色であるが、これは灰色粘土層という井筒最深部に埋まっていた結果、変色したと思われる。元来は淡褐色



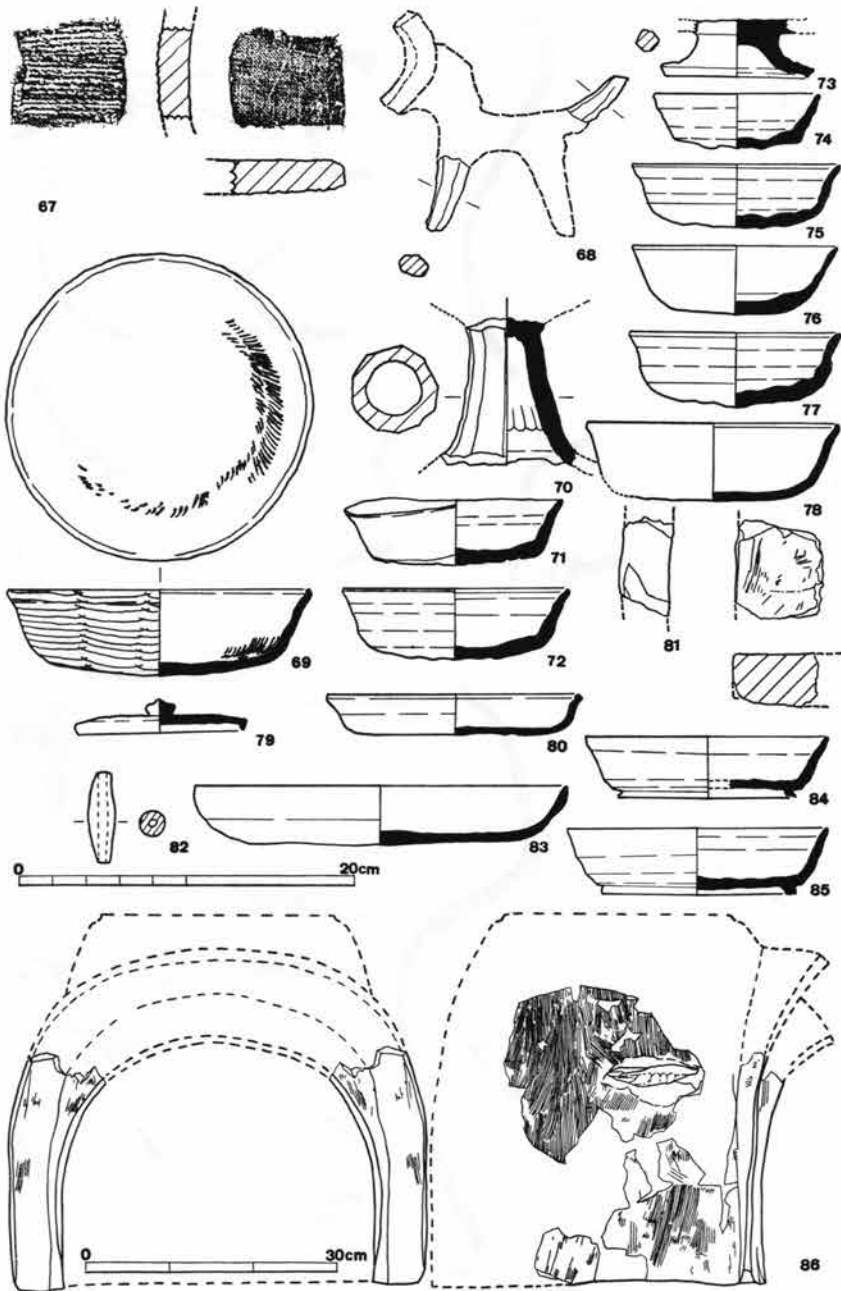
第54図 第8次調査出土遺物実測図 (1)

第5トレンチ S E8142: 48 土師器皿

第5トレンチ包含層: 49~54, 瓦器碗49, 須恵器杯50, 杯身51, 緑釉陶器碗52・53, 製塩土器54

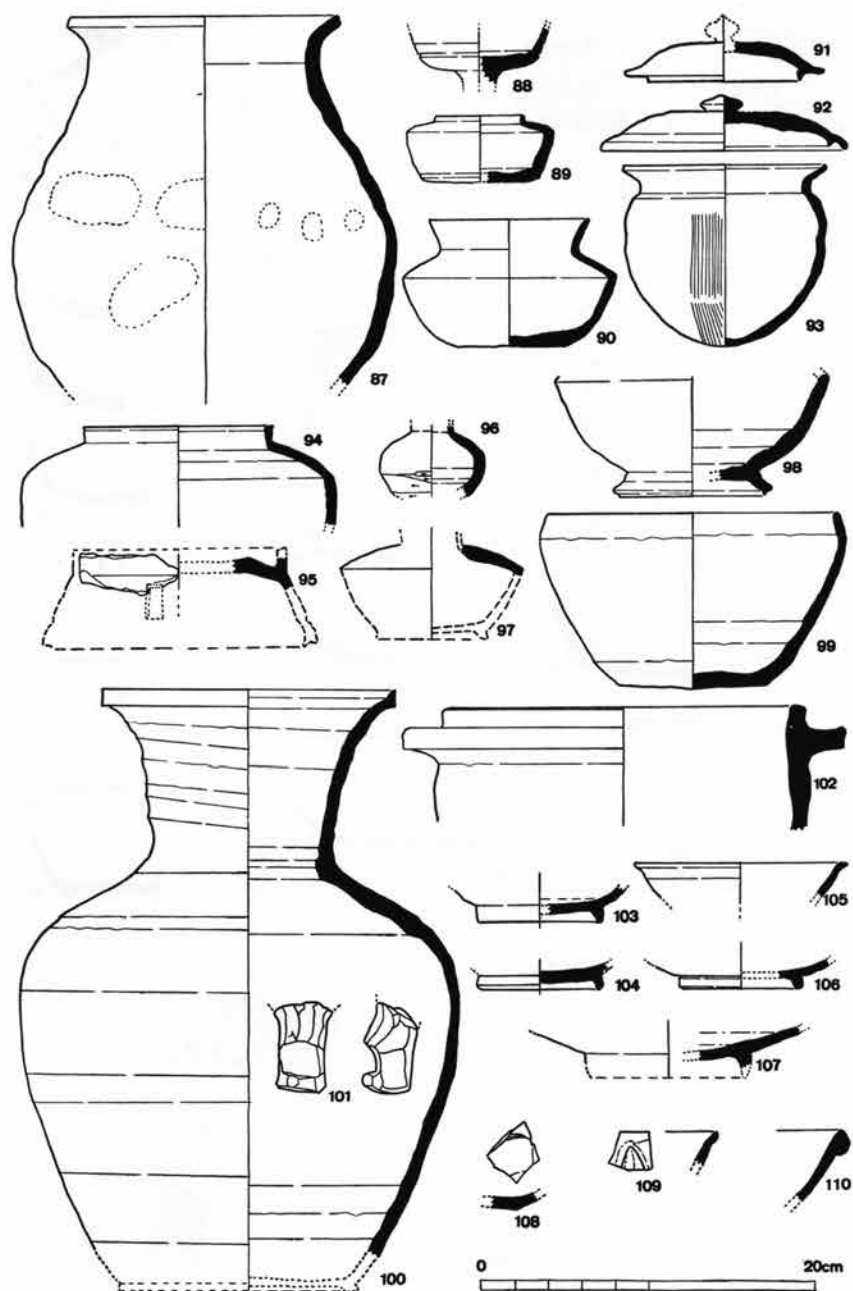
第5-6-7トレンチ包含層: 55白磁碗, 第6-7トレンチ包含層: 56平瓦

第6-7トレンチ S E8179: 57~66, 土師器皿57, 碗58, 杯59・60, 須恵器杯61~63, 長頸壺64・65, 平瓦66



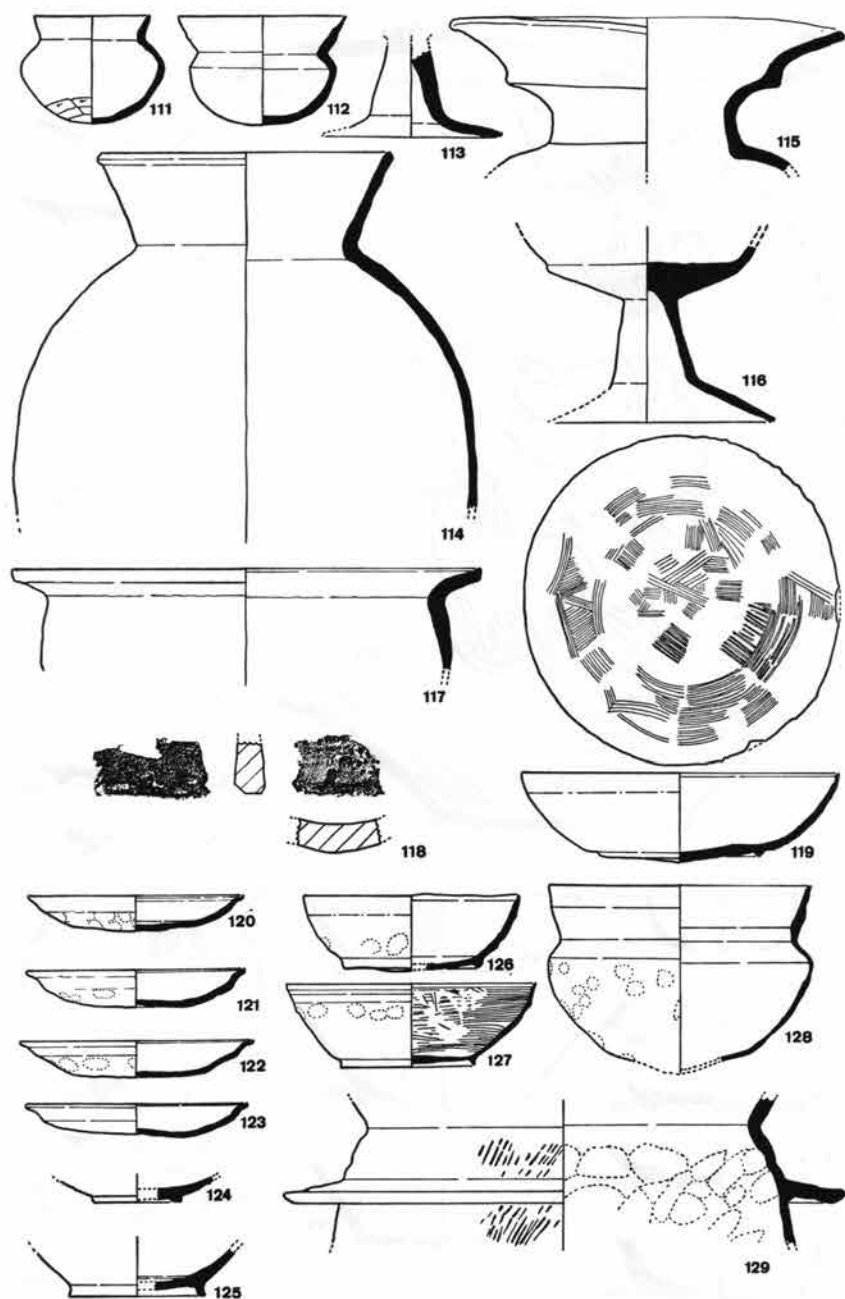
第55図 第8次調査出土遺物実測図 (2)

- 第6-7トレンチ S D 8170 : 67平瓦
 S X 8178 : 68土馬
 S X 8182 : 69~72, 土師器杯身69, 土師器高杯70, 須惠器杯身71・72
 S D 8183 : 73~77, 須惠器高杯73, 須惠器杯身74~77
 S K 8185 : 78土師器杯身
 S D 8156 : 79須惠器壺蓋
 S K 8190 : 80土師器皿
 包含層 : 81・82, 砥石81, 土錐82
 S D 8184 : 83~86, 土師器皿83, 須惠器杯身84・85, 土師器甕86



第56図 第8次調査出土遺物実測図 (3)

- 第6-7トレンチ S D8156 : 87弥生土器壺
 S K8219 : 88須惠器高杯
 包含層 : 89~98・103~105・107~110, 須惠器壺89・90・94・96, 壺蓋91・92, 硯95, 長頸壺98, 土師器甕93, 灰釉陶器壺97, 椀103~105, 皿107, 青磁皿108, 椀109, 白磁椀110
 S D8234 : 99須惠器鉢
 S X8226 : 100・102, 灰釉陶器壺100, 土師器羽釜102
 S K8169 : 101須惠器獸足
 S B8195 : 100灰釉陶器皿



第57図 第8次調査出土遺物実測図 (4)

第8トレンチ SK8308: 111土師器小型丸底壺

包含層 : 112・113・117・118, 土師器小型丸底壺112, 高杯113, 甕117, 平瓦118

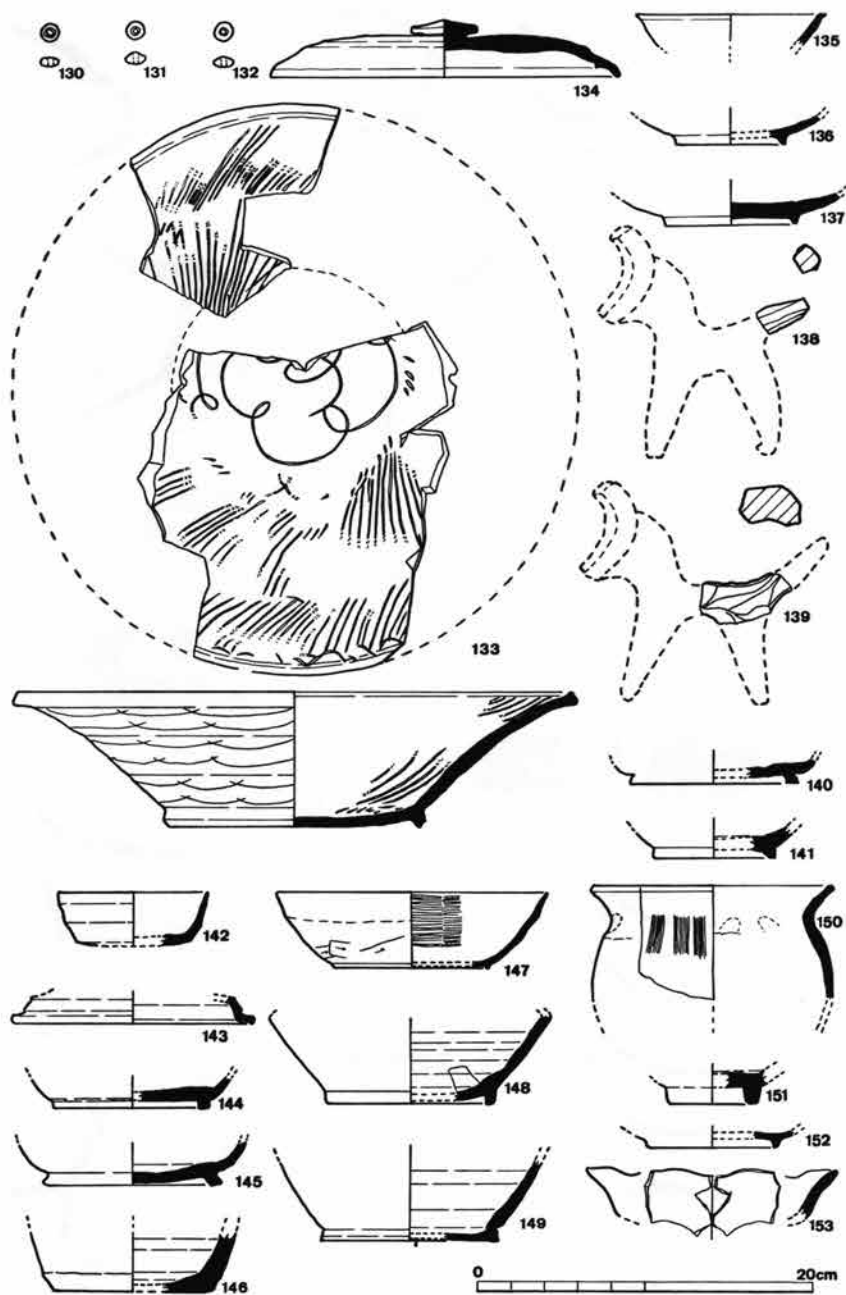
SK8306: 114土師器壺

SK8470: 115土師器壺

SK8471: 116土師器高杯

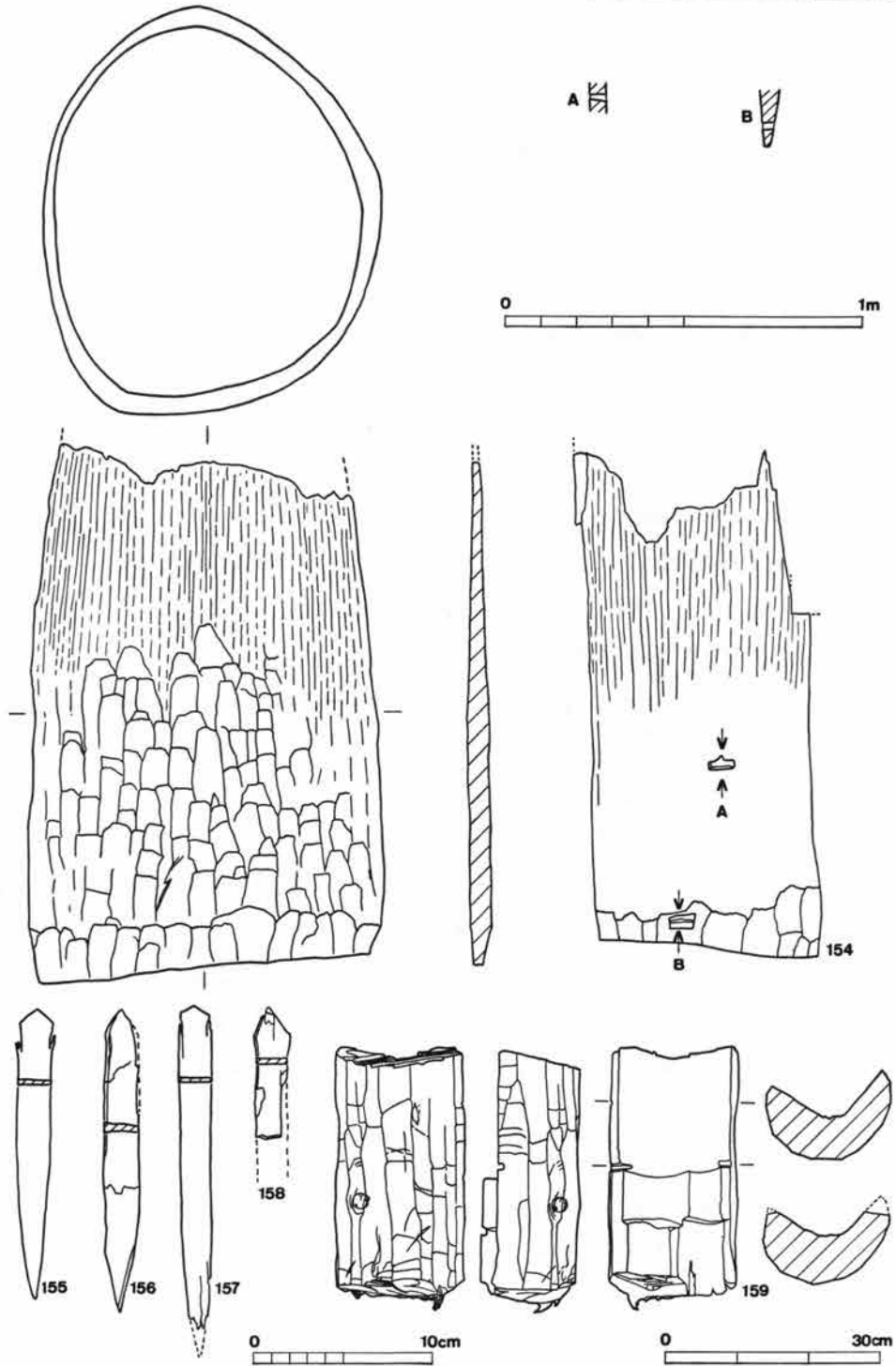
SK8303: 119黒色土器杯

SD8385: 120~129, 土師器皿120~123, 羽釜129, 緑釉陶器皿124, 碗125, 黒色土器碗126・127, 壺128



第58図 第6・8次調査出土遺物実測図 (5)

- 第8トレンチ SK8301 : 130~133, 小玉130~132, 土師器盤133
 包含層 : 134~139, 須惠器杯身134, 緑釉陶器碗135, 灰釉陶器皿136・137, 土馬138・139
- 第9トレンチ SD6009 : 140須惠器杯身
 包含層 : 141緑釉陶器碗
- 第10トレンチ 包含層 : 142・144・146・148~153, 須惠器杯142, 杯身144, 壺146, 鉢149, 灰釉陶器壺148, 土師器甕150, 中国製白磁碗151, 皿152, 中国青磁皿153
- SK6054 : 143須惠器蓋
 SK6038 : 145須惠器杯身
 SK6039 : 147黑色土器杯



第59図 第8次調査出土遺物実測図 (6)

第5トレンチ S E8142 : 155・156・158, 齋串155・156・158

第6-7トレンチ S E8179 : 154・157・159, 井筒154, 齋串157, 柱材159

系であろう。調整はナデである。同層からは58・60も出土した。土師器碗58は、口径10cm・器高3.3cmである。色調は灰色をベースとして部分的に茶褐色である。調整は、外面からヘラケズリのちミガキ(右方向に4回で一周)、外底面が一定方向のケズリのちミガキを施している。土師器杯60は、口径17.2cm・器高4.3cmである。色調は淡褐色で、口縁端部の1か所が油煤のため黒変している。体部外面は横方向のケズリのちミガキを施している。胎土は砂粒が目立つ。これらの遺物は完形に近く、良好資料である。伴出品として銭貨1枚がある(神功開宝、765年初鑄)。これも遺存状態がよく、一括遺物として把握できよう。すなわち、これら、井筒内下層出土資料は8世紀後半と考えても大過なからう。なお、須恵器杯62も同一層である。63は井筒内と掘形内との破片が接合したもので、この点から井戸は短期間のみ使用されたといえよう。平瓦66は色調が灰色で、凹面に布目、凸面に縄目が残っている。端面はヘラ切り。胎土は白色砂や黒い粒子が目立つ。焼成は良で、布目数は1cm方眼に8条である。他の瓦資料も須恵質で、ほぼ同様の胎土である。

土馬68は、トレンチの西北部、ほぼ北端で検出された。輪郭は不明だが、焼土や炭が散らばった土坑状のS X8178より出土した。8世紀。

土坑S X8182からまとまった遺物が出土した。土師器杯69は、口径18cm・器高5.1cmである。色調は淡赤褐色で、胎土に1mm以下の白色砂を含んでいる。体部外面には横方向のミガキ(5回程度)を施し、内面はナデであるが、一部放射状の暗文を施している。須恵器杯71・72も含めて、およそ8世紀に属するのであろう。

溝S D8183は、まとめの項で説明するが、古代山陰道・山陽道併用の幹線道路に規制された溝である。図示したものは、新しい方の溝に伴うものである。主体としては8世紀であるが、図示しなかった中には9世紀初頭まで下る須恵器がある。溝S D8184は、トレンチ西部にあるもので、この埋土からカマド片86が出土した。図は合成して1個体になっているが、カマドの廂の部分と、把手のつく側面とは直接には接合しない。前面の廂部分は、上半に煤が付着しており、表面も暗褐色に変色している。下半及び側面は褐色である。廂部分は貼りつけており、ナデを施している。外側面は粗いタテハケで、内面はナデである。把手の付く側面は、色調は褐色であるが、内面の上半は煤によって暗褐色に変色している。外面は粗いタテハケ、内面はナデである。把手はユビオサエ痕が、特に下部で顕著である。

同じ地点から土師器皿83が出土した。口径22.1cm・器高3.6cmである。色調は橙色や黄褐色が入り混じったもので、珍しいものである。焼成があまりいため、調整が観察できないほど磨滅している。他に須恵器杯84・85も出土した。8世紀。

包含層から砥石81が出土した。使用面は1面で、平面図の部分である。使用面はやや窪

む程度である。そこに長軸に対して、やや右上りの使用による擦痕が認められる。他の面は成形面で、長軸の両端は欠損している。材質は砂岩系で、色調は淡黄褐色である。土鍾82は、手づくねで成形されており、色調は淡茶褐色である。弥生壺87は中央部やや西寄りから出土した。口径は15.9cmである。色調は褐色で、1mm大の白色砂を含む。調整は口縁部ヨコナデ、体部はユビオサエや掌で押さえたようである。第8次調査分の中では、もっとも古く、中期頃と考えている。この他、古墳時代に属する須恵器高杯88や、飛鳥・白鳳期の須恵器蓋92などがあるが、ほとんどは奈良時代から平安時代前半のものである。

以下、注目すべき遺物のみ紹介する。須恵器硯95は、円面硯である。部分的にしか遺存していないが、長方形の透かしのあるタイプである。透かしを表現した縦方向のヘラによる刻みがあり、海と陸との差が大きい点から、8世紀後半のものと考えたい。^(注10) 灰釉陶器も10点ほど出土している。壺100はトレンチ東部にある柵S A 8231より2m西にある土坑S X 8226から出土した。口径17.5cm、底部は欠損している。胎土に白色砂を含んでいる。焼成は硬緻で、色調は淡灰色である。調整は回転ケズリである。椀・皿は103～107であるが、高台の断面が台形気味の古手と、断面三角形の新手とがあり、9～10世紀に属する。土師器羽釜102は灰釉陶器壺100と同地点で出土した。胎土は粗く、色調は褐色が主体で、一部赤褐色となっている。9世紀後半～10世紀前半。須恵器獣足101はヘラにより鋭く成形したものである。トレンチ西部の土坑S K 8169より出土した。これは奈良時代の溝S D 8183と重複しており、これより新しい。

中世の遺物も10～20点ほど出土した。中国青磁皿108は、底部片のみである。外底面をケズリ出しにし、ここ以外を施釉する。釉調は黄緑色である。12～13世紀。中国龍泉窯系青磁椀109は、鎬蓮弁文が明瞭である。断面は灰色で釉調は灰緑色である。13世紀。中国白磁椀は、通有のタイプである。12～13世紀。

第8 トレンチ 須恵器・土師器を中心として、緑釉陶器や黒色土器、瓦なども出土した。また、珍しいものとして、貨幣とガラス小玉も一緒に出土した。

弥生時代から古墳時代初期にかけての遺物の出土も目立ったが、遺構として把握はできない。小型丸底壺111は、トレンチ中央の土坑S K 8308より出土したもののだが、ピット自体は中世に属するものである。色調は淡褐色、胎土は良である。底部外面にヘラケズリを施している。112は口径9.9cm・器高6.5cmで、色調は淡褐色である。2mm以下の砂粒を含む。土師器高杯113は、色調が赤褐色であり、通有の色調が淡褐色系のものとは異なる。土師器壺115は、トレンチ北部の土坑S K 8470より出土した。色調は淡褐色である。これとほぼ同地点で、土師器高杯116が出土した。色調は赤褐色で、胎土は良ではあるが、成形は歪みがあり、あまり良好とは言えない。土師器壺114は、トレンチ西部の土坑S K

8306から出土した。色調は外面赤褐色、内面は淡褐色である。口縁部はヨコナデで、他は磨滅のため不明である。黒色土器A類の碗119は、トレンチの南東部にある土坑SK8303より出土した。色調は体部外面が暗褐色で、他が黒色である。口径19cmで、器高5.4cmである。胎土は白色砂と赤色の粒子が混じっている。体部内面は横方向のミガキと、見込みは放射状のミガキを施している。体部外面はヘラケズリを施す。

平安時代に属する溝SD8385は、トレンチ東南部で検出したもので、この埋土から整理箱2箱程度の遺物が出土した。土師器皿120～123は、色調が淡褐色で、口径13～14cm・器高2cmである。いわゆる「て」の字状口縁のタイプである。平安京製品。黒色土器A類の碗126は、口径13cmで、器高4.4cmである。色調は体部下半が淡褐色で、他が黒色である。胎土には白色砂と赤色粒が含まれている。同127は、色調も同じである。口径15cmで、器高5.1cmである。体部内面に横方向のミガキを施し、見込みには一定方向のミガキを施す。黒色土器A類の甕128は、口径15.6cmで、器高は底部欠損のため不明である。色調は体部外面が暗茶褐色～黒褐色で、他は黒色である。調整は体部外面がユビオサエで、口縁部はヨコナデを施している。土師器羽釜129は、口縁部と体部下半は欠損している。色調は暗褐色で、調整は外面がハケのちヨコナデ、内面はユビオサエ痕が顕著である。鏝より下には煤が付着している。緑釉陶器皿124は、全面施釉である。釉色は柿色で、胎土色は灰色である。内底面は使用による磨滅がある。高台は削り出して成形しているが、但し、一旦、円盤高台にしたのちに削り出したものである。丹波篠窯製品か。緑釉陶器碗125は体部が全面施釉である。釉調は黄緑色で、胎土は須恵質である。内底面見込みには1条の圈線がある。内面には粗いミガキが施されている。東海系。この遺構の年代観は、土師器皿でいえば10世紀中葉である。

土坑SK8301からは土師器盤133や、ガラス小玉130～132、及び銭貨28枚が出土した。ガラス小玉は径0.5cmで、厚さ0.3cmである。中央に円孔がある。色調は暗青色で、表面はザラついている。合計3点出土した。盤133は、口径34cm・器高7.9cmで、色調は淡橙色である。胎土も良質で、調整もていねいなナデを施している。内面見込みにはラセン状の暗文を施し、体部内面には二段の放射状暗文を施している。外底面にはケズリを施す。体部外面は横方向のヘラケズリである。銭貨は神功開宝(765年初鑄)19枚、万年通宝(760年初鑄)9枚である。このことから、次の隆平永宝(796年初鑄)が1点もないので、土坑埋没年代は8世紀後半とみてよいであろう。

包含層からは、7世紀後半の須恵器蓋134や、9～10世紀の緑釉陶器碗135(須恵質・釉色うぐいす色)、同137(須恵質・釉色黄緑色・全面施釉)、灰釉陶器皿136(灰白色・外底面以外施釉・貼りつけ高台)などがある。また、土馬138・139も出土している。138は色調が

暗灰色で、139は淡褐色である。いずれもトレンチ東部から出土した。

第9トレンチも、他と同様に須恵器・土師器を中心に出土したが、その他、緑釉陶器碗141も出土した。須恵質で、外底面以外を施釉している。釉色は緑色である。見込みに圈線を施す。

木器・木製品について説明する。154は第6—7トレンチ井戸S E8179の井筒である。直径が0.95~1.18mで、長さ1.5mである。厚さは上端が2cmで、下端に近いところが5cmである。上半部は磨滅しているが、下半部には成形痕が明瞭に認められる。基本的には上から下へ、右から左へ削ったようである。そして最下端は、削りを深く入れて、特に外側は深い。側面には2か所に穴があげられている。内面は平滑になっている。なお、側面図は、穴との繁雑さを避けるために、下半部の削り痕を省略している。材質は不明だが、スギやヒノキ、あるいは高野槇といった種類のものと思われる。

この井筒をセットする際に、直立を保つためにいくつかの材木を据えていた。159はその一つである。もとは、直径18cm程度の柱材を半割して使用している。外側には成形の削り痕が明瞭に認められる。内側は鋭くえぐられている。上下の両端も切り取られている。

齋串の内、157は井戸S E8179の井筒内から出土したものである。下部をやや欠損してはいるが、ほぼ全容のわかるものである。厚さ2mmで、上端を三角形に成形し、そのすぐ下の両端に切り込みを上から入れている。他の資料は第5トレンチ井戸S E8142から出土した。155は完形資料で、長さ16cm・幅2cm・厚さ0.2cmである。いずれもスギ様の軟かい材質のものを使用している。

4. ま と め

以上のように、第6次と第8次の調査概要について説明したが、これらの2つの成果を合わせてみると、以下ようになる。

(1) 縄文時代晩期から人跡が認められた。1片ではあるが長原式であるので、弥生時代前期との時間差はほとんどなく、時代の移り変わりを考える上で貴重な資料となった。

(2) 弥生時代中期頃には墓地(第4トレンチ)であったことや、祭祀用具と思われる小型丸底壺が出土した第8トレンチなどの状況によって、近隣に集落の存在を裏づけることになった。この状況は弥生~古墳時代前期である。

(3) 7世紀以降10世紀まで、つまり奈良時代直前から平安時代前期まで、遺構・遺物とも確認できたので、ほぼ連続して居住していたようである。特に8世紀後半から10世紀中葉までの遺物が多い。

(4) 12世紀後半から13世紀にかけての遺物も散見できるが、建物として積極的に認められ

るものはなく、ほとんどは耕地化したらしい。但し、遺物は中国製の青磁や白磁が目立ち近隣に有力層の居住地があったかもしれない。

(5)14世紀以降は、耕作に伴う溝ばかりで、完全に耕作地帯となったといえよう。

さて、以上のようなポイントが判明したが、この中で(3)は興味深い事実が内包されている。すなわち、この時期の遺構を抽出すると一定の方向性があるのである。いずれも座標北に対して西へ大きく振っているのである。2、位置と環境の項で少し触れたように、調査地の西方にある府道八幡木津線は、古代の幹線道路である古山陰道と山陽道が併用されたものであるという。この足利健亮説に従うと、現府道と今回の遺構の方向がほぼ合致するので、逆にいえば奈良時代の平城京から発した幹線道路の存在を確認したともいえよう。但し、これには前提条件があり、古代の幹線道路周辺は、同じ方向性で規制されていたことになる。この条件を認めた上で、遺構群をみると東から S D6015(第3トレンチ)、S D8235・S A8231・S A8291・S D8204(第6—7トレンチ)、S A8509・S A8508・S B8497(第9トレンチ)が北に対して西偏したもので、これと直交方向なのが、S B6035(第10トレンチ)、S D8183(第6—7トレンチ)、S D8385(第8トレンチ)ということになる。今、仮りに現府道とこれらの遺構群と、もっとも整合する方向である N33°W で線をひいてみると、第60図のようになる。これにもいくつかの前提条件がある。

まず、この推定線は1町方格を念頭に置いたものであるが、実は当時の1町が明確ではないのである。歴史地理学では1町^(注11)109mとされており、また108mともいわれている。そして、考古学からは107m程度ともいわれている。

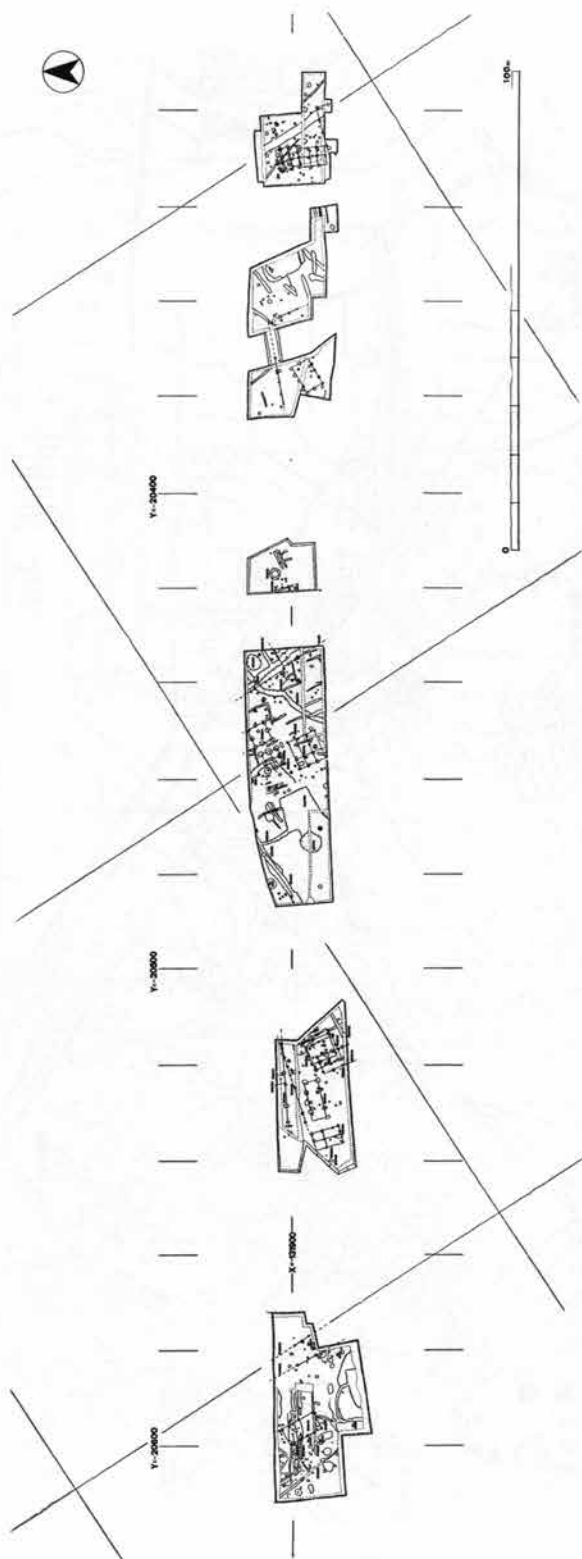
そこで、今回は古代幹線道路が平城京から発したものであるもので、当時の尺度から推定してみた。この研究は井上和人氏^(注12)によって詳細に行われている。氏によれば平城京遷都時は大宝令の大尺で地割りがなされており、平城京は1大尺=0.3553mと計算されている。すると、1町は300大尺となるので、106.59m程度となる。今回はこの数値を採用した。そして、現府道のほぼ中心から東へ1町、2町、3町と復原線をひいてみた。また、直交方向はS D8183の中心を通る線ということにした。

これらの前提条件によって1町復原線をひいてみると、東へ1町に柵S A8509が、東へ2町に溝S D8204が、東へ3町に溝S D6015がほぼ合致することが判明した。このことによって、おそらく1町ごとに区画があったと認めることができよう。但し、他の溝や柵でも同方向なので、別な基準線を措定できなくもないが、現時点では1町内の区画線として把握しておきたい。まして、直交線については1か所しか確認されておらず、今後の近隣の調査結果を待つて確定する内容ではあろう。

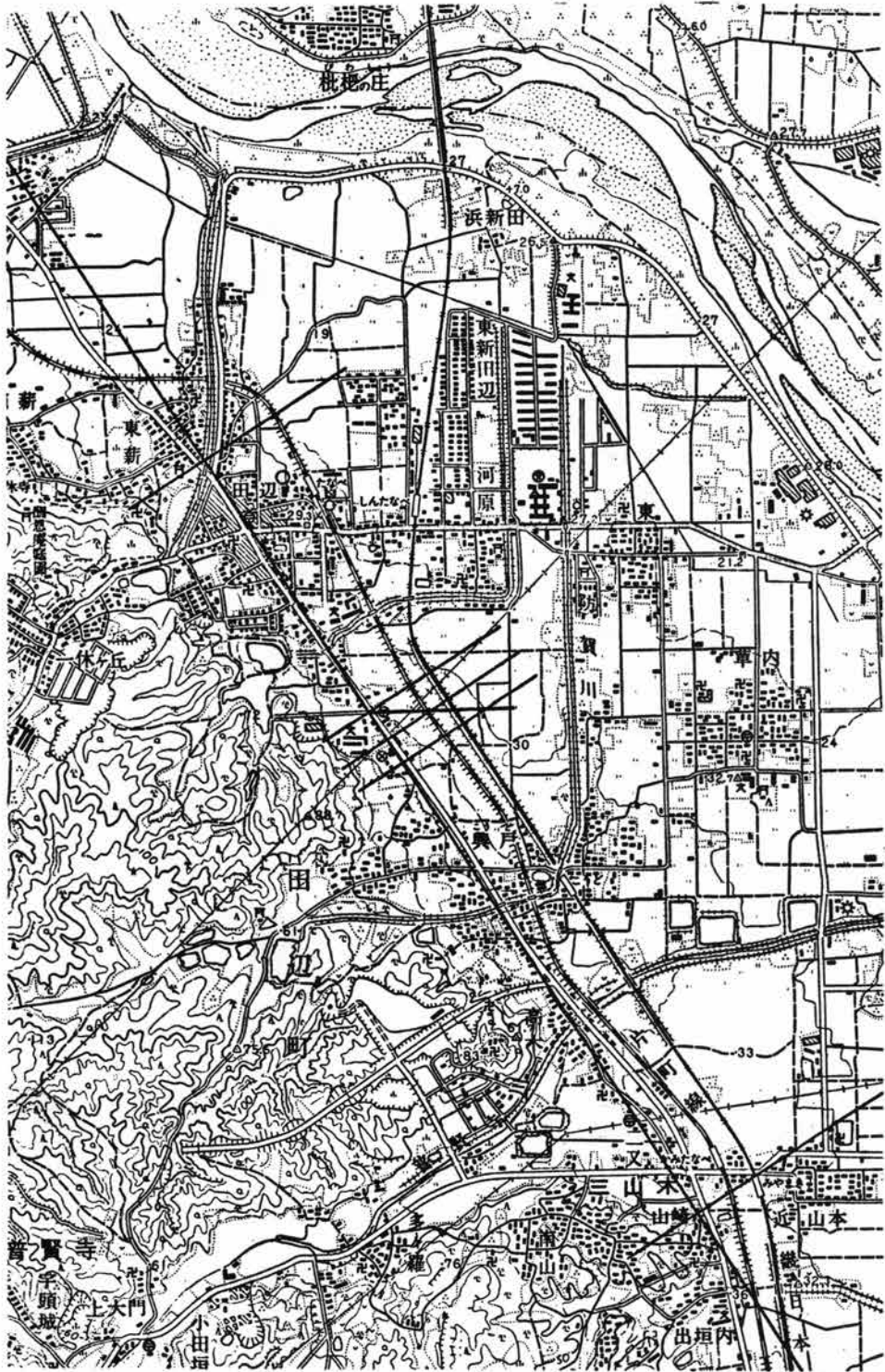
しかしながら、現府道八幡木津線が、古代幹線道路とほぼ重複するという調査成果は、

この直交方向線についても新たな展開をもたらせたといえよう。すなわち、ひとつは現在南山城で復原されている条里との関係である。今ひとつは、『続日本紀』にみえる「山本駅」との関係である。

前者については谷岡武雄氏^(注13)の説が定説である。この方向はほぼ真南北に合わせたものであるので、当然今回の1町復原線とは相違する。同時期に2つの方向の条里があったということを認めた上で、合理的に説明すると次のようになる。つまり、平野部は耕作地であり、ここに真南北の条里があり、山際を一直線に通る幹線道路沿いは、西偏する地割であったと考えるのである。^(注14) 今回の調査地でも居住域であったことは確かであり、うまく説明がつく。但し、第6次調査地の東部、第1トレンチと第2トレンチでは、明確な耕地は確認されておらず、今後その境界がどこなのか、あるいは真南北に整然と区画された条里があったのかどうかについても確認されねばならない。今後の平野部における調査に期待したい。



第60図 調査地内における推定条里



第61図 推定古山陰道・山陽道と推定条理（部分）

さて、今ひとつの「山本駅」との関係であるが、これがどういうことかという、平城京への遷都が行われた翌年の和銅4(711)年正月に「始て都亭を置く、山背国相楽郡岡田駅、綴喜郡山本駅、河内国交野郡楠葉駅、(以下省略)」とあり、都から幹線道路のところどころに駅を置くことが決められた。『大宝令』の規定によれば、「凡そ行程は馬は日に七十里、歩は五十里、車は卅里」とあり、「卅里毎に一駅を置け」ともあるので、駅は整然とした官衙であったことがわかる。「山本駅」は田辺町三山木にある山本という地に^(注15)比定するのが、楠葉駅との関係からほぼ間違いないので、今回の条里あるいは1町地割から復原すれば、山本駅の所在地がもっと明確になるのである。今回の方位N33°Wに合致するのは山本あたりから東薪あたりである。この間を略測すると約3,200mあり、すなわち30町(106.59m×30=3,197.7m)とみなすことができる。そこで、今回の基準線(SD8183)から延伸すると第61図のようになる。今回の基準線から山本付近の線まで19町である。したがって、府道と307号線との交差点を通る線とは20町となる。ここから10町北西にも線を入れた。この30町(令の規定によれば5町が1里なので6里分)の直線がどういう意図からなのかかわからないが、とりあえず提示しておく。ともあれ、「山本駅」の範囲が今回の呈示線を中心として南北1町程度に収まる可能性は、現在の道の形状から高まったといえよう。

以上の雑駁な考察から、古代の幹線道路は直線的に設置されたという説が少なくとも、山本～東薪間では認められ、更に、その周辺には1町単位の方格地割がなされ、整然とした建物や井戸、溝・柵のあったことが判明した。また、瓦も出土していることから、瓦葺の施設も想定され、古代(特に奈良時代から平安時代前半)の幹線道路沿いの景観が、より具体的に復原できるようになった。なお、遺物としては7世紀から連綿と出土しており、この景観がそこまで遡る可能性がある。また、量的には8世紀後半がもっとも多く、長岡京遷都あたりを契機として、やや閑散とした景観に変化するようである。井戸の廃絶はこの時期と考えている。それは、平城京段階の古代山陰道・山陽道の併用道という主幹道路から、長岡京を経て平安京遷都に伴う一般道への性格変更と符合するものであろう。但し、緑釉・灰釉にみられるように一般集落ではあまり見られないものも20～30点出土しており、奈良の重要性がまだ持続していたとも考えられる。

ともあれ、古代の景観復原に大きな成果があった調査と把握しており、今後の研究にいくばくかの指針が得られたと確信している。

(伊野近富)

- 注1 和田里香・長田康平・吉田 桂・島田和幸・定免謙一・武田宏司・高橋卓也・栃木道代・村川恵・天岡昌代・清水紀子・石本淑子・兼松幸代・古賀伸枝・丸本淳子・福丸タエ子・藤原由子・波部 健・田村佐和子・石渡理子・塚本晃子・木坂葉香・角南聡一郎
- 注2 鷹野一太郎『興戸遺跡発掘調査概報―郡塚地区の調査―』 田辺町教育委員会 1989
- 注3 山口 博・大槻真純「興戸遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会) 1980
- 注4 注2と同じ
- 注5 伊賀高弘「興戸遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注6 注2と同じ
- 注7 1990年3月に田辺町教育委員会が調査を実施した。鷹野一太郎氏の御教示による。
- 注8 奥村清一郎・西川英弘「興戸古墳群発掘調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第2集 田辺町教育委員会) 1981
- 注9 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985
- 注10 伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第37号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注11 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂 1985
- 注12 井上和人「古代都城制地割再考」(『研究論集Ⅶ』 奈良国立文化財研究所) 1985
- 注13 谷岡武雄『平野の開発』 古今書院 1964
- 注14 足利健亮氏御教示
- 注15 注9と同じ

圖 版

図版第1 田中西遺跡

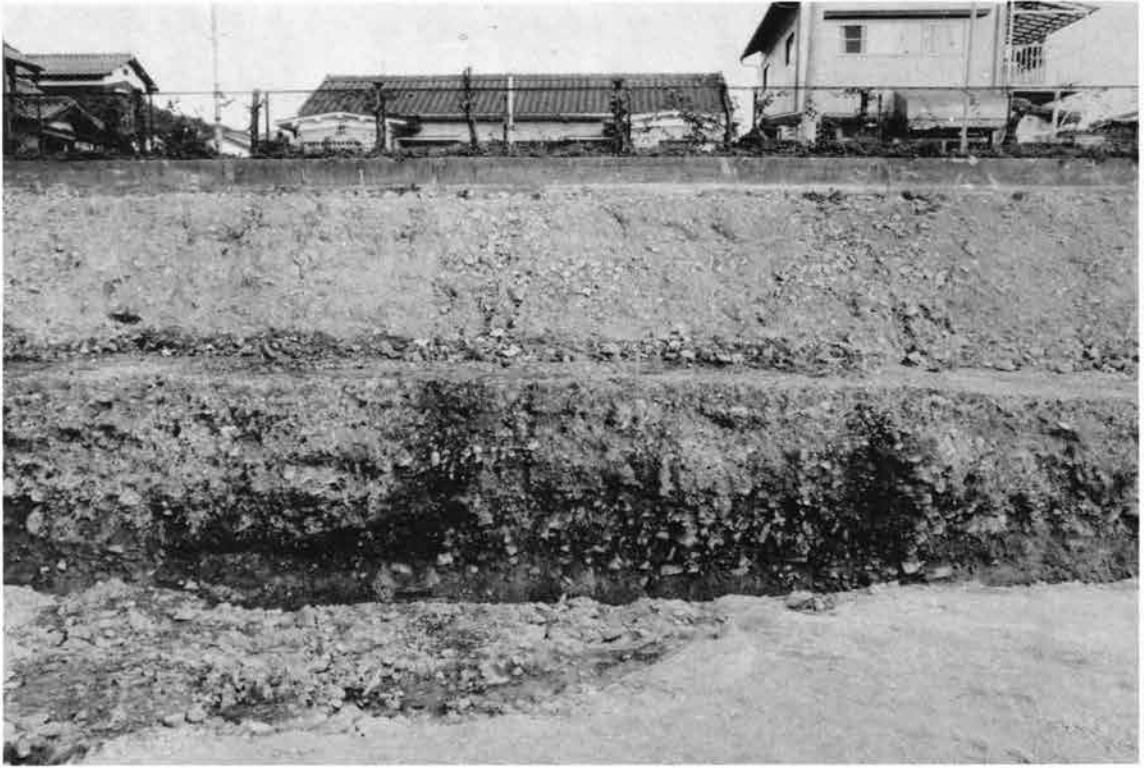


(1) 調査地全景(北西から)



(2) 調査風景(南から)

図版第2 田中西遺跡



(1) トレンチ東壁土層堆積状況



(2) 調査地近景(北西から)

図版第3 天若遺跡

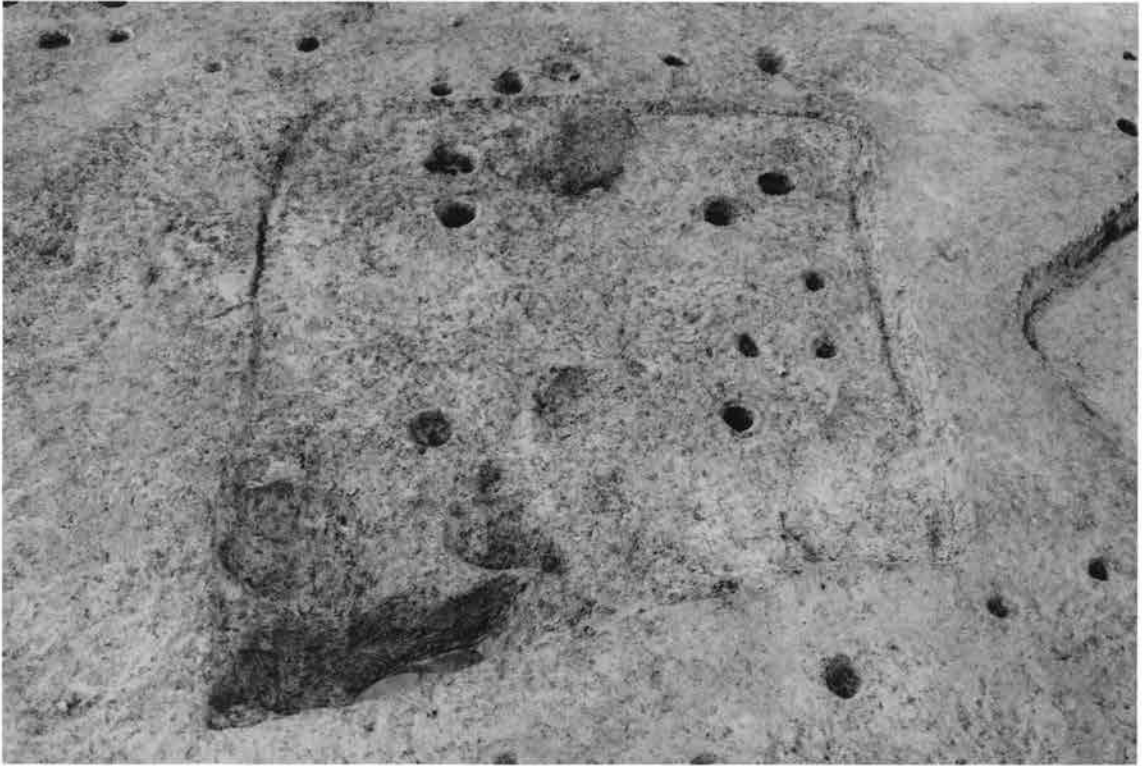


(1) 調査地遠景(東から)

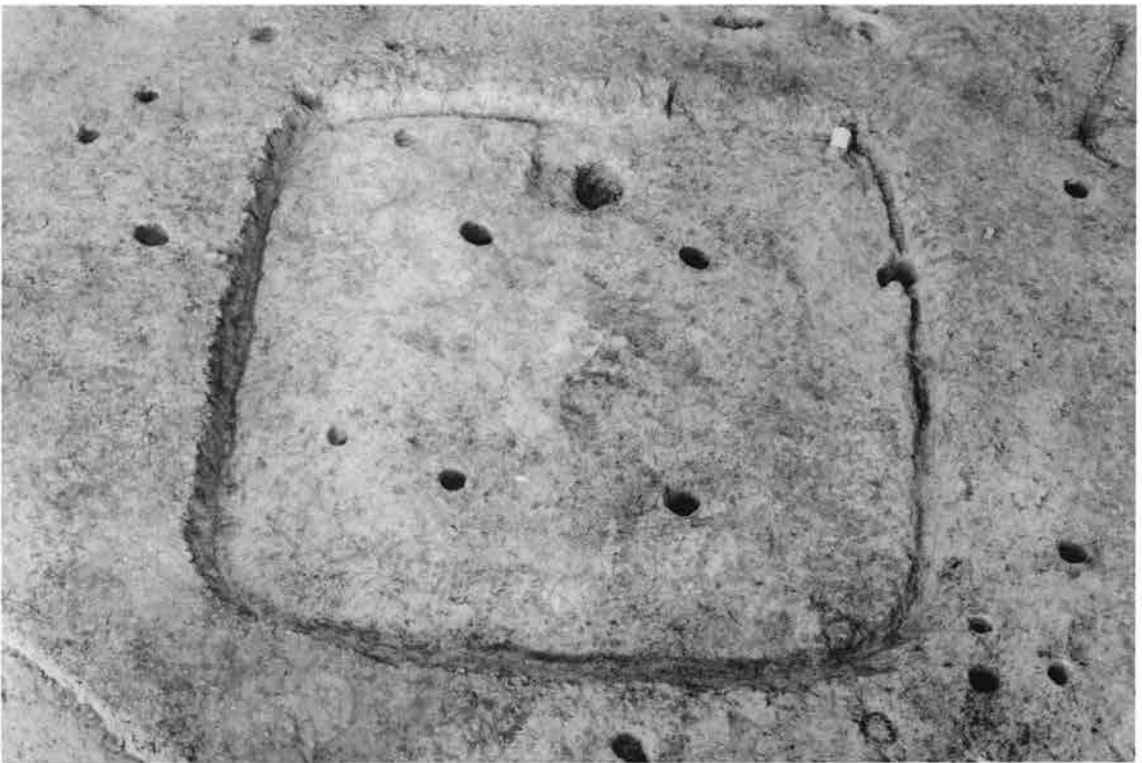


(2) 12トレンチ遺構検出状況(西から)

図版第4 天若遺跡

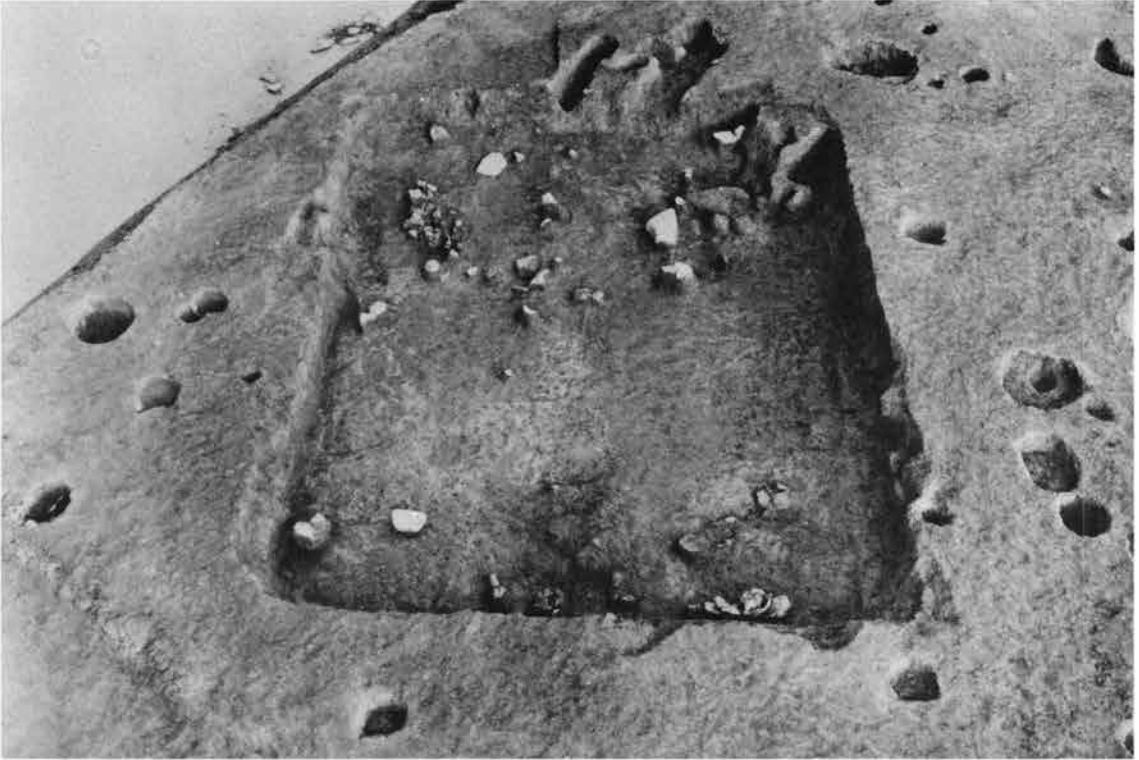


(1) 竪穴式住居跡 S H9001(南から)



(2) 竪穴式住居跡 S H9002(南西から)

図版第5 天若遺跡



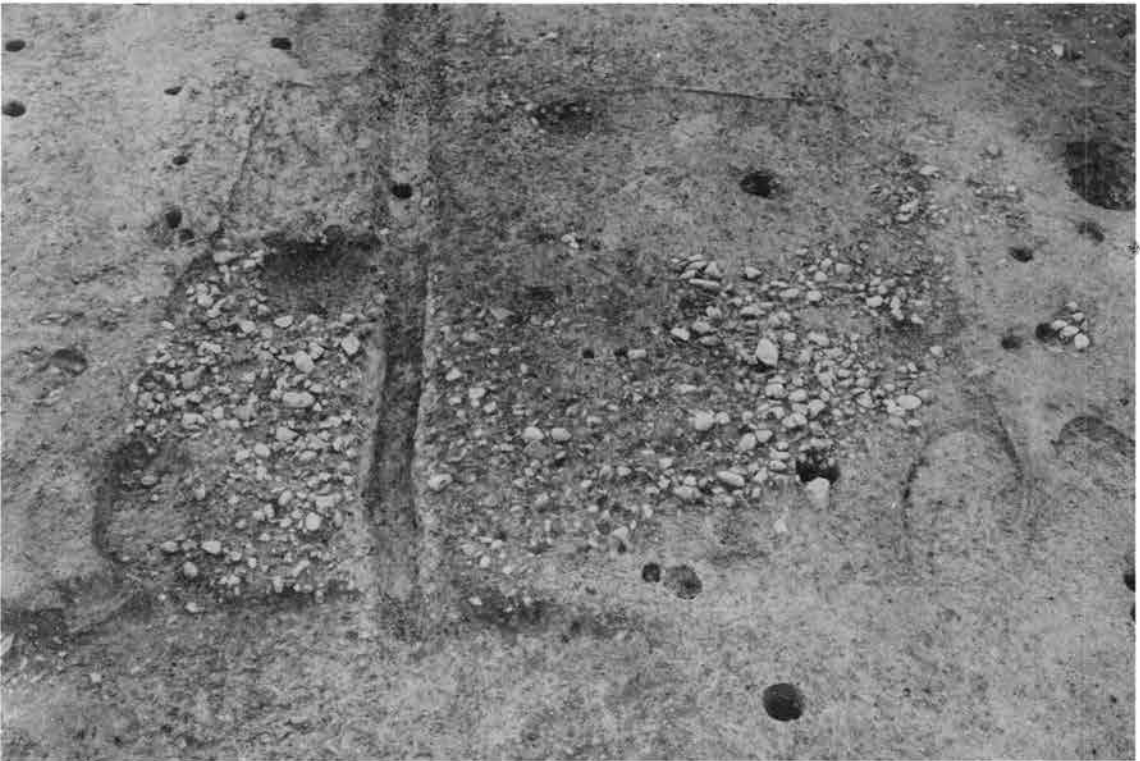
(1) 竪穴式住居跡 S H9003 遺物出土状況(西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H9003(西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H9004(南から)



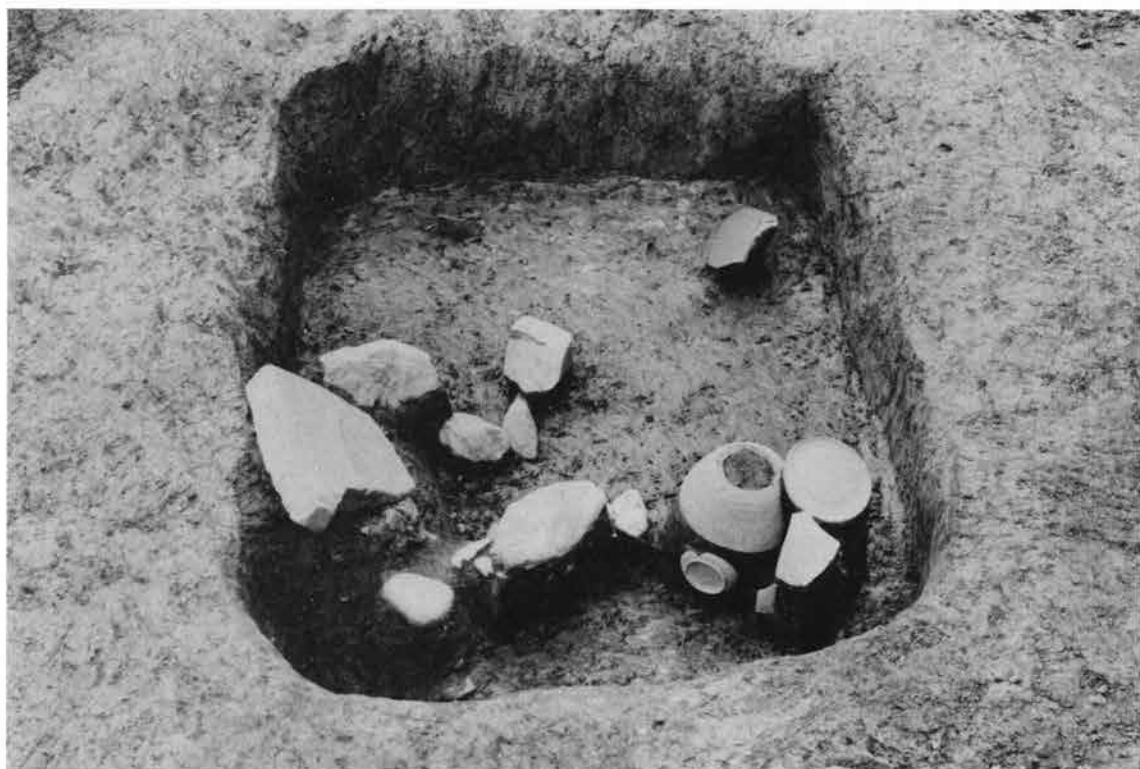
(2) 竪穴式住居跡 S H9005(北東から)



(1) 竪穴式住居跡群(北から)



(2) 土坑S K9006及び井戸跡S E9015(東から)



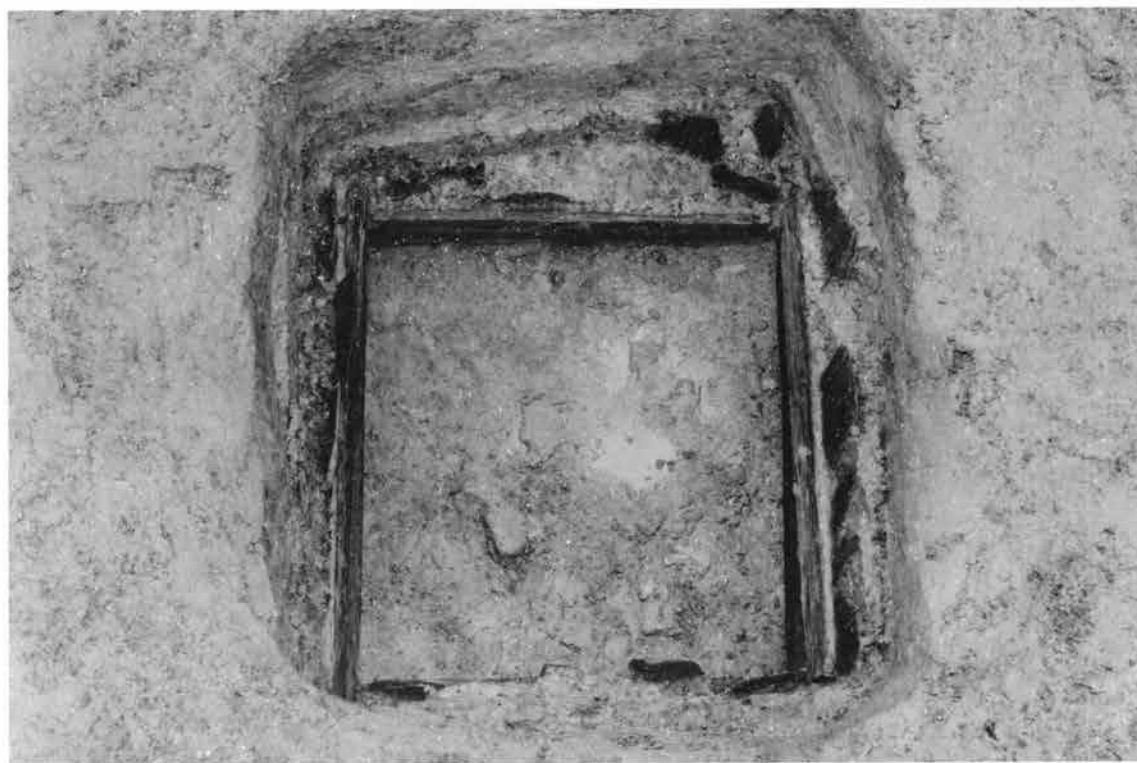
(1) 井戸跡 S E 9015 上層遺物出土状況(北西から)



(2) 井戸跡 S E 9015 中層遺物出土状況(東から)



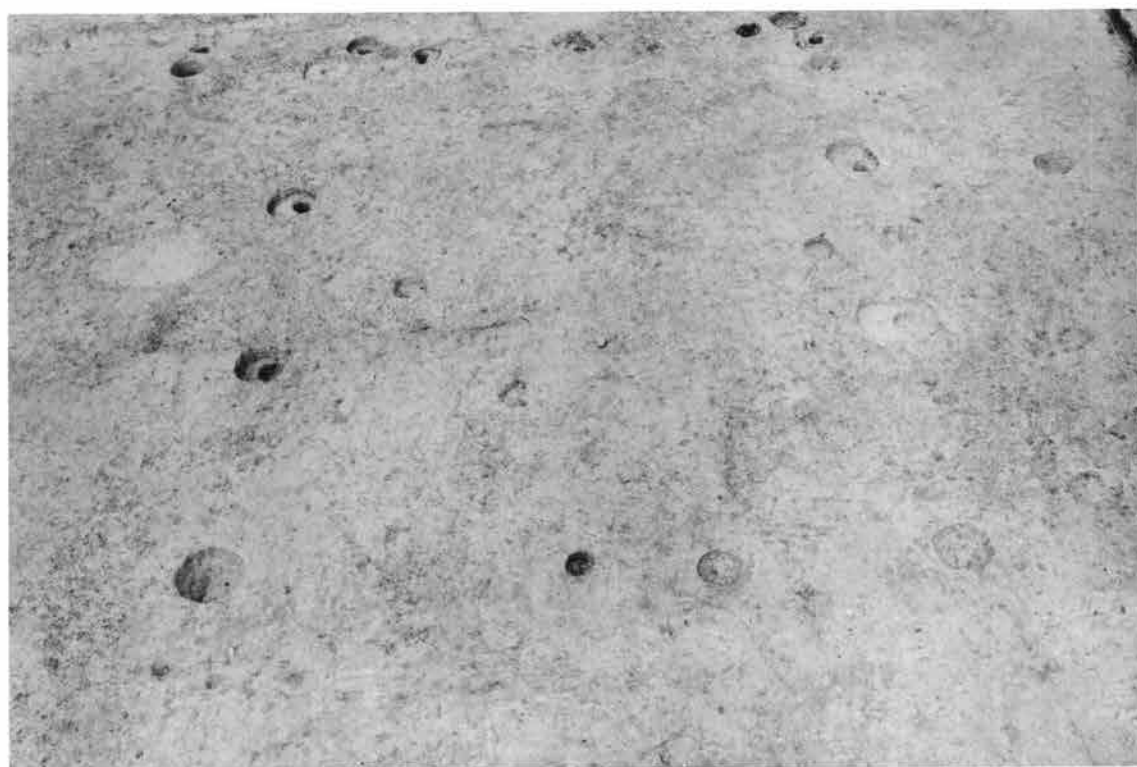
(1) 井戸跡 S E9015 下層遺物出土状況(東から)



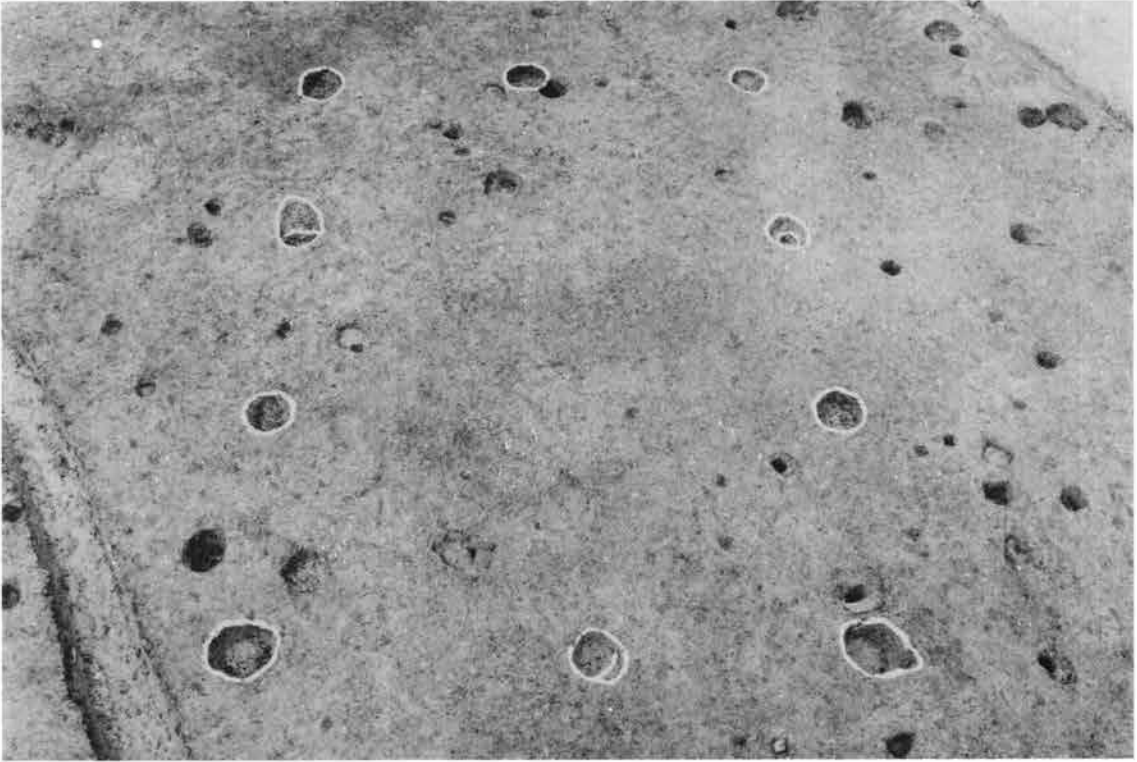
(2) 井戸跡 S E9015(南東から)



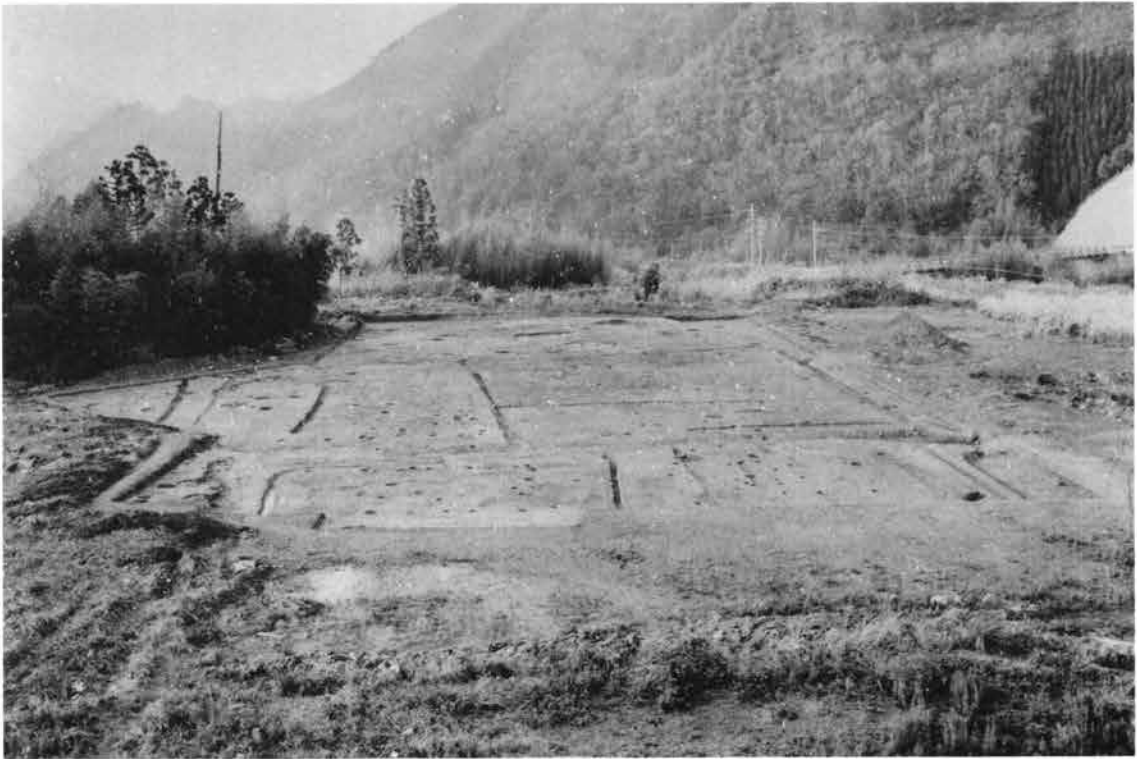
(1) 掘立柱建物跡 S B9021(北西から)



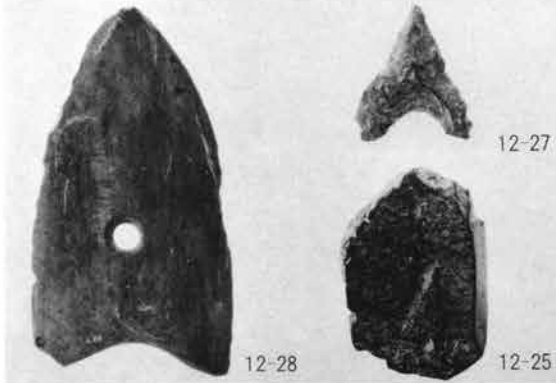
(2) 掘立柱建物跡 S B9022(南東から)



(1) 掘立柱建物跡 S B9023(南東から)



(2) 調査地全景(南東から)



図版第13 百々遺跡



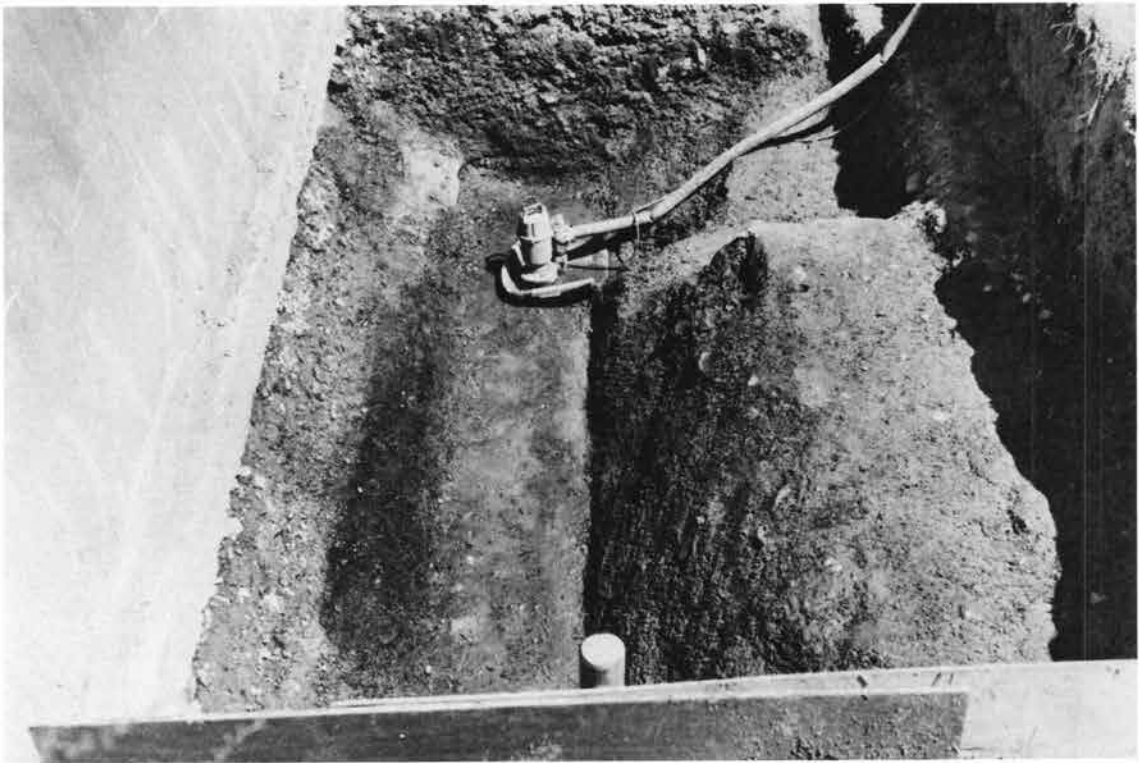
(1) 調査前風景(南から)



(2) 上層遺構(北から)

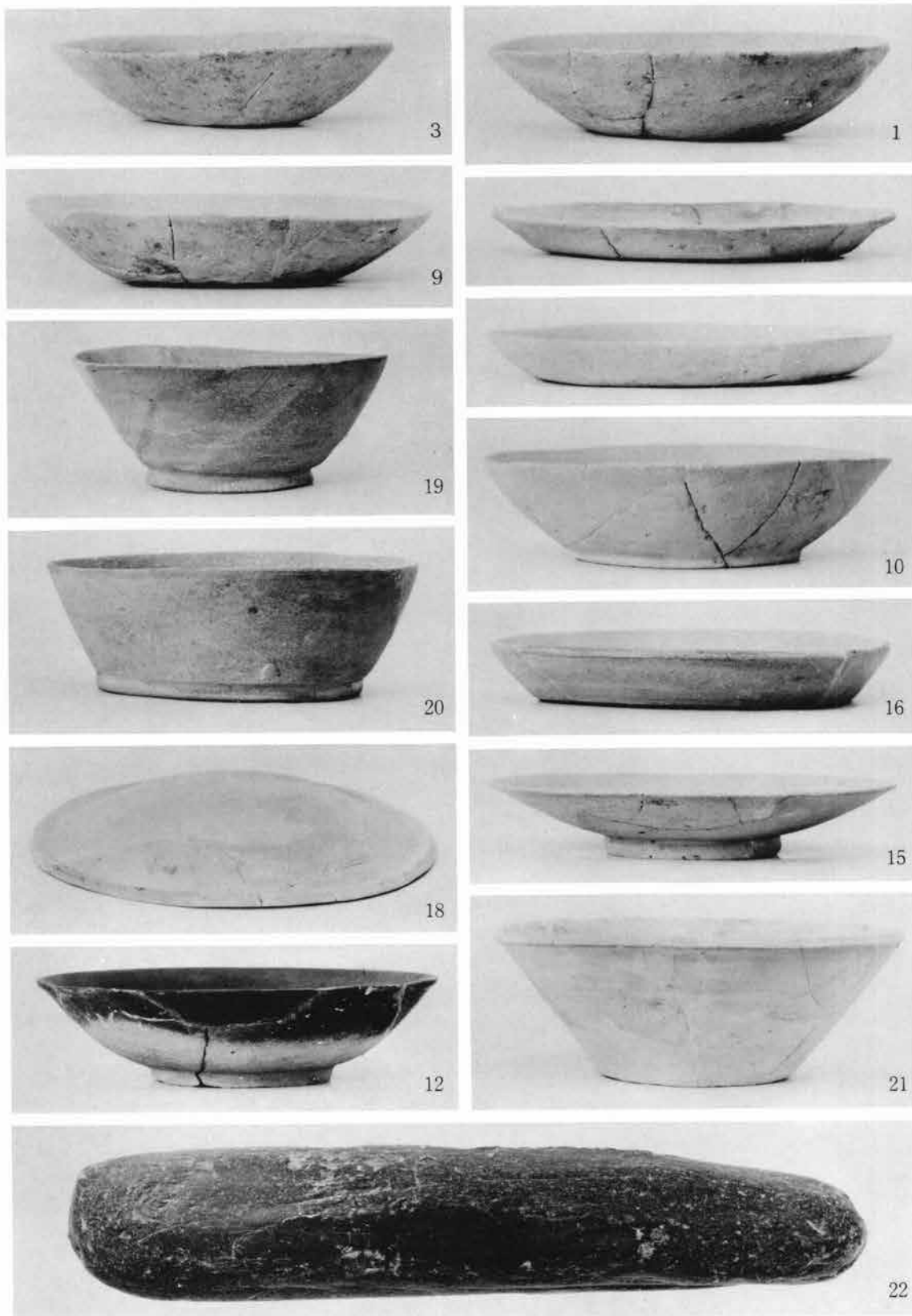


(1) 下層遺構検出状況(南トレンチ) 南から

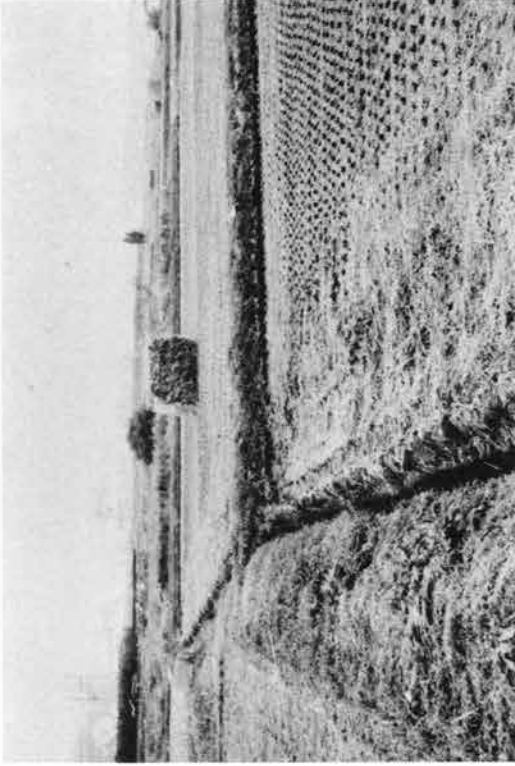


(2) 溝S D03検出状況(北トレンチ) 南から

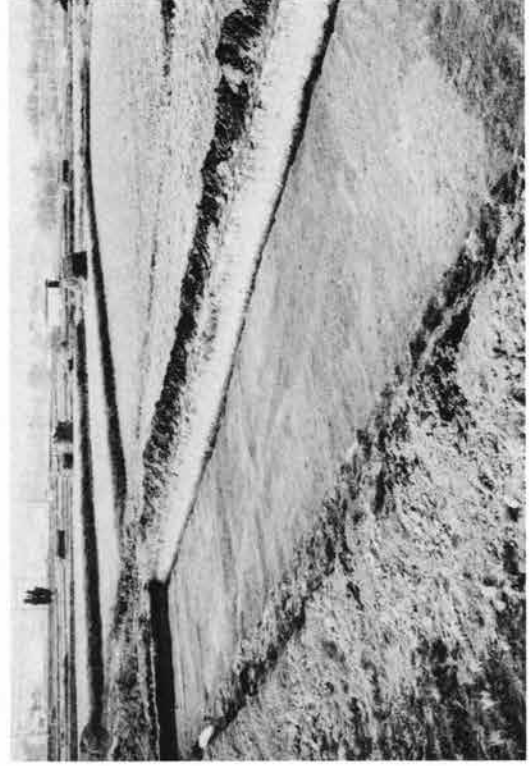
図版第15 百々遺跡



出土遺物 (番号は第25図遺物実測図の番号と一致する)



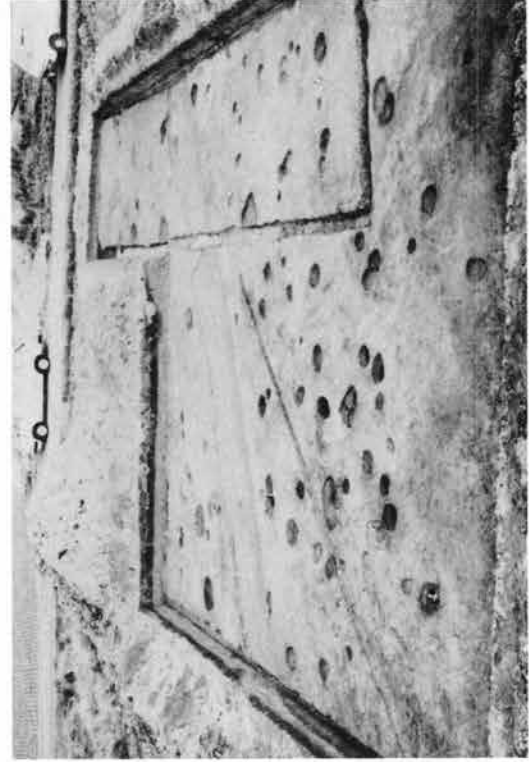
(1) 調査前風景(東から)



(2) 第1トレンチ(南東から)



(3) 第2トレンチ(南東から)



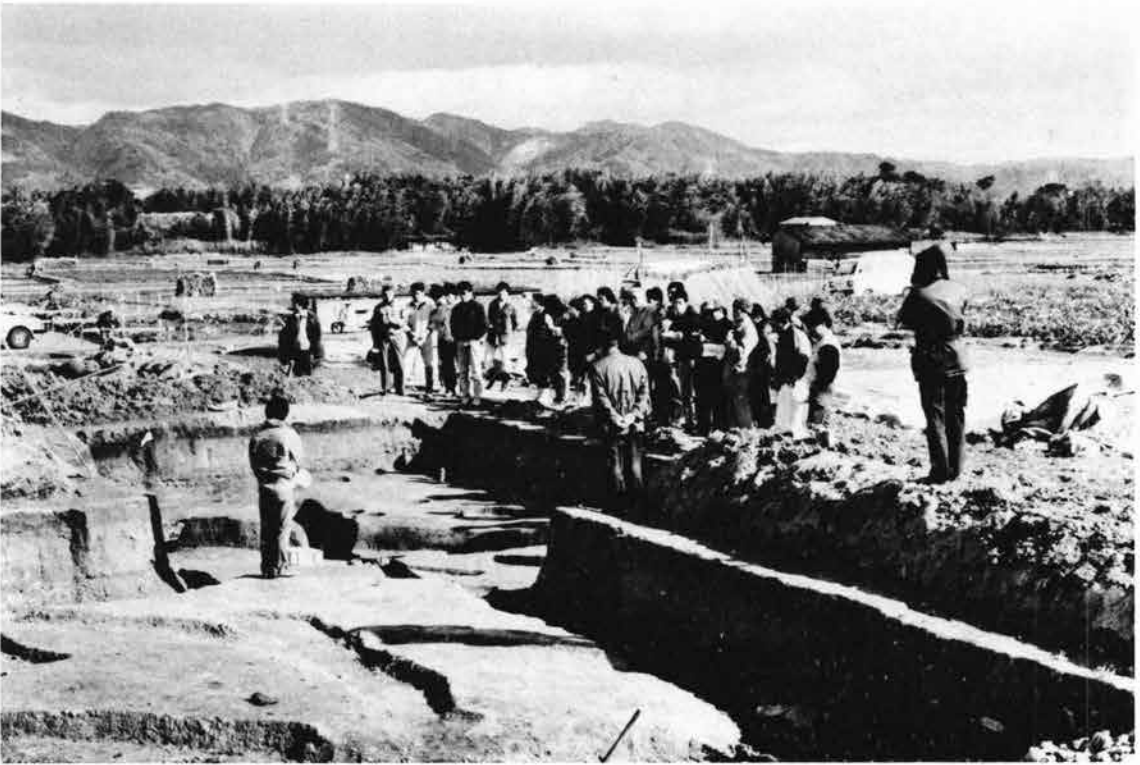
(4) 第3トレンチ古代面(西から)



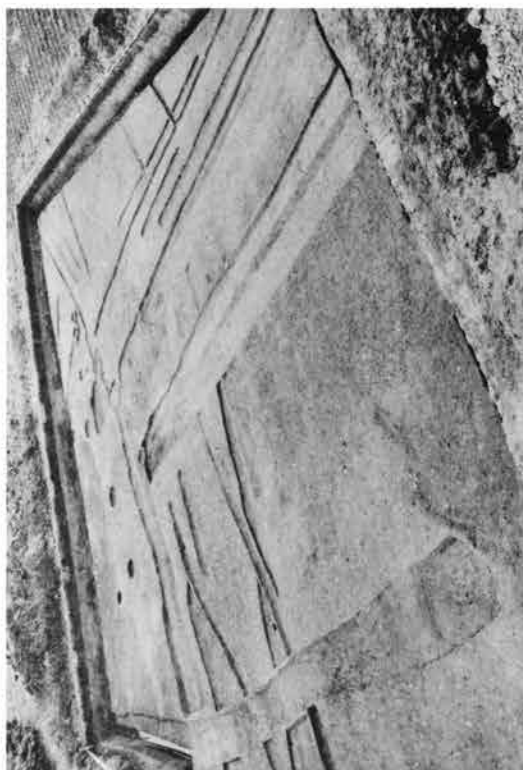
(1) 第8トレンチ中世面(西から)



(2) 第9トレンチ近世面(東から)



(3) 現地説明会風景(西から)



(1) 第4トレンチ中世面(東から)



(2) 第4トレンチS B6042 検出状況(東から)



(3) 第4トレンチS B6042 掘削状況(東から)



(4) 第4トレンチS X 6050 検出状況(北から)



(1) 第4トレンチ溝S D805I 完掘状況(東から)



(2) 第4トレンチ東南部(東から)



(1) 第4トレンチ S X 6050 検出状況(北から)



(2) S X 6050 検出状況(東から)



(3) S X 6052 遺物検出状況(東南から)



(4) 第3・4・10トレンチ空中写真(南から)

図版第21 興戸遺跡（第6次）

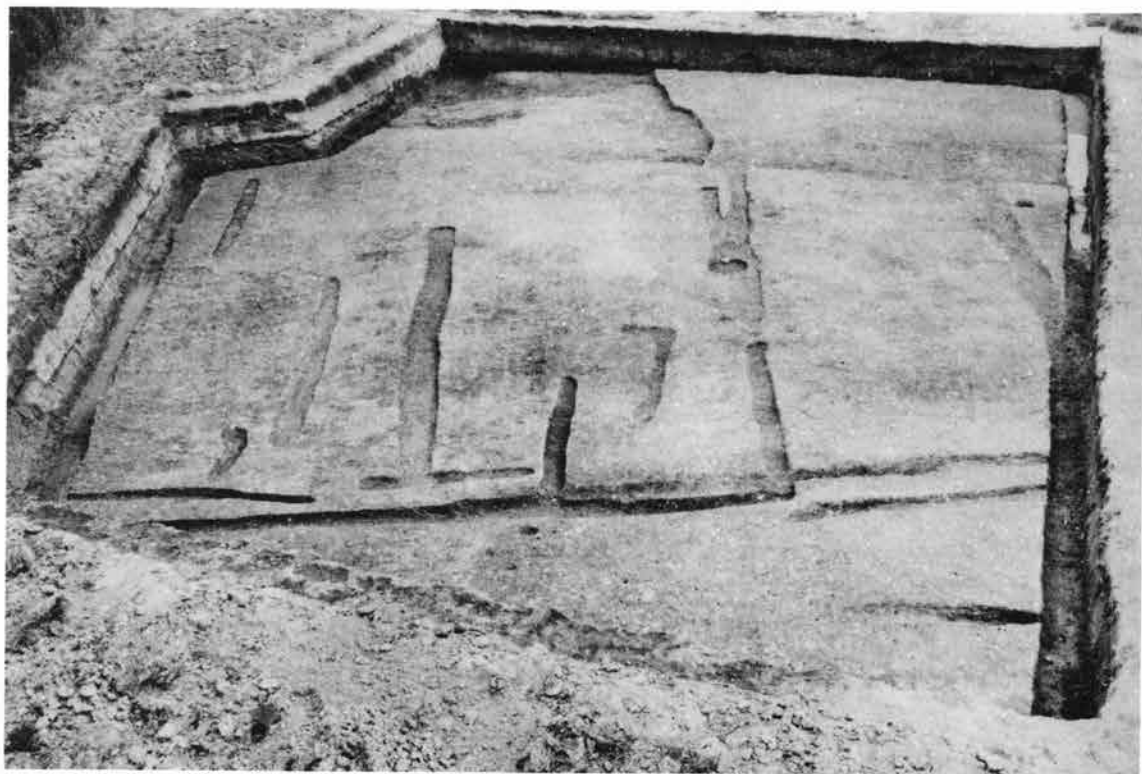


(1) 調査地全景(西から)



(2) 調査地全景(南から)

図版第22 興戸遺跡（第8次）



(1) 第5トレンチ中世面(北から)



(2) 第5トレンチ古代面(北から)



(1) 第5 トレンチ井戸 S E8142(北から)



(2) 第5 トレンチ井戸 S E8142 完掘(北から)



(3) 第5 トレンチ井戸 S E8142 墨書土器(南から)

図版第24 興戸遺跡（第8次）



(1) 第6-7トレンチ中世面(東から)



(2) 第6-7トレンチ古代面(東から)

図版第25 興戸遺跡 (第8次)



(1) 第6-7トレンチ建物跡S B8195(北から)



(2) 建物跡S B8195 柱穴(北から)



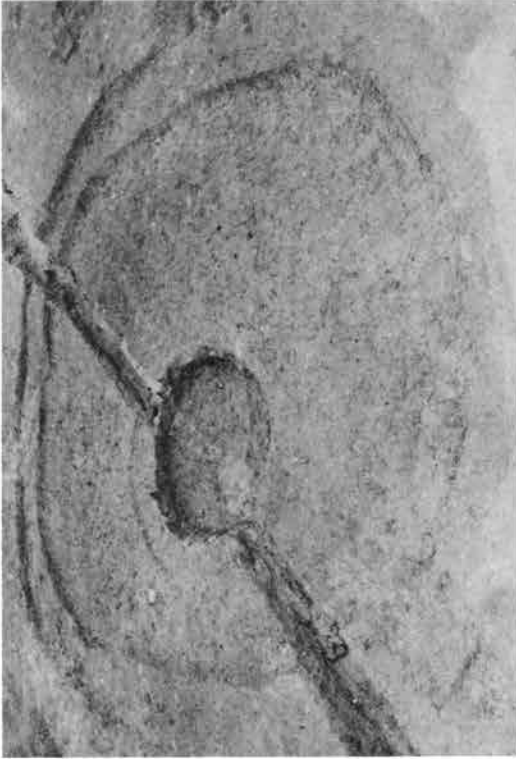
(3) 第6-7トレンチ西部, 古代面(東北から)



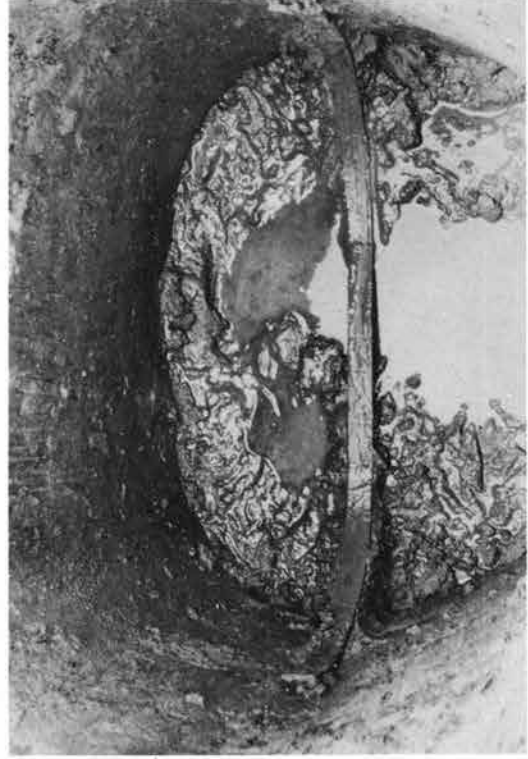
(1) 第6-7トレンチ井戸S E 8233 検出状況(西から)



(2) 井戸S E 8179 検出状況(東から)



(3) 井戸S E 8179 検出状況(西南から)



(4) 井戸S E 8179 井筒内曲物(東から)



(1) 井戸 S E 8179 井筒南半



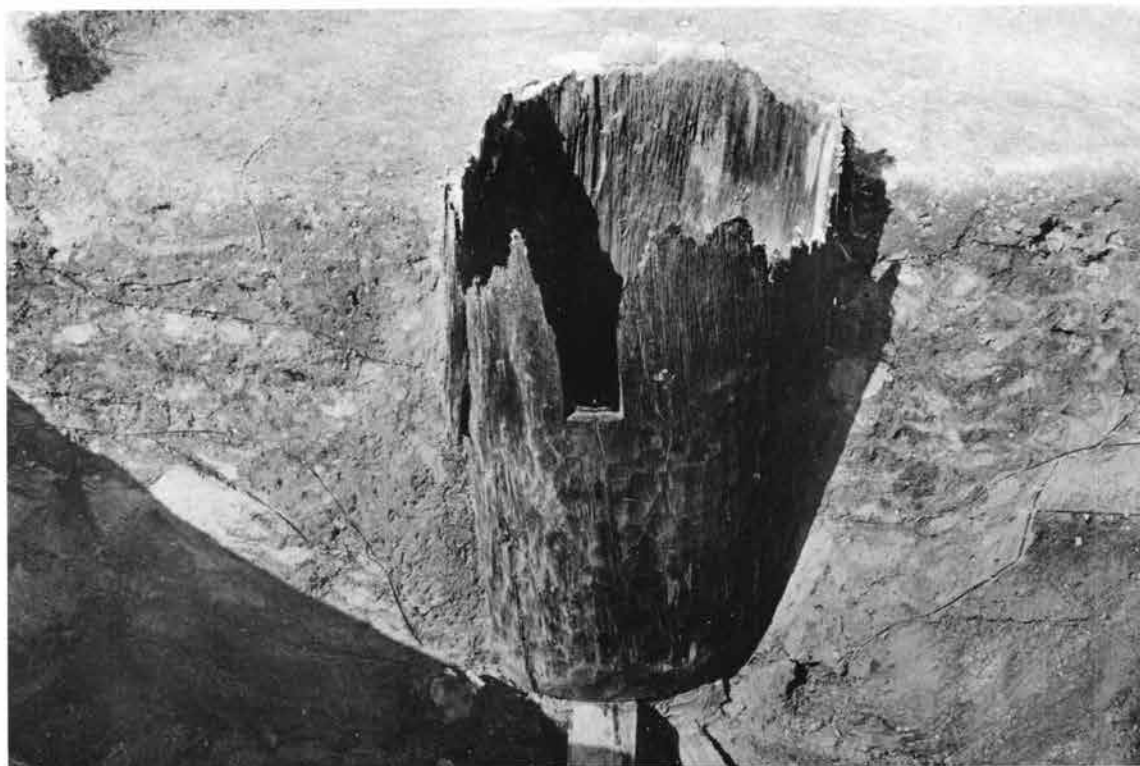
(2) 井戸 S E 8179 井筒半割(南から)



(3) 井戸 S E 8179 土層断面剥ぎとり(南東から)



(4) 井戸 S E 8179 土層断面剥ぎとり(南東から)



(1) 井戸 S E8179 井筒全景(南から)



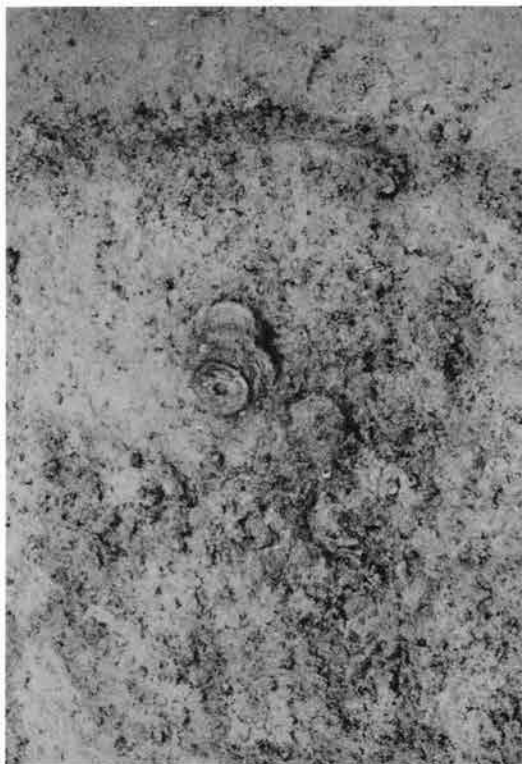
(2) 井戸 S E8179 井筒下部(成形痕)



(1) 第8トレンチ古代～中世面(東から)



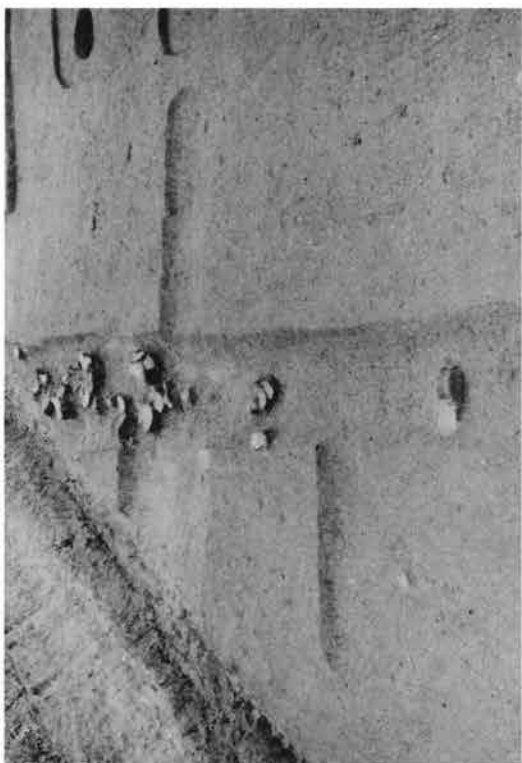
(2) 第8トレンチ中央部古代面(東から)



(1) 第8トレンチ土坑S K8301 検出状況(北から)



(2) 第8トレンチ土坑S K8467(北西から)



(3) 第8トレンチ溝S D8385(東から)



(4) 第8トレンチ溝S D8385 遺物出土状況



(1) 第9トレンチ近世面(西南から)



(2) 第9トレンチ北西部古代面(東北から)



(3) 第9トレンチ古代面(東から)



(1) 第9トレンチ古代面(西から)



(2) 第9トレンチ冊 S.A.8509(南東から)



(3) 現地説明会風景



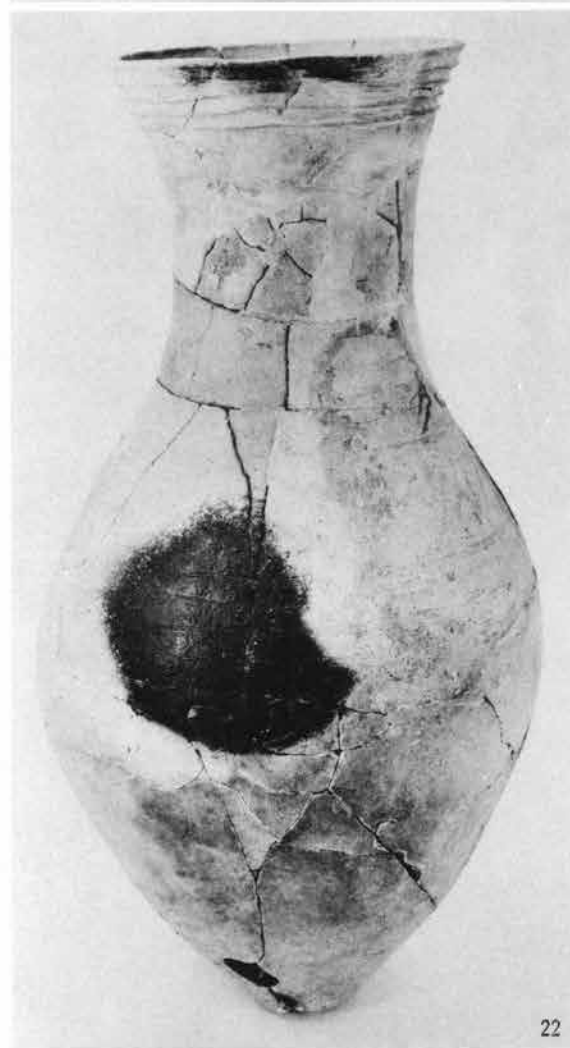
(1) 第10トレンチ古代面(西から)

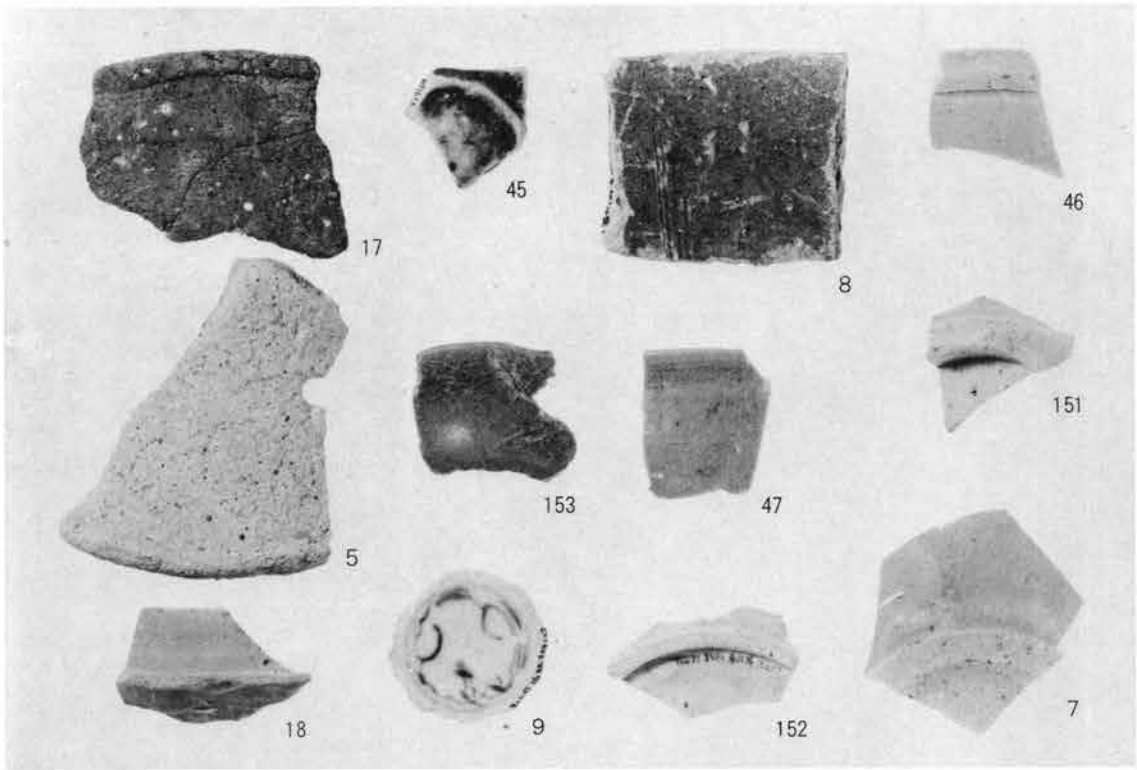


(2) 建物跡 S B 6035 西部(東から)

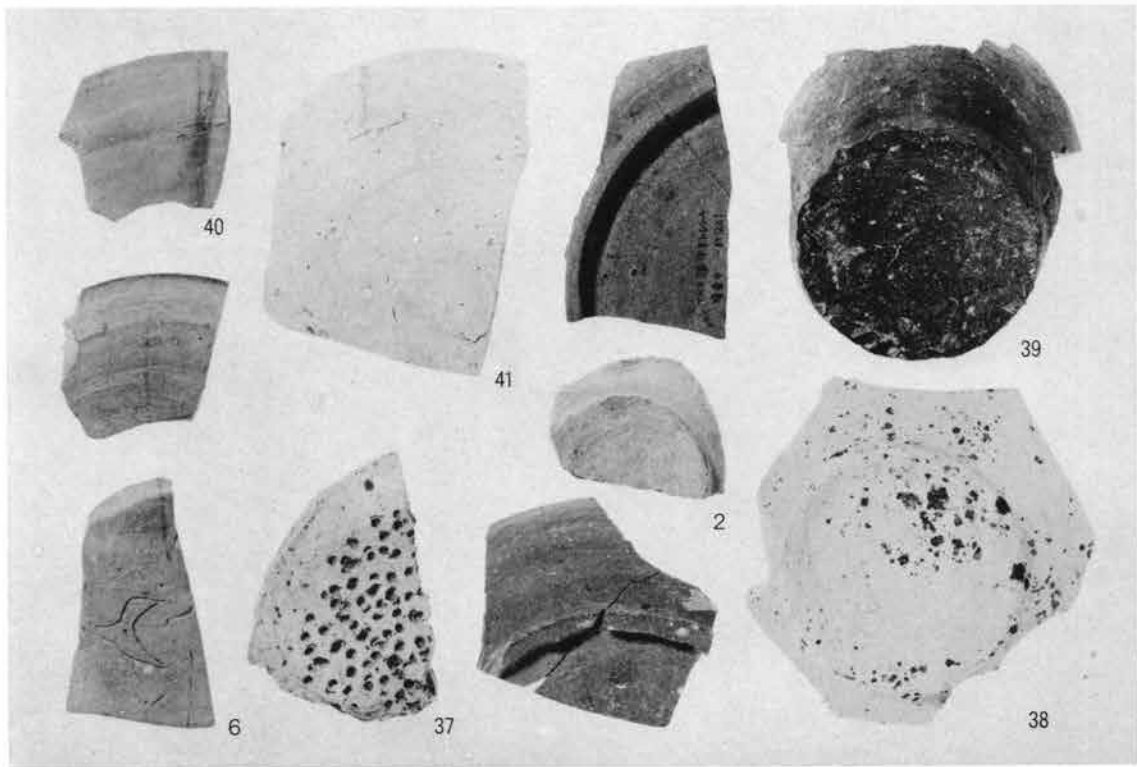


(3) 建物跡 S B 6035 南東隅ピット(南から)





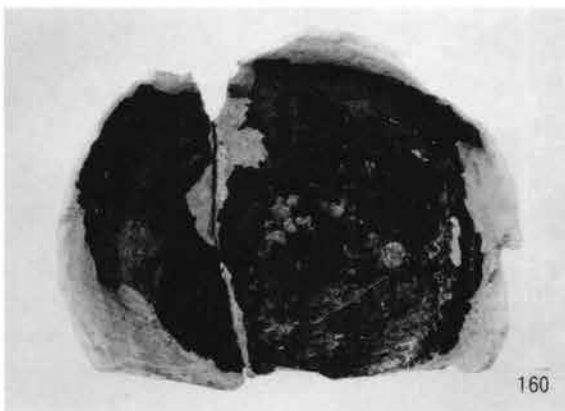
(1) 縄文・弥生・古墳・平安・鎌倉時代



(2) 奈良時代中心



1



160



48



100



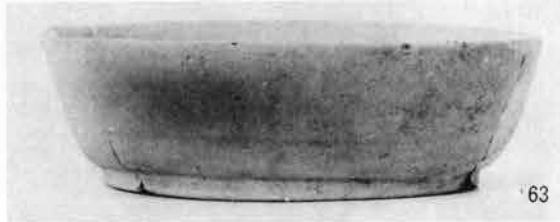
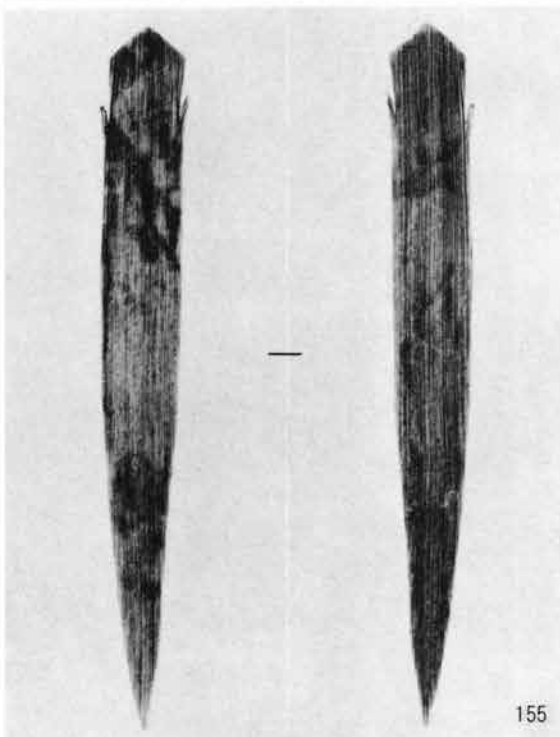
74

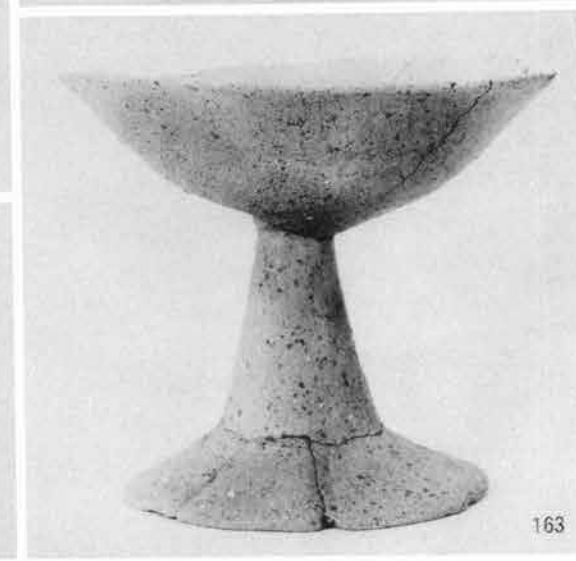
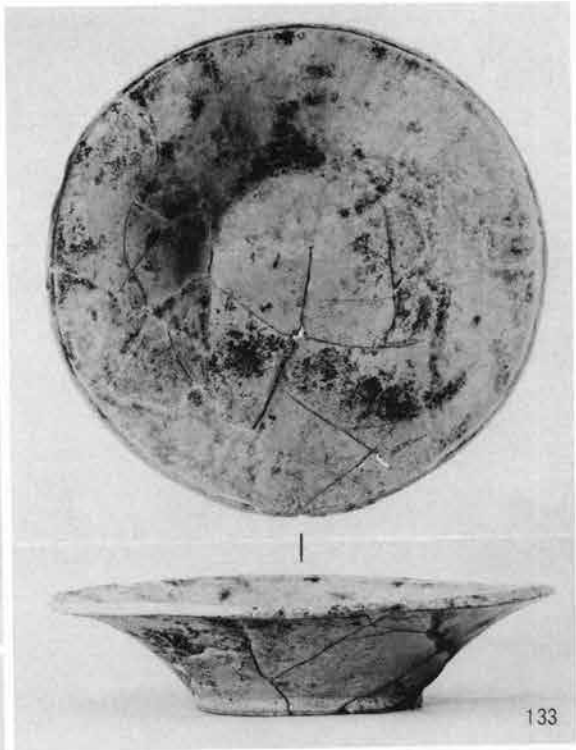
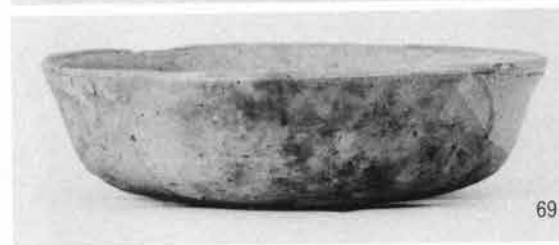


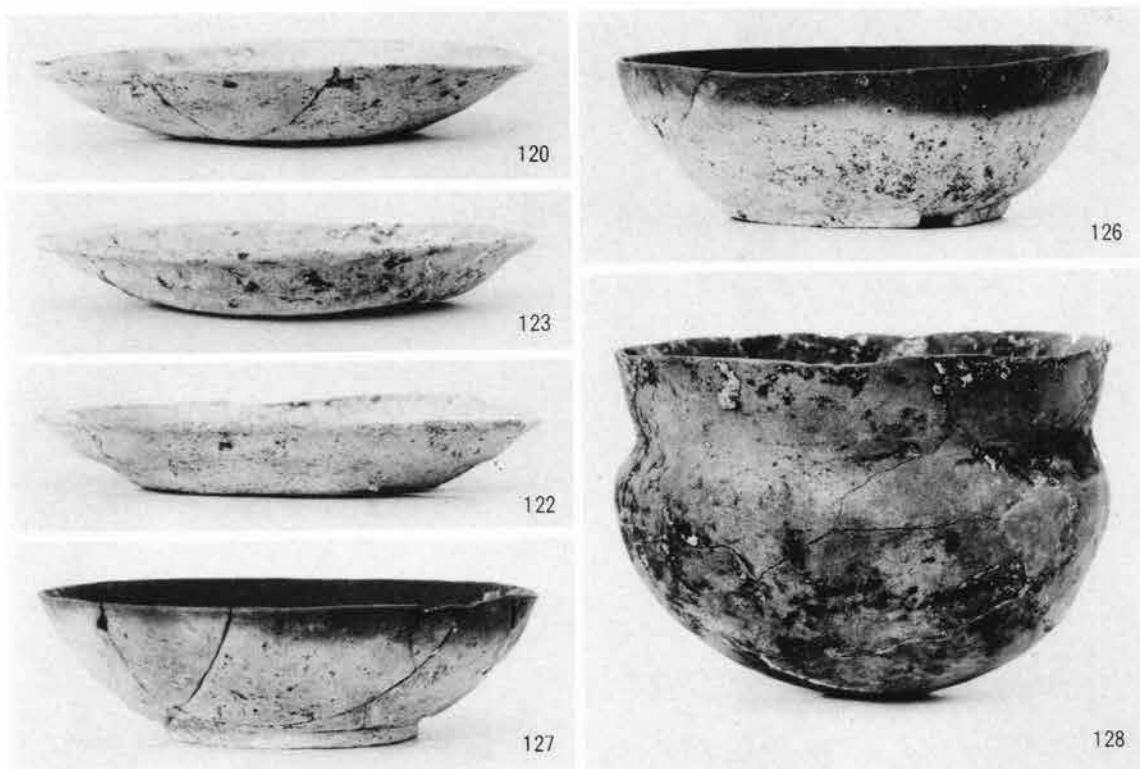
76



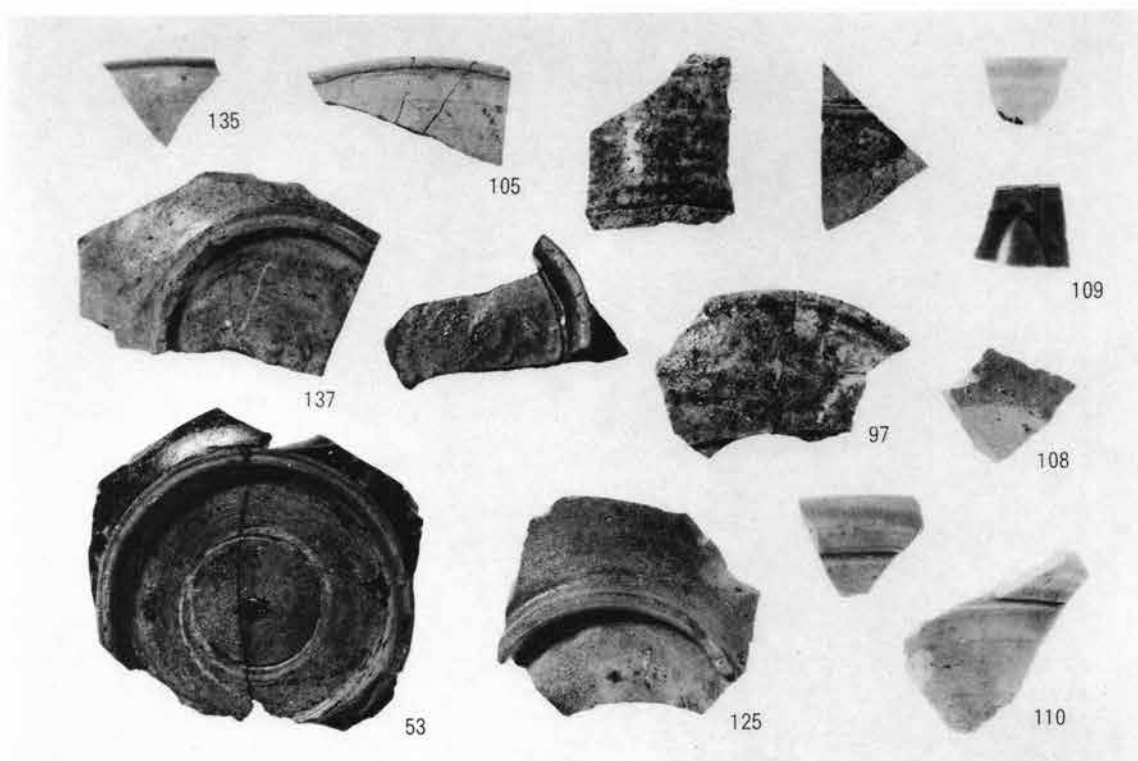
86



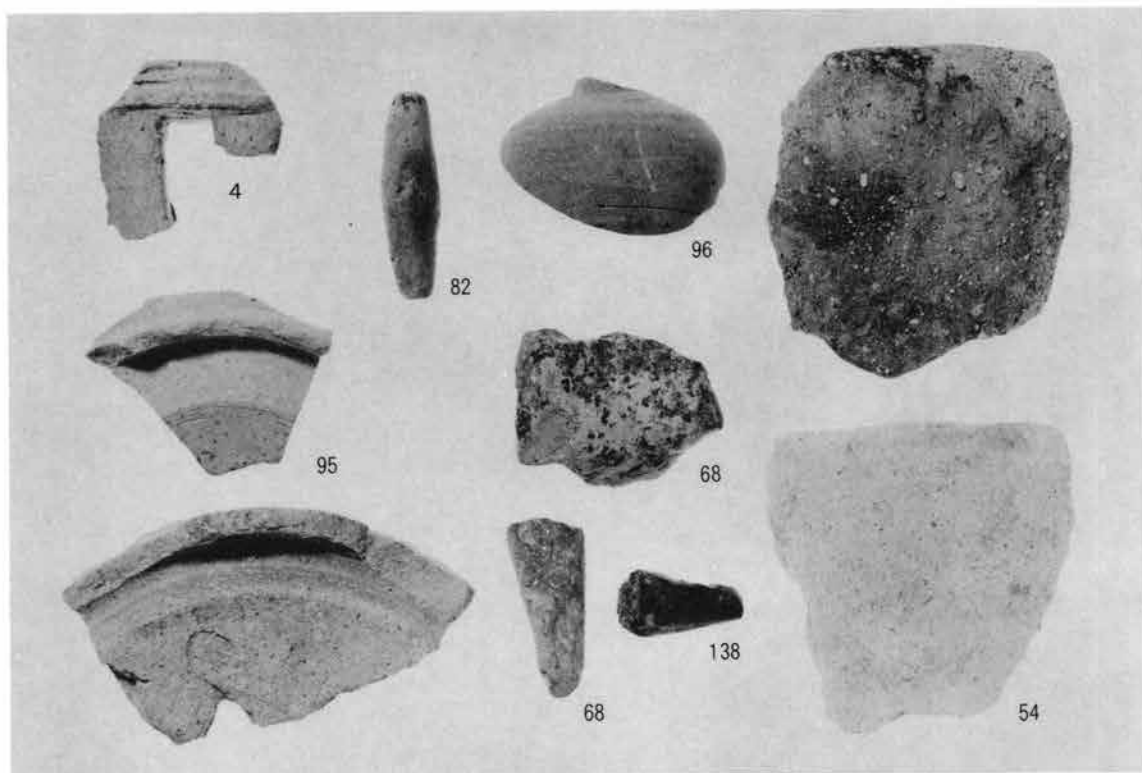




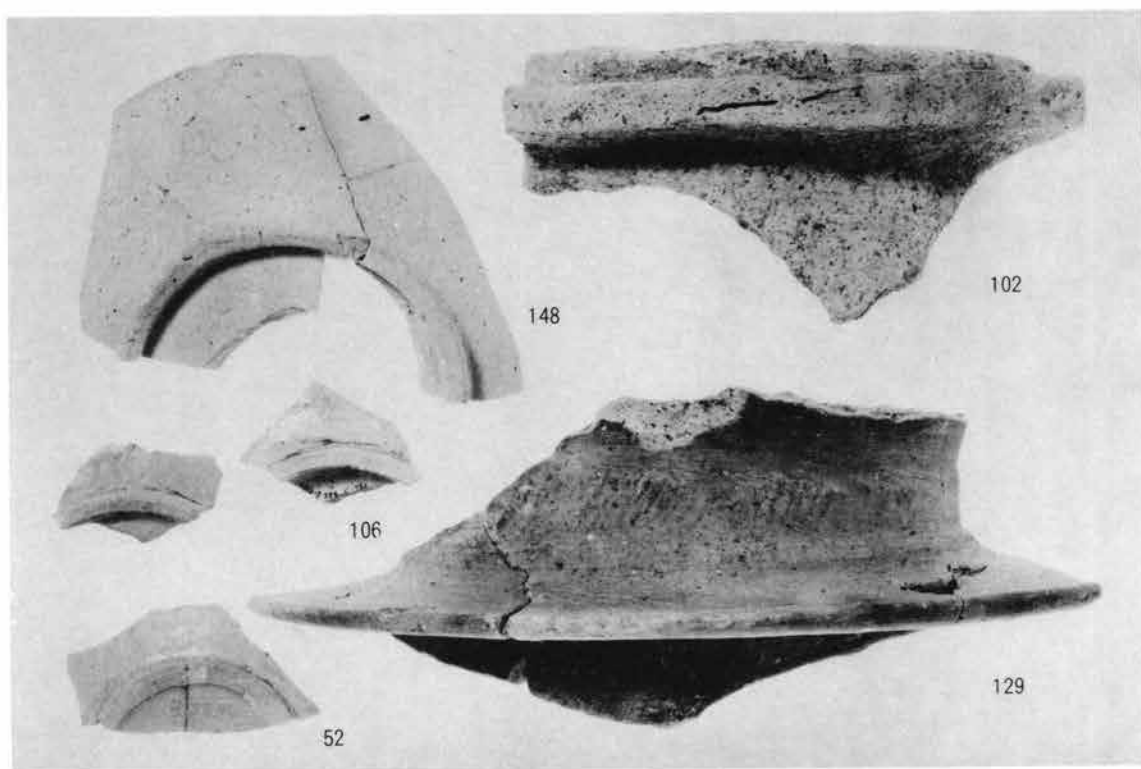
(1) 第8トレンチSD8385 出土遺物



(2) 第8次出土遺物 緑釉・灰釉・白磁・青磁



(1) 硯・土錘・土馬・製塩土器・小壺



(2) 灰釉・緑釉・土師器羽釜

京都府遺跡調査概報 第42冊

平成3年3月20日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

TEL (075) 933-3877 (代)

印刷 株式会社 中村太古舎

〒520 大津市京町三丁目4-32

TEL (0775) 24-4370 (代)